

令和3年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)

研究開発報告書

第3年次



かみやま

徳島県立城西高等学校神山校

本報告書は、文部科学省の委託事業として、徳島県教育委員会が実施した令和３年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

は じ め に

校 長 阿 部 隆

本校は、令和元年度より文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の研究指定を受け、地域をフィールドとして学びや地域発展に貢献する中で、神山校の活性化に取り組んでまいりました。その中で特に「中山間地の地域内循環モデルの構築」をテーマとし、令和元年度より研究開発に取り組んでおります。この度、本事業の最終年度としての3年目を迎え、これまでの取組とその成果並びに課題について、研究開発に関する実践報告書をまとめることができました。

本報告書の作成にあたり、関係の皆様方からの御支援並びに御協力により完成させることができましたことに、心より感謝申し上げます。

本校は、県都徳島市に隣接する名西郡神山町に存する全校生徒87名の小規模校です。令和元年度に学科再編し、地域創生類を設置しており、その中で地域と連携した教育活動を推進し、地域に根ざした持続可能な循環型の農業教育を通じて学校の活性化を図り、地域産業や地域社会に貢献できる人材の育成に取り組んできております。

神山町は、鮎喰川の上流域に位置し、周囲を山に囲まれた中山間地で林業を中心に栄えてきた経緯があるものの、長年の林業不振により衰退の一途をたどっています。また、現在の人口は約5000人と人口減少に併せ高齢化が著しく進行、そのことで、耕作放棄地を増加させるなど農林業離れに拍車をかける現状あり、これらのことが、町存続の大きな課題となっています。

2015年に策定した神山町の創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」により、課題解決に向け具体的な施策とそれらを推進していく組織「一般社団法人神山つなぐ公社（以下、神山つなぐ公社という。）」が設立された。神山つなぐ公社は神山町活性化のためのプロジェクトを実現していくために、町内外の様々な人、企業、関係団体、学校等に働きかけ、施策の実現に向けて協働した取組を強力に推進するとともに神山町も令和6年度には「神山まるごと高専」の開校を目指すなど、教育振興による地域活性化を推進しています。その中で、神山校は、神山町の未来につながる地域教育の拠点として位置付けられ農業高校ならではの専門性を活かした地域連携や地域の魅力づくり、地域への担い手育成に向けた取組に大きな期待が寄せられています。一方、学校も神山町との連携により、多くの実践的活動を取り入れ、学校のさらなる活性化を目指し日々積極的に連携を進めているところであります。

地域の思いや願い、期待と神山校が思い描く教育の方向性を結び付けるために学校設定科目「神山創造学」を設定し、地域貢献の足がかりとすべく取り組んでいます。また、平成29年度からは、神山校の教職員と神山つなぐ公社等の職員が中心となり、町全体を学びの場として捉えた体験的学習を探究してきました。さらには、その他の科目でも、神山町の施策に連動したプロジェクトに生徒自身が関わることで、町役場や地域住民、企業、大学等と連携した教育、学校と地域との協働による学びを年々深めつつあります。

しかし、昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大の影響により、学校においては感染対策を講じる中で、かなり制限された取組となってしまう、本事業の様々な場面において活動の見直しを検討し、特に重要な学習活動への動機付けや地域との協働学習での関わり方の検討など実践のためのいくつかの課題解決に苦慮した2年間でした。

その中でも本事業での趣旨や目的をしっかりと踏まえ、「神山創造学」並びにその他の教育活動を深化させる中でコロナ対策を万全にした上で新たな取組を実践しつつ、その成果と課題を検証してまいりました。

特に3年間の本事業を通して、神山校と地域の連携・協働の在り方やカリキュラム開発を推進していく必要があることが確認できました。

これらの成果と課題については、これまでの3年間で踏まえ、学校と地域で共有し、今後の地域との協働に生かせるようさらに検討・推進してまいります。これまでの本事業実施に御協力くださったコンソーシアムを構成する神山町をはじめ、神山つなぐ公社、株式会社フードハブプロジェクト、大学、県教育委員会、地元教育機関等、多くの関係者の方々、そして御指導並びに御助言をいただきましたすべての皆様に深甚なる感謝を申し上げ、冒頭の挨拶とさせていただきます。

目 次

I 研究開発実施報告（要約）	1
II 研究開発の内容	9
1 「神山創造学」の再構築	11
（1）全体指導計画	11
（2）神山創造学の取組	15
（3）キャリア教育の取組	35
（4）基礎学力の強化	39
2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備	
（1）造園教育における「専門人材の配置」	41
（2）多様な地域連携を実現する教育課程の構築	42
① 筆文字研修	42
② 海洋自然研修	43
③ SDGs 研修	45
④ 林業体験	46
3 地域の生産・交流拠点の創出	49
（1）シードバンクとしての機能	49
① 神山小麦の栽培・加工	49
② 神山蕎麦の栽培	52
（2）道の駅販売活動	54
4 地域を学びの場とした実践	56
（1）神山町をフィールドとした「森林ビジョン」	56
（2）耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」	62
III コンソーシアム会議	75
1 本年度コンソーシアム会議について	77
（1）第1回全体会報告	77
（2）第2回分科会報告	89
① まめのくぼプロジェクト環境部門	89
② まめのくぼプロジェクト食農部門	89
③ 地域留学生のキャリア意識	90
（3）第3回コンソーシアム会議・運営指導委員会	92
IV 成果・課題	103
V 資 料	107
1 目標設定シート	109
2 教育課程	111

I 研究開発実施報告（要約）

1 研究開発名

地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～

2 研究開発概要

次の項目を、神山校を中心としたコンソーシアムと連携して取り組む。

- (1) 「神山創造学」の再構築 (2) 地域性を生かした質の高い教育環境の整備
(3) 地域の生産・交流拠点の創出 (4) 地域を学びの場とした実践

3 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 ☒ 開設している ・ ☐ 開設していない
・教育課程の特例の活用 ☒ 活用している ・ ☐ 活用していない

4 運営指導委員会の体制

氏 名	所 属 ・ 職	備 考
前田 洋一	鳴門教育大学大学院学校教育研究科 高度学校教育実践専攻 教授	学識経験者 カリキュラム開発，学校組織 マネジメント
鎌田 磨人	徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 教授	学識経験者 生態系管理工学
向井 理恵	徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 准教授	学識経験者 食品化学，栄養化学
松山 隆博	徳島文理大学保健福祉学部 准教授	学識経験者
高田 研	都留文科大学教養学部 特任教授	学識経験者
隅田 徹	株式会社プラット・イーゼ 会長	学識経験者
中山 竜二	認定特定非営利活動法人 グリーンバレー 理事長	学識経験者
高橋 博義	神山町教育委員会 教育長	関係行政機関の職員
久保 素弘	城西高等学校神山校 学校評議員	学校教育に専門的知識を有する者
佐山 哲雄	徳島県教育委員会学校教育課 キャリア・消費者教育担当 室長	関係行政機関の職員

5 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機 関 名	機 関 の 代 表 者 名
徳島県教育委員会	教育長 榊 浩一
徳島県立城西高等学校神山校	校長 阿部 隆
神山町	町長 後藤 正和
一般社団法人神山つなぐ公社	代表理事 馬場 達郎
株式会社フードハブ・プロジェクト	共同代表取締役支配人 真鍋 太一
徳島大学	学長 野地 澄晴
鳴門教育大学	学長 山下 一夫
大正大学	学長 高橋 秀裕
株式会社えんがわ	代表取締役社長 隅田 徹
Sansan 株式会社	代表取締役社長 寺田 親弘
認定特定非営利活動法人グリーンバレー	理事長 中山 竜二
神山町林業活性化協議会	会長 後藤 正和
特定非営利活動法人里山みらい	理事長 佐々木宗徳
神山町下分保育所	所長 楠 貴代
神山町広野保育所	所長 西橋 宏子
神山町神領小学校	校長 楠 達也
神山町広野小学校	校長 河上 正信
神山町神山中学校	校長 高橋 敬治

6 カリキュラム開発専門家，地域協働学習支援員

分 類	氏 名	所 属 ・ 職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	尾崎 士郎	鳴門教育大学 特命教授	報償費
カリキュラム開発専門家	安永 潔	四国大学経営情報学部 准教授	報償費
カリキュラム開発専門家	佐野 恵里	徳島県教育委員会 学校教育課高校教育・GIGA 担当 指導主事	なし
カリキュラム開発専門家	中川 望	徳島県教育委員会 学校教育課回帰創出・消費者教育担当 指導主事	なし
地域協働学習実施支援員	森山 円香	一般社団法人神山つなぐ公社 理事・ひとづくり担当	社会人講師
地域協働学習実施支援員	秋山 千草	一般社団法人神山つなぐ公社 ひとづくり担当	社会人講師
地域協働学習実施支援員	梅田 學	一般社団法人神山つなぐ公社 ひとづくり担当	社会人講師
地域協働学習実施支援員	樋口明日香	株式会社フードハブ・プロジェクト 食育係	社会人講師

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業 務 項 目	実施期間(令和3年4月1日～令和4年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」におけるフィールドワーク			○	○								
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」における活動報告				○			○					
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」によるプロジェクト活動			○	○		○	○	○	○			
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」による活動報告				○				○			○	
「課題研究」における活動（環境デザインコース・食農プロデュースコース）			○	○	○	○	○	○	○	○		
キャリア教育充実における仕事体験					○		○		○			
キャリア教育充実におけるインターンシップ					○							
キャリア教育充実における講話			○	○					○			
他教科等と関連させた指導			○	○			○	○				
基礎学力の強化のための「学びの基礎診断」		○								○		
地域性を生かした「専門人材の配置」								○	○			
地域性を生かした「スタディツアー」							○					
地域の生産・交流拠点としての「シードバンク」			○	○			○					
地域の生産・交流拠点としての「校庭マルシェ」								○				
地域を学びの場としての「森林ビジョン」			○		○		○					
地域を学びの場としての「耕作放棄地対策」				○	○	○	○	○	○			
地域を学びの場としての「石積み修復」				○	○	○	○	○	○			
神山創造学での副読本制作			○	○		○	○					
コンソーシアム会議			△				△				△	
運営指導委員会											△	
カリキュラム開発等専門家									△			
コンソーシアムプロジェクトチーム会議	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

○「神山創造学」の再構築

「神山創造学Ⅰ」では、生徒が町内のフィールドワークを通じて、歴史・文化・暮らし・産業などの調査を行った。「神山創造学Ⅱ」では、地域の行政機関や地元企業と協働して、課題解決に向けたプロジェクト学習に取り組んだ。増設2単位分で、耕作放棄地の有効利用について実施し、石積み修復や景観修復、地域性種苗の栽培と加工、商品開発に取り組んだ。そして3年次での「課題研究」に発展できるよう、活動内容報告会を年間2回実施した。

○地域性を生かした質の高い教育環境の整備

造園教育での高度資格取得に挑戦するため、県造園協会から講師を招聘しキャリア教育における資格取得の向上や、耕作放棄地対策についての取組を雑誌編集経験者やフリーライターから

指導助言を受け学校設定科目副読本を作成した。スタディーツアーでは、山と海のつながりを知るため海陽町で生徒研修を実施した。また、カリキュラム開発等専門家の指導助言を受け、校内は場の有効活用について、コースごとのビジョンを共有し考えることができた。

○地域の生産・交流拠点の創出

地域性種苗のコムギとソバを栽培し、校内で種を保管できるようになった。また、「道の駅 神山」で農産物や花苗の販売、課題研究成果発表と「神山創造学Ⅱ」のチームプロジェクトを実施する場としてイベントを実施した。学校防災クラブの炊き出し訓練の実施と城西高校農業科も参加して合同開催となったので、来場者も多く、活動発表の機会に恵まれた。

○地域を学びの場とした実践

学校の演習林や、町内の耕作放棄地や石積み修復を学びの場として、教科書や実習で学んだことを生かした様々な取組を実施した。森林ビジョンでは、町と連携し1年生が林業研修を実施した。耕作放棄地の取組は、「神山創造学Ⅱ」増設2単位分の活動に位置づけて取り組み、コース学習の要となって意欲的に活動する生徒の姿が見られた。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

○「神山創造学Ⅰ」（2単位）第1学年対象 ※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員3名、1学年担任1名、地域協働学習実施支援員1名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考査

学習内容：・「神山創造学」を学ぶにあたって ・地域の現状を学ぶ

・地域の課題解決に向けた取組み ・職業体験プロジェクト

・聞き書きプロジェクト ・調査のまとめと発表

○「神山創造学Ⅱ A」（4単位）第2学年環境デザインコース対象

※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員4名、2学年担任1名、地域協働学習実施支援員3名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考査

学習内容：・チームプロジェクト（課題調査、課題解決の実践など）

国際交流、神農祭、神山PR、地域貢献、環境保全の5チーム毎に実施

・まめのくぼプロジェクト景観創造活動

・プロジェクトのまとめと発表 ・活動報告作成

○「神山創造学Ⅱ B」（4単位）第2学年食農プロデュースコース対象

※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員4名、2学年担任1名、地域協働学習実施支援員3名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考査

学習内容：・まめのくぼプロジェクト（景観修復・6次産業化学習活動）

・プロジェクトのまとめと発表 ・活動報告作成

○「課題研究」（4単位）第3学年対象

教科「農業」の科目、総合的な学習（探究）の時間の代替科目

指導体制：農業科教員3名、3学年担任1名、地域協働学習実施支援員1名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度，実施状況）」「プリント等の記録」

主な内容：・課題の設定　・調査・研究・実験・作品製作等　・中間発表
・課題研究「実践集」原稿作成　・課題研究発表会

- ③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

○「フードデザイン」（2単位）第2学年対象 「神山創造学ⅡB」と関連した指導

- ・小麦の素材要素について学習し，栽培と生活文化の関連性について考えた。
- ・地域性種苗の重要性と商品開発の可能性について地域の食品製造企業の方から，焼き菓子製造を通して6次産業化に関する学習を行った。

- ④ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

カリキュラム編成チーム（教頭，教務主任，農場長，地域協働学習実施支援員）において，次年度の教育課程，教員の配置，教科横断的な学習，各教科評価方法等について協議し教科間の接続内容や効果について協議し実施した。また，コンソーシアム会議で本校教員全員が分科会ごとに協議に加わり，コンソーシアムメンバーへ本校教育活動を報告し共有していくことで，生徒の実態に合わせた地域との協働が推進できるようになった。

- ⑤ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割，それを支援する体制について）

研究開発事務局は，企画運営担当，大学連携担当，企業連携担当，広報推進担当，経理担当の5チームからなり，組織的な取組となるように，企画・立案や推進体制について教員全体で共有した上で検討を行い，実施に当たっては管理職が各チームの調整や監督を行った。

- ⑥ 学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

毎月のプロジェクトチーム会議において，本事業の実施状況や今後の進め方，研究成果の振り返りと評価を管理機関からの指導助言をいただきながら実施し，学校長の判断・指示を仰いだうえで研究開発を進めた。

当該年度の取組について，生徒・教職員による自己評価，運営指導委員会からの指導助言，学校評価委員会からの評価，コンソーシアムメンバーからの指導助言等も踏まえて，事業遂行に関する課題を設定し，計画の修正を行うなどの改善を行った。

- ⑦ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

カリキュラム開発等専門家会議において，「神山創造学ⅡA，B」について学習の深化を図る計画と地域における耕作放棄地の新たな環境整備，現有実習地の効果的利用について協議を行った。コンソーシアム会議では，カリキュラム開発等専門家からの意見を踏まえて分科会を設定し，キャリア教育や農業教育等の本校教育活動において地域とどのような連携・協働が可能になるかを協議した。

- ⑧ 運営指導委員会等，取組に対する指導助言に関する専門家からの支援について

運営指導委員会において，学習評価の方法や脱炭素化を取り入れたSDGsに関する学習方法の提案，町内の保小中との農業を通じた連携等について指導助言をいただいた。特に「体験の経験化」について，体験させる前に課題を考えさせ課題体験型学習とすることで経験として積み重ねていき，その経験がまた次の体験につながるように課題を設定して考えさせていくことの重要性を全職員で共有し，日頃の学習活動で意識をしながら取り組むようになった。

- ⑨ 類型毎の趣旨に応じた取組について

「神山創造学」及び「課題研究」では，生徒が町内でのフィールドワークを通して，地域の人との関係性を育み，地域で受け継がれてきた文化，仕事，産業について調査や研究を深め，そして地域の課題に気づき，それらを基にして本人が探究したいテーマを設定し解決していくことを

学んでいる。3年間で地域の人と関わっていくことや、地域内の環境、食農、経済における地域内循環システムを自らが体験することで、地域の一員として具体的に果たすべき役割を自覚し、課題研究で学んだことを将来の進路に生かせることができた。今後は神山創造学での学びについて、地域と協働することを視点において研究課題を改善することで、生徒の研究実践の取組を地域内で共有することができ、定期的に地域からの点検・評価を受けながら、機動性のあるコンソーシアム組織として継続させていく。

⑩ 成果の普及方法・実績について

○課題研究発表会の開催についてのチラシの作成・地域への配布を行うとともに、課題研究報告集の編集を行った。

※配布先（本校教職員20名、本校生徒85名、R4新入生30名、発表会参観者40名）

○学校ホームページに研究開発の取組内容を掲載し、閲覧者数を伸ばすことができた。

○社団法人神山つなぐ公社主催の「神山つなぐプロジェクト報告会」において研究開発の取組内容や、これまでの町との連携事業の成果を発表し、参加者に理解を得ることができた。

○今年度の研究開発を行った内容を冊子として編集し、関係機関等に配布する。

※配布先（本校教員20名、本校生徒56名、新入生30名、コンソーシアム18名、運営指導委員8名、カリキュラム開発等専門家2名、地域協働学習実施支援員4名、地域魅力化型指定校19校、県内の公立高校等45校、県教育委員会25冊）

Ⅱ 研究開発の内容

1 「神山創造学」の再構築

(1) 全体指導計画

授業実施一覧／神山創造学Ⅰ

日 程	時間数	大 項 目	内 容	配 布 物
4／14(水)	6	新入生合宿	・アイスブレイク ・体験学習 ・ふりかえり	
4／15(木)	6		・アイスブレイク ・カレー作り ・焚き火を囲んでのふりかえり	ふりかえりシート
4／21(水)	2	オリエンテーション	・新入生合宿の振り返り ・神山創造学とは	
4／28(水)	2	フィールドワーク準備	・人生グラフ ・公社馬場さんからまちの話、つなプロの話	人生グラフ記入シート
5／12(水)	2		7つのコース説明と選択	コース紹介シート 1学期の評価項目シート
5／19(水)	2 + 農当	フィールドワーク	・フィールドワーク ・ふりかえり	ふりかえりシート
6／2(水)	3 + 農当			ふりかえりシート
6／9(水)	3 + 農当			ふりかえりシート
6／16(水)	2	発表準備	発表の準備	発表準備シート
6／23(水)	2		・発表の準備 ・1対1で発表リハーサル	リハーサルフィールドバックシート
6／30(水)	2	発表	発表(1人4分)	
7／7(水)	1	期末考査	・1学期のふりかえり ・作文	テスト用紙
7／9(金)	1	1学期のふりかえり	・授業フィードバック ・しごと体験希望調査	付箋
9／8(水)	2	オリエンテーション	・授業フィードバックに返答 ・「まちぐるみしごと体験」とは	2学期スケジュール 2学期授業概要
9／15(水)	2	2年生の体験談	・2年生によるインターンシップ体験談 ・「なぜ僕らは働くのか」視聴	感想シート
9／22(水)	2	しごと体験先の決定	・事業所候補から希望先選択 ・自己紹介シート記入	自己紹介シート
9／29(水)	短2	卒業生の話	・田中くんのしごと体験、インターン、進路選択	感想シート
10／6(水)	2	しごと体験準備	・電話の掛け方 ・日報の書き方 ・体験後の発表内容について	仕事体験の詳細情報 日報、電話の掛け方
10／13(水)	6	しごと体験		
10／14(木)	6			
10／27(水)	2	しごと体験ふりかえり	・3人1組でふりかえり ・お礼状下書き	お礼状のサンプル、便箋
11／10(水)	2	発表準備	・発表に向けて資料、原稿作成 ・発表評価について説明	発表原稿下書きシート 評価基準シート
11／17(水)	2		資料、原稿作成	発表原稿下書きシート
11／24(水)	2	発表	・3つのグループで発表 1人5分 ・聞き手は付箋にコメント記入	
12／10(金)	1	期末考査	・2学期のふりかえり ・作文 ・授業フィードバック ・聞き書き希望	テスト用紙、フィードバックシート
12／21(火)	2	2学期ふりかえり	授業フィードバック、しごと体験希望へ返答	
1／12(水)	短2	オリエンテーション	聞き書きテーマ選び	
1／19(水)	2	聞き書き準備	・2年生2人から体験談 ・質問準備	体験談の感想・メモ記入シート 「聞き書き研修」テキスト抜粋資料
1／26(水)	2	聞き書き	60～90分間(オンライン)	
1／27(木)	2	文字起こし		
2／9(水)	2	興味関心について深める	・聞いた話の整理 ・興味関心探し	文字起こし原稿
2／16(水)	2			
2／22(火)	3	発表準備		
3／3(木)	2	発表		
3／4(金)	1	期末考査	・3学期のふりかえり ・作文 ・授業フィードバック	
3／16(水)	1	3学期ふりかえり	・授業フィードバックへ返答	
3／17(木)	3	四国大学特別授業	・ボードゲームを通して、他者理解を深める	

授業実施一覧／神山創造学Ⅱ チームプロジェクト

日 程	時間数	大 項 目	内 容	配 布 物
4／19(月)	2	1 学期オリエンテーション	・ チームプロジェクトについて ・ テーマのアイデア出し（ワールドカフェ形式）	ノ ー ト
4／26(月)	2	テーマ・チーム決め	・ チームプロジェクトの進め方 ・ 小グループでテーマについて再考 ・ チーム決め ・ 新チームで話し合い	
5／10(月)	2	チーム活動開始	・ チームで今後に向けた話し合い ・ チームビルディングのためのアイスブレイク	
5／17(月)	2	チーム活動		
5／31(月)	2			
6／7(月)	2			
6／14(月)	2			
6／21(月)	2	中間報告の説明，資料準備	・ 中間報告での発表について ・ 司会，発表順決め ・ 発表準備	
6／28(月)	2	資料準備	発表準備	
7／5(月)	2	リハーサル，資料準備	・ 2 グループに分かれてリハーサル・フィードバック	
7／12(月)	2	・ 中間報告	・ 全校生徒へ中間報告 ・ 発表後，チームごとのブースでフィードバック ・ チームで振り返り ・ 個人で振り返り	
9／6(月)	2	2 学期オリエンテーション	・ 話し合い練習（合意形成ゲーム） ・ 2 学期の目標・計画・役割分担確認	・ ゲーム説明 ・ 2 学期のスケジュール
9／13(月)	2	チーム活動		
9／27(月)	2			
10／4(月)	2			
10／11(月)	2			
10／18(月)	2			
10／26(火)	2			
11／2(火)	2			
11／9(火)	2			
11／16(火)	2			
11／30(火)	2	振り返りについて	チームの振り返り／個人の振り返りについて	振り返りについて
12／7(火)	2	チームごとの振り返り		
1／18(火)	2	発表準備		
1／25(火)	2	3 学期オリエンテーション	・ 発表会に向けて ・ 発表の見本サンプル提示（フードロスプレゼン）	・ 発表内容資料 ・ プレゼン評価資料
2／1(火)	2	発表準備		
2／8(火)	2	リハーサル①	・ 発表順，司会決め ・ 発表準備	
2／15(火)	2	発表準備		
2／18(金)	2	リハーサル②	まめのくほの時間を使用し，追加で準備	
2／21(月)	3	最終報告	・ リハーサル（会場準備・投影確認） ・ 1 会場で1年生・先生向けに発表（発表7分 質疑5分）	発表会コメントシート
2／22(火)	2	振り返り	・ チーム混合グループで振り返り ・ 3 学期の成績評価	発表会コメントシート

授業実施一覧／神山創造学Ⅱ コースプロジェクト
環境デザイン

日 程	時間数	大 項 目	内 容	配 布 物
4／22(木)	2	合同オリエンテーション	年間の活動イメージをもつ	
5／6(木)	2	石積み	床堀り	
5／13(木)	2			
5／20(木)	2		ビデオ鑑賞	
6／3(木)	2		床堀り	
6／10(木)	2		床堀り	
6／17(木)	2	フィールドワーク	郁子さん、浩代さんの話を聞いてまめのくぼの活動のこれからをイメージする	
6／24(木)	2	石積み	床堀り	
7／2(金)	2	学年合同共有会 期末考査の説明	・写真を見せながら、食農、環境の取り組みを伝え合う ・期末考査についての説明 ※各自で記入して、担当教諭に提出	ふりかえりシート 作文用紙
9／9(木)	2	石積み	実際に石を積む	
9／16(木)	2	フィールドワーク	・KAMIYAMA BEER 見学 ・神山小麦の加工について	
10／7(木)	2	石積み		
10／14(木)	2	サンゴの事前学習		
11／10(水)	2	石のピックアップ	建設現場からの石のピックアップ	
11／17(水)	3	石積みレクチャー	金子さんより石積みのレクチャー	
11／19(金)	2	周辺整備	修復した石積み周辺の掃除	
12／3(金)	2	学年合同共有会 期末考査の説明	・写真を見せながら、食農、環境の取り組みを伝え合う ・期末考査についての説明 ・作文記入のためのデータを送信 ※各自で記入して、担当教諭に提出	ふりかえりシート 作文記入用のデータ
1／14(金)	2	伐木	杉櫓の伐木	
2／4(金)	2			
2／18(金)	1	発表会準備		
2／25(金)	2	伐木	杉櫓の伐木	
3／3(木)	2	実習 試験オリエンテーション 期末考査の説明	・杉櫓の伐木 ・期末考査についての説明 ・作文記入のためのデータを送信 ※各自で記入して、担当教諭に提出	ふりかえりシート 作文記入用のデータ

食農プロデュース

日 程	時間数	大 項 目	内 容	配 布 物
4／22(木)	2	合同オリエンテーション	年間の活動イメージをもつ	
5／6(木)	2	栽培	茶摘み	
5／13(木)	2	栽培	小麦の観察・記録	
5／20(木)	2	栽培計画／クッキー試食	・まめのくぼの圃場の栽培計画を立てる。 ・本校の生徒たちの神山小麦のクッキーを試食する	
6／3(木)	2	小麦選別／オンライン交流	・小麦の選別 ・オンライン交流は有志3名（クッキーの感想を伝える）	
6／10(木)	2	栽培	小麦選別	
6／17(木)	2	フィールドワーク	郁子さん、浩代さんの話を聞き、まめのくぼの活動のこれからをイメージする	
6／24(木)	2	栽培	小麦選別	
7／2(金)	2	共有会（環境・食農合同）	写真を見せながら、食農、環境の取り組みを伝え合う。	
9／9(木)	2	栽培	蕎麦の播種	
9／16(木)	2	フィールドワーク	・KAMIYAMA BEER 見学 ・神山小麦の加工について	
10／7(木)	2	製粉	・かまパンで製粉 ・神山小麦のパンを試食する	
10／14(木)	2	サンゴの事前学習		
11／19(金)	2	管理	・まめのくぼの圃場の整備・掃除	
12／3(金)	2			
1／14(金)	2	栽培	・蕎麦の選別	
2／4(金)	2	実食	・蕎麦の実の殻を取り、茹でて試食（中国産との比較）	
2／18(金)	1	発表会準備		
2／25(金)	2	管理	・茅の根っこ抜き	
3／3(木)	2	試験オリエン・実習		

授業実施一覧／課題研究

日 程	時間数	大 項 目	内 容	配 布 物
3／19(金)	2	課題研究に向けて	・発表会へのコメント共有 ・まめのくぼ振り返り ・課題研究オリエン ・どんな課題研究にしたい？（グループ） ・キーワード探し（個人）	キーワード探しシート
4／13(火)	短2	1学期オリエンテーション	・課題研究とは ・性格分析ワーク ・1学期成績評価について	ノート
4／16(金)	短2	テーマ設定	ハテナづくりワーク	ハテナづくりワークシート
4／20(火)	2		・センパイの事例① テーマ設定のポイント ・研究計画書の書き方	センパイの例ワークシート 研究計画書
4／23(金)	2		・活動資金について、ふるさと納税の説明 ・センパイの事例② ハテナを探すワーク ・小グループで相談	
4／27(火)	2	研究計画・活動	・「社会」側から困りごと&活動提案 ・研究計画書づくり	
5／11(火) 14(金)	各2 ×2回		各自活動	
5／18(火)	2		研究計画書提出	
5／21(金)	2		小グループで研究計画発表会	研究計画書コピー（小グループ分）
5／28(金) ～6／11(金)	各2 ×5回		各自活動	
6／15(火)	2		中間報告会の説明	
6／18(金)	短2		中間発表会グループ分け ・司会決め	
6／22(火) ～29(火)	各2 ×3回		各自活動	
7／1(木)	2	中間発表会	・2会場で全校生徒へ発表（発表7分 質疑3分）	発表評価シート
7／8(木)	2	期末考査	・1学期自己評価 ・2学期活動計画	1学期振り返りシート
7／16(金)	2	1学期振り返り	・中間発表（欠席者3組） ・振り返りシート&発表評価返却 ・1学期授業振り返り（グループワーク）	
9／7(火)	2	2学期オリエンテーション	・2学期のスケジュール ・活動計画相談	
9／10(金) ～24(金)	各2 ×4回	活動	各自活動	
9／28(火)	2		小グループで状況報告・相談	
10／5(火) ～25(月)	各2 ×4回			
10／28(木)	2	甲斐かおりさん特別授業	・ライターの仕事について ・書くワーク	
11／1(月)	2	作文	・作文のポイント、必須項目 ・進め方（提出締め切り12／6）	作文について
11／4(木)	2			
11／8(月)	短1			
11／11(木)	短2		一次提出	
11／18(木)	2		添削返却、清書	
11／22(月) ～29(月)	各2 ×3回			
12／2(木)	2	発表準備	発表会に向けて	発表会について
12／6(月)	2	2学期振り返り	・2学期自己評価 ・3学期目標設定 ・発表会への要望	2学期振り返りシート
12／16(木)	2	発表準備		
12／20(月)	2		・振り返りシート&作文評価返却 ・2組ずつリハーサル	
1／13(木)	短2	3学期オリエンテーション	・3学期成績評価 ・発表会への要望へ応答 ・発表順・司会決め	
1／17(月)	2	発表準備		
1／20(木)	3		・会場設営 ・全体リハーサル	
1／21(金)	3	課題研究発表会	・2会場で全校生徒へ発表（発表8分 質疑5分）	*オンライン配信
1／24(月)	2	3学期振り返り	・コメントシート返却 ・ポジティブフィードバック ・3学期自己評価 ・先生から総括 ・動画上映	発表会コメントシート 3学期振り返りシート

(2) 神山創造学の実践

① 神山創造学Ⅰについて

a 神山創造学の目的

神山町内の聞き取り調査やフィールドワークを通じて、その歴史・文化・暮らし・産業などについて、調査を行い、里山の景観保全や中山間地域における農業生産をはじめとする町内の現状や課題について理解を深めるとともに、地域の将来を見据えた施策を行う行政や地域住民らと協働して、その課題解決に向けてプロジェクト学習に取り組む。プロジェクト学習を通じて、職業観・倫理観の涵養を図るとともに、地域の課題を主体的に考え、行動できる意欲や態度を育て、将来的に地域の中心となって活躍できる人材の育成を目的とする

(授業を通して育成したい力)

他者と関わりながら自分の頭で物事を捉えていくための基礎的な力

伝える力 : 自分の感情や考えを言語化・視覚化することによって表現し、発信していく力

協働する力 : 多様な価値観や背景を持つ他者と関わり、対話を通して物事を進めていく力

深める力 : 体験からの内省を通して教訓や新たな課題を獲得し、探究・解決しようとする力

b 実施内容

○一学期（神山を知るためのフィールドワーク）

目的（ねらい） | 何のためにするのか

- ・フィールドワークを通して様々なまちの人と言葉を交わし、3年間、まちで学ぶことが楽しみになっている。
- ・出会った大人の進路選択の話を聞き、自分自身の将来のことを考えてみる。
- ・フィールドワークで感じたことを本番やふりかえりで話し、「伝える」ことに慣れる。

目標（小ゴール） | 目的達成のために

- ・フィールドワークで出会うまちの大人から、進路選択の話を聞き、質問する。
- ・フィールドワークごとにレポートに感じたことを書き、仲間に共有する。
- ・フィールドワークで感じたことをまとめて、仲間に発表する。

評価 | 評価の対象

- ・期末考査での振り返り
- ・期末考査での作文

評価軸 | 振り返りの詳細

【伝える】

- ・感じたことを話し手や仲間に伝える

S	A	B	C
コミュニケーションの基本の全てに気をつけ、感じたことを具体的に話した。加えてより伝わり易くなる工夫を考え、実行した。	コミュニケーションの基本の3つ以上の項目に気をつけ、感じたことを具体的に話した。	コミュニケーションの基本1つ以上の項目に気をつけ、具体的ではないが話した。	コミュニケーションの基本、話しすることどころでもできなかった。

コミュニケーションの基本…表情、姿勢、声の大きさ、声の抑揚、視線、うなずき

・「伝える」本番に向けての準備

S	A	B	C
本番に向けて、毎週のレポートをしっかりと記入し、事前の時間を使って集中して準備し、実際に話す練習もした。加えて、授業外の時間でも努力をした。	本番に向けて、毎週のレポートをしっかりと記入し、事前の時間で集中して準備し、実際に話す練習もした。	本番に向けて、毎週のレポートを記入し、事前の時間で準備した。	レポートを記入や事前の時間で準備をあまりできなかった。

【深める】

・自分の興味関心を深めるための質問をする

S	A	B	C
聞いた話を元に質問するだけでなく、事前に関連することを調べた。それを元に質問を準備し投げかけた。	聞いた話を元に質問するだけでなく、質問を準備し投げかけた。	聞いた話を元に質問するだけでなく、質問を準備し投げかけた。	質問をほとんどできなかった。

・自分の興味・関心や将来について考える

S	A	B	C
フィールドワークや授業で気になったことを調べ、自分の将来や興味・関心を考え、何か行動した。	フィールドワークや授業で気になったことを調べ、自分の将来や興味・関心考えた。	フィールドワークや授業で気になったことを調べた。	特に何もできなかった。

【協働する】

・仲間へサポート

S	A	B	C
仲間の作業の進み具合や様子を見て、相手の個性に合わせたサポートを考え、積極的に実施した。	仲間の作業の進み具合や様子を見て、積極的に実施した。	仲間が手助けを必要としていることが明確な時は協力した。	ほとんど仲間の手助けはしなかった。

・自分の得意なことを生かして、グループ活動に関わる

S	A	B	C
自身の得意なことを理解し、状況に応じて活かした。合わせて、仲間の得意なところを見つけ、状況に応じて、協力の依頼ができた。	自身の得意なことを理解し、状況を見て活かした。仲間の得意なところを見つける努力をした。	自身の得意なことを理解し、状況を見て活かした。	自分の得意なことを活かさなかった。

授業日程

日 程	内 容
4 / 21	オリエンテーション（創造学とは、身につけて欲しい力、評価 など）
4 / 28	人生グラフを書いてみる 神山の取り組み（つなぐ公社代表理事 馬場さん）
5 / 12	フィールドワークのコース選択 コースについての調べ学習
5 / 19	フィールドワーク①
6 / 2	フィールドワーク②
6 / 9	フィールドワーク③
6 / 16	「伝える」ための準備①
6 / 23	「伝える」ための準備②
6 / 30	仲間に「伝える」本番、期末考査についての説明
7 / 15	振り返り

生徒の感想 ※一部を抜粋

（よかった点）

- ・神山の知らない事などを詳しく話を聞いたり、体験できなのが良かったと思った。
- ・普段は話す機会のない人の話を聞くことができ、とても良い経験になった。
- ・みんなの前で自分の意見を言う大切さが分かった。
- ・地域の大人と話せる機会があって考え方が広がった。もっとこのような時間が欲しい。
- ・発表（皆の前で喋ること）が苦手で、創造学で「必ず発表する」機会があるから、自信をつける事が出来たし、皆の発表を聞いて、発表の仕方が学べたことが良かった。

（改善して欲しい点）

- ・人と話し合う時間も、もちろん大事なことだと思うけれど、その前にある一人で考える時間をもう少しとった方がより良い内容の話し合いが出来るんじゃないかと思った。
- ・良いことだと思うけど、個人的には質問者に対して「なんでこのような質問をしたのか」を聞かれると、今度、質問できる人が少なくなるんじゃないかと思った。
- ・事前に準備する時間が少なかったからもう少し時間が欲しい。

〇二学期（まちぐるみ仕事体験）

目的（ねらい） | 何のためにするのか

- ・神山町内の事業所で働くことで、地域との関係性を育み、まちに知り合いを作る。
- ・しごと体験を通して人生観や仕事観を考え、言葉やその他の表現を使い他者に伝える。

目標（小ゴール） | 目的達成のために

- ・希望する（興味を持てる）職種を経験できる機会にする。
- ・よりよい機会にするために、OBOGや先輩の体験談を聞く場を作る。
- ・仕事体験の中でインタビューの時間を設け、「働く」について聞く時間を持つ。
- ・体験を通して考えたことを他者にプレゼンする機会を設ける。

評価 | 評価の対象

- ・期末考査（振り返りと作文）
- ・日報
- ・発表

評価軸 | 振り返りの詳細

【伝える】

- ・表現に困った時のヘルプメッセージの発信

S	A	B	C
何に困っているのかを具体的に言葉にし、自分なりの考えやアイデアを持って、自分から仲間や大人に助けを求めた。	何に困っているのかを具体的に言葉にし、自分から仲間や大人に助けを求めた。	何に困っているのかを言葉にではできないが、自分から仲間や大人に助けを求めた。	自分から、仲間や大人に助けを求められなかった。

- ・しごと体験の発表

S	A	B	C
より伝わる発表のための方法や工夫を調べ、自身でも考え、取り入れた。授業以外の時間でも話す練習をした。	より伝わる発表のための方法や工夫を、自身で考え、取り入れた。授業内でできる限り、話す練習をした。	発表に向けて、必要最低限（原稿作成）準備をした。	発表に向けて、十分に準備ができなかった。

【深める】

- ・他者の表現からの学習

S	A	B	C
他者の表現を見て、良い点とその理由を考え、取り入れた。他者と比較して、自分の伸ばすポイント考えた。	他者の表現を見て、良い点とその理由を考え、取り入れた。	他者の表現を見て、良い点取り入れた。	他者の表現を見て取り入れることができなかった。

- ・自分の興味・関心や将来について考察

S	A	B	C
しごと体験を通し、自分の将来や興味・関心について考え、言葉にし、そのことを授業以外でも人に共有し、その上で行動した。	しごと体験を通し、自分の将来や興味・関心について考え、丁寧に言葉にした。	しごと体験を通し、自分の将来や興味・関心について考えた。	自分の将来や興味・関心について考えることができなかった。

【協働する】

- ・事業者との信頼関係の構築

S	A	B	C
事業者の方に積極的に自分から話しかけ、信頼関係を作り、職場体験後も続く人間関係を作れた。	事業者の方に人から積極的に話しかけ、信頼関係を作れた。	事業者の方からの働きかけには応えた。	あまりコミュニケーションをとることができなかった。

日 程	内 容
9 / 8	一学期の振り返り 二学期の授業説明（仕事体験の概要と目的について）
9 / 15	2年生インターンシップの体験談を聞く
9 / 22	体験先の選択、卒業生からのメッセージ
9 / 29	事前学習①（自己紹介シートの記入、）
10 / 6	事前学習②（電話の掛け方、日報の書き方、諸注意）
10 / 13・14	仕事体験本番
10 / 27	振り返り、レポートの記入、お礼状の作成
11 / 10	発表準備①
11 / 17	発表準備②
11 / 24	3グループに分かれて発表
12 / 1	振り返り

生徒の感想 ※一部を抜粋

（よかった点）

- ・一学期にはなかった先輩の話を聞くというのが良かった。
- ・仕事体験で仕事の大変さや楽しさが学べて良かった。
- ・仕事先を選ぶさいに、生徒たちにどんな仕事がいいのか聞くのが良かった。
- ・友達や家族以外と電話や手紙をすることがほとんどなかったので、仕事体験の確認や終了後に教えてもらいながらも、体験ができて良かったです。

（改善して欲しい点）

- ・ちょっと堅苦しいと思う瞬間がある。
- ・フィールドワークをもっと増やしてほしい。
- ・発表の前の準備の時間がもっと欲しい。

○三学期（聞き書き）

目的（ねらい） | 何のためにするのか

- ・情報を整理して受け取る

1学期、2学期では話を聞いて、感想を伝える、書くという力を育んだ。3学期では、聞いた話を聞き直し、文字起こしすることで、情報を整理し、正確に受け取る力を育む。

- ・「神山のこと」から社会を読み解く

2学期ではしごと体験を通じて、自分への気づき、今後の自分にどう活かすかについて考えた。3学期の聞き書きでは、体験から社会とのつながりを考える力（深める力）を育む。

- ・チームプロジェクトの種を見つける

整理したものの中から、チームで話し合い課題を見つける力を育む。この経験を、2年生のチームプロジェクトにつなげられるといいと考える。

手段 | なぜ「聞き書き」なのか

- ・神山のじいちゃん、ばあちゃんの話は自分たちが体験していないことではあるが、教科書よりももう少し身近に感じられるので、興味関心を持ち取り組みやすいと考えているため。
- ・神山のじいちゃん、ばあちゃんが大切にし、積み重ねてきた生きる知恵や技術、そして心をして

いねいに聞くことで、みんなの将来を考えるヒントがあるかもしれないと考えているため。

目標（小ゴール） | 目的達成のために

- ・ 情報処理の時間で文字起こしをする。
- ・ グループごとの「聞き書き」を元に、深めるテーマを設定する。
- ・ グループごとで取り組んだテーマ、深めた考えを他のチームに発表する。
- ・ 授業最終日、チームメイトに授業を通しての気づきをメッセージで送る。

評価 | 評価の対象

- ・ 期末考査（振り返り・作文）
- ・ インタビュー後のレポート
- ・ グループ発表

評価軸 | 振り返りの詳細

【伝える】

- ・ 自分の感じたことや考えを伝える

S	A	B	C
仲間での話し合いを進展させることを意識しながら、自分の意見やアイデアを積極的に伝えた。	仲間に自分の感じていることや考えたことを積極的に伝えた。	自分から積極的に話すことはあまりなかったが、意見を求められた時には自分の考えを伝えた。	ほとんど話し合いに参加しなかった。

【深める】

- ・ 質問の事前準備

S	A	B	C
話を聞く方のことや周辺情報を事前にしっかり調べ、より深く話が聞けるように、個別の質問を準備した。	十分ではないが、話を聞くことに向けて、事前に周辺情報を調べ、質問を準備した。	下調べはできなかったが、質問は準備した。	質問をほとんど準備できなかった。

- ・ 事後の調べ学習

S	A	B	C
聞いた話や授業で気になったことをWEBや参考資料を使い調べた。その上で自分なりの考えを整理し、仲間に伝えた。	気になったことをWEBや参考資料を使い調べ、そのまま仲間に伝えた。	気になったことをWEBや参考資料を使い調べた。	特に調べることはしなかった。

【協働する】

・発表に向けての協力

S	A	B	C
より聞きやすい発表にする話し合いに積極的に協力するだけでなく、困っている仲間のフォローもした。	より聞きやすい発表にする話し合いに積極的に協力した。	積極的に協力できなかったが、求めに応じて協力した。	ほとんど協力できなかった。

・仲間への理解

S	A	B	C
授業中の仲間の言動を通じて、仲間の新たな一面（好み、得意不得意、個性）を具体的に発見し、接し方・話しかけ方を工夫した。	授業中の仲間の言動を通じて、仲間の新たな一面を具体的に発見した。	授業中の仲間の言動を通じて、具体的ではないが仲間の新たな一面を発見した。	仲間の新たな一面を発見できなかった。

授業日程

日 程	内 容
1 / 12	二学期の振り返り 三学期の授業説明（聞き書きについて、テーマ決定）
1 / 19	2年生より聞き書きの体験談を聞く 「聞き書き」の準備
1 / 26	「聞き書き」本番
1 / 26～2 / 1	文字起こし
2 / 2	聞いた話を元にディスカッション①
2 / 9	聞いた話を元にディスカッション②
2 / 16	聞いた話を元にディスカッション③
2 / 22	聞いた話を元にディスカッション④
3 / 3	テーマごとに深めた内容を共有
3 / 16	振り返り

生徒の感想 ※一部を抜粋

- ・聞き書きをして変化したことは、めんどくさがりの私が何回もやり直して少しでも皆がわかりやすいようにしたことです。後、自分からチームのために行動しようと思うようになりました。
- ・聞き書きを通して考えたことは、経験が大切だと思ったことです。話を聞いていると農業だけでなく、色々な仕事をやったり、3ヶ月ヨーロッパをヒッチハイクで旅したりと経験することによって学ぶことがたくさんあるんだなあと思いました。僕も一つの事だけでなく色々経験してみようと思いました。

c 取り組みの成果

神山創造学Ⅰでは、プロジェクト学習を進めるために必要な力を全員が習得できるように、同

じ課題に取り組んでいる。神山町全体を教室と見立てて授業を展開し、その中で、町内のことを知るだけでなく、様々な業種の大人と関わることで、生徒たちはたくさんの人生観と職業観に触れ、刺激を受けていると考えられる。また、自分の考えを言語化し、相手に伝える活動を積み重ねることで生徒の感想にもあったように、人前で話す事に自信がついたという生徒も出てきている。自分を表現し、他者の表現を受け入れる寛容さが身についているように思う。さらに、「伝える」「深める」「協働する」という活動は、社会生活を行う上で大切なことの1つである。意識して、その活動を生徒たちに提供している神山創造学では、生徒それぞれの習熟度に違いはあれど、確実にそれらの力を身につけることが出来ている。それは大きな成果の1つだと考えられる。

教員のスキルアップという点でも神山創造学Ⅰでの生徒との関わりは重要である。生徒が主体的に学ぶ環境を作るためにも教員のスタンスはとても重要な要素である。私自身、生徒たちと答えのない課題に取り組む姿勢をともに学ぶ、とてもいい機会であったと感じている。

② 神山創造学Ⅱについて

Ⅰ 取り組みの概要

神山創造学で身につけたい力「伝える・協働する・深める」のうち、2年生では特に「協働する」に焦点をあて、コースプロジェクトやチームプロジェクトに取り組んだ。

コースプロジェクトは、環境デザインコースと食農プロデュースコースが「まめのくぼ」谷地区の耕作放棄地でそれぞれコースの目標に沿って活動をしている。

チームプロジェクトは、環境デザインコースと食農プロデュースコース混合チームで、今年は5つのテーマ【伝統野菜・フードロス削減・国際交流・学食と購買・池整備】について、それぞれ4～8名程度の人数で取り組んだ。

【単位数及びプロジェクトの内容と担当】

単位数（4単位）

神山創造学Ⅱ A（環境デザインコース21HR＝12名）

まめのくぼ担当（丸山・草本・梅田）

石積み
水路の修復
杉林の管理と活用
柵の設置や電柵（獣害対策）

神山創造学Ⅱ B（食農プロデュースコース22HR＝14名）

まめのくぼ担当（佐藤・中西・樋口）

年間栽培計画づくり
草刈りや耕耘作業
神山小麦・ソバの栽培・加工品開発・販売
柵の設置や電柵（獣害対策）

神山創造学Ⅱ AB（チームプロジェクト）

・伝統野菜（桑本） ・フードロス削減（秋山） ・交際交流（保積）
・学食と購買（丸山） ・池整備（佐藤）

【まめのくぼプロジェクト（環境デザインコース）】

本来のまめのくぼは、傾斜地にある棚田であった。昨年度までの石積みの施工と水路の修復活動が徐々に進み、環境が復元されつつある。石積みは、本学年が1年生の時に石積みの施工を学んだ現場があり、その続きの完成を本年度の目標にした。また、景観の保全としては、草刈りと道路淵の整備を行った。さらに、まめのくぼの西側の杉林の管理と活用について取り組んだ。

【まめのくぼプロジェクト（食農プロデュースコース）】

小麦の栽培が3期目、ソバの栽培が2期目を迎え、栽培活動に随分見通しを持って取り組めるようになってきた。栽培計画を生徒自らが立てることによって、年単位の活動をイメージしながら毎時間の作業に取り組んでいる。

収穫した小麦は約150キロであった。一部は町内のパン屋「かまパン」へ納品し、一部は町内のブリュワリー「KAMIYAMA BEER」へ納品した。残った小麦は自分たちで脱穀・選別し、町内にある製粉機で製粉した。製粉した小麦は、活動に制限もあったが、3年生が課題研究でレシピ開発をするための試作に使ったり、家庭総合やフードデザインの調理実習で使用したり、生徒たちが小麦を食べる（味わう）こともできた。昨年に続き、城西高校食品科学科の生徒と小麦でクッキーの試作作りも進めている。今年は、試作のクッキーを食べてオンラインミーティングで感想を伝たり、商品開発の工夫を聞いたり、生徒同士の交流の時間をもつことができた。食品科学科の生徒たちは神山小麦の食感や風味の特徴をつかみ、その特性を生かした焼き菓子の開発を進めてる。さらに、道の駅で神山小麦のクッキーや小麦の販売も実施した。

また、昨年のソバ栽培は、獣害により全滅したが、今年は、電柵を設置したおかげで無事に収穫することができた。地域の方にもご協力いただき、ソバを食べるところまで授業で取り組めるように調整しているところである。

【チームプロジェクト】

本年度のチームプロジェクトは、5つのテーマを設定した。2回の授業にわたり話し合いをし、テーマ決めを行い、一人一人が自分が参加するテーマ・チームを選んだ。国際交流は今年4年目となる継続テーマである。池整備は昨年の生徒たちが始めたものでそれを後輩が引き継ぎたいという想いから2年連続の取組となった。それ以外の3つのテーマは今年度新たに生まれたものである。生徒たちが普段から気になっていたことや、1年生の創造学の「聞き書き」で地域の方から聞いた話が元になり出てきたテーマである。それぞれのチームには、担当教員または社会人講師（つなぐ公社）が入り、プロジェクトの指導にあたった。活動の様子は、7月に全校生徒に向けて、2月は1年生に向けて最終報告を行った。

5つのチームプロジェクト

・伝統野菜チームプロジェクト

「伝統野菜の復活」「耕作放棄地の再利用」「神山独特の野菜栽培」の3つに絞り活動することを目標とした。

・フードロス削減チームプロジェクト

町内の飲食店へのフードロス状況調査のためのアンケートを実施し、結果を受けて学校の規格外野菜の販売方法の開拓に取り組んだ。

・国際交流チームプロジェクト

新型コロナウイルス感染拡大予防のためオンライン交流となったが、今年度も11月末にオランダのピーテルフルン校の生徒とのオンライン交流を目標として活動してきた。

・学食と購買チームプロジェクト

神山校には学食や購買がないため、昔あった購買場所を活かして購買を復活させようと購買で売る商品開発や販売活動を行った。

・池整備チームプロジェクト

昨年の活動を引き継ぎ、校庭の中庭にある池の環境整備を整えることで、池に生き物が生息できる状態を保ち、美しい庭園にすることを目標に活動した。

Ⅱ 取り組んだこと

【まめのくぼプロジェクト（環境デザインコース）】

詳しい活動内容や成果並びに今後の展望については本報告4で「地域を学びの場とした実践」で報告する。

【まめのくぼプロジェクト（食農プロデュースコース）】

詳しい活動内容や成果並びに今後の展望については本報告3「地域の生産・拠点の創出」並びに4「地域を学びの場とした実践」で報告する。

【チームプロジェクト】

・伝統野菜チームプロジェクト

- ① 伝統野菜の種の入手先は、知り合いや役場の産業観光課農業担当の方、公民館の利用者や、道の駅などで販売している農家の方から情報を集めた。その後、神山町民と関わりの深い施設を訪ね「二十日大根」「キュウリ」「パンダ豆」「黒大豆」「ソラマメ」「コマツナ」「トウガラシ」の種を入手した。
- ② 神山で伝統野菜を昔からの方法で栽培している佐々木正實さん（74歳）にインタビューをした。
- ③ 耕作放棄地を開拓し伝統野菜を6月から育てることを計画したが、栽培に適した立地条件のいい土地がなかった。中山間地には広大な土地があるが利用困難で水の確保や排水の設置ができていないなどの課題が浮き彫りとなった。そこで、使われていない私有の畑を利用して栽培していくことにした。栽培手順は、ポットに伝統野菜の種を直接まき、その苗を大きく育てた。管理は当番を決め灌水を行うことにした。肥料は草などを敷き完全無農薬の野菜作りに挑戦することにした。



・フードロス削減チームプロジェクト

- ① 町内のフードロス状況調査のための飲食店向けのアンケートを実施した。その結果、町内の飲食店では、フードロスは多くはなく、賄いにしたり、畑の肥料にしたりとある程度活用されていることがわかった。また、「お店の廃棄よりも生産者の方の野菜が売れずに畑で廃棄されてる方が多いかもね」という話があった。神山校で育てた野菜も形の悪いものや傷の

ついたものは廃棄されていることを思い出し、学校で育てた野菜の廃棄をなくせるよう、野菜販売の活動を開始した。

- ② 2学期からは、学校の廃棄野菜をどのようにしたら減らせるか、どのようにすると学校の野菜を地域の方に届けられるを考え、実際に町へ出て販売活動を行った。さらに地域の方の意見を直接聞いてみようとして鬼籠野の高齢者の方々が集まるサロンを訪問した。その場でトントン拍子に「このサロンで売ったらいい」という話になり、毎週火曜日に野菜を販売する活動が始まった。
- ③ 12月には下分よこの市という地域のイベントにも出店した。
- ④ 12月末には自分たちが今まで考え実践してきたことを農業科の先生方にプレゼンテーションし、学校の廃棄野菜をなくすため、授業内での効率の良い野菜の販売や定期的な販売先での販売、週末イベントでの販売など3つを販売方法を提案をした。



・国際交流チームプロジェクト

- ① オランダについて知識を深めるために、インターネットで調べたことをまとめたり、オランダに住んでいたことがある阿部さやかさんにオンラインでインタビューをしたりした。
- ② 11月末のオンライン交流の内容を検討した。まず最初にでた案としては、神山町の特産であるスダチを紹介したいという思いから「スダチゼリーをオンラインで一緒に作り楽しむ」というものが出た。しかし、調べていくうちに、スダチをオランダに送ることができないということが分かり、スダチゼリーの企画は断念した。次に自分たちが普段実習などで使用している農機具を紹介しようと考え準備してきたが、オランダにも同じようなものがあり、オランダの高校生に楽しんでもらえる内容ではないのではないかという意見が出て変更することにした。最終的には神山町や神山校の紹介をクイズを交えながら紹介していくということになった。
- ③ 本番に向けてのリハーサルでは、メンバー以外の方々にもプレゼンテーションを見ていただいた。その後、アドバイスを活かして修正をした。
- ④ オンライン交流当日（11月26日）は、両校の生徒が英語で自己紹介の後、両校が順番にプレゼンテーションを行い、その後は、英語でのフリートークを楽しんだ。



・学食と購買チームプロジェクト

- ① 他校の購買ではどのような商品が売られているのか、どのような感じなのかが分からない

状況だったので、県内の高校の購買や食堂の情報を収集した。

- ② 学校で育てた野菜が傷んでいたり、虫に食われていたりする場合、家庭に持ち帰ることがあるが、それらの野菜を使い少しでも多く使い商品開発ができないかと考え、学校で育てた野菜でのメニューを検討した。
- ③ 活動資金として、神山町のふるさと納税教育推進事業に応募し、7月に神山町長にプレゼンテーションを行い約3万円の活動資金を確保することができた。食材や調理道具の購入、販売許可の申請に活用した。
- ④ サツマイモでコロッケを作ることになり何回か調理を行い改善してできたのが、サツマイモコロッケである。小麦粉もまめのくぼで収穫した神山小麦を使用した。営業時期を神農祭の当日と設定したが、コロナ禍のため販売できず、急遽11月23日の祝日に温泉の里神山道の駅でコロッケを販売することにした。道の駅で販売したところ40食すべて完売した。
- ⑤ 購買復活は10月のオープンスクールと11月の神農祭前日祭の昼休みに購買で「かまパン」のパンを仕入れ生徒対象に販売した。両日とも事前に欲しいパンを生徒に聞いていて数も決めていたので全部完売することができた。

（販売許可は教員が徳島県南部総合県民局で飲食店営業許可書を申請し食品衛生責任者の資格を取得した。）



・池整備チームプロジェクト

- ① 池の排水溝も約40年前から排水溝がつまり機能していなかったため、電動水中ポンプを使って排水してから池の清掃を行った。
- ② 池周辺の落葉樹の落ち葉が多いため、落ち葉の対策を考え、池にネットを張って落ち葉をキャッチするようにした。
- ③ 生き物を飼育するためには、常に水が循環することが大切であることから、電動水中ポンプを工夫して鮎喰川から水を引き上げる仕組みを考えた。電気によるポンプなので、動力が弱かったため、中間地点を2カ所作り、池まで川の水を引くことに成功した。
- ④ 池の景観を考慮し、水を入れるのは竹筒を作った方が良いという意見から、竹を切り出し、竹筒を組み立てた。



Ⅲ 取り組みの成果

チームプロジェクトでは、どのチームも当初の目標通りの活動をスムーズに行うことが難しかった。理由の1つには新型コロナウイルスの影響もあるが、それ以外にもチーム内での話し合いの難しさやリーダーがチームをまとめていくことの大変さなどを感じた結果となった。チームとしてのそれぞれの役割を明確にし、話し合いの時間を計画的に設定することの大切さを実感できたことが成果といえる。また、目標に向かってP（計画）・D（実行）・C（評価）・A（改善）のPDCAサイクルのC（評価）・A（改善）が機能しておらず、次のP（計画）にうまくつなげていけなかったというチームもあり、改めて振り返りの大切さにも気づくことができた。一方、何度もしっかりと話し合ったことで異なる意見を受け入れることができ「自分の意見が絶対ではない」という気づきがあったという意見もあった。このようなことから、すべての活動を通して、話し合うことの大切さを学ぶことができた。

また、新型コロナウイルスの影響やその他の想定外のことが起こった時にも臨機応変に柔軟に対応しておくことで道が開けてくることも学ぶことができた。できないことを探すのではなく、できることは何かを考え協力して活動することができたことが、今後の取り組みにつながると信じている。

さらに、地域を訪問し、挨拶するだけで迎えてくださった方々が笑顔になる姿を目の当たりにし「自分たちも地域の方に元気を与えられるんだ」という気づきもあった。また、授業で育てている野菜を「本当に美味しい」と言って喜んでくださっている方々に直接会うことで、自分たちの活動に自信を持つこともできていた。このように、チームプロジェクトでお世話になった関係者や地域の方々とのつながりは、生徒たちの今後の学びにもつながる大きな財産となっている。

Ⅳ 評価方法

神山創造学Ⅱの学年末考査においては、生徒に事前説明をし、下表の評価基準で採点を行った。

（表1）

学年末考査は自己の振り返りシートとのレポートで評価した。レポートの評価はA「自分の言葉で表現する」、B「社会との関連性を発見する」、C「学びの意欲へつなげる」を3つのレベルに分け自己評価と担当教員の評価を実施した。

（表2・表3）

1年間のコースプロジェクトとチームプロジェクトの最終報告会を2月に実施した。参加した1年生及び2年生並びに担当教員より評価シートを収集し、学年末考査の評価に加えることとした。

【2021年度/2年生 神山創造学（チームプロジェクト）】

評価の観点と点数配分

①振り返り【自己評価】・・・12点満点

②レポート・・・13点満点

③プレゼン（チームPJ報告評価）20点満点

④出席点・・・5点満点

①振り返りシート

・①～④の選択肢

A・・・4点 B・・・3点 C・・・2点 D・・・1点

②レポート

・以下のルーブリックをもとに点数をつける。

※漢字や送り仮名の間違いは減点対象にしない。

	レベル1（1点）	レベル2（3点）	レベル3（5/4/4点）
A【自分の言葉で表現する】 自分および相手の感情や思考を言葉にしているか	自分の気持ちや考えが表現されていない。	自分の気持ちや考えが表現されている。	具体的な経験を描写し、論理に飛躍がなく、第三者が読んで読得力のある表現で書かれている。
B【社会との関連性を発見する】 体験から社会とのつながりや課題を学び取っているか	体験から何を学んだのかが表現されていない。	体験からの学びとそれを通した自分の感情が表現されている。	体験から、社会とのつながりや自分自身への気づきを得て、教訓として表現されている。
C【学びの意欲へつなげる】 体験が学びの意欲へつなげられているか	次に取り組みたいことや知りたいたいことに関する記述がない。	次に取り組みたいことや知りたいたいことが書かれている。	体験を経て次に取り組みたいことや知りたいたいこと、それらに対して自分が何をすべきかが書かれている。

③最終報告のプレゼン評価・・・20点

4つの観点と聞き手の評価

S：4点、A：3点、B：2点、C：1点

④出席点・・・各5点

最終調整

生徒の自己評価に対して、他者目線での評価を加えることで調整を行う。

調整の根拠は選択肢A～Dに準拠すること。

例) ②の設問で、本人はB評価をつけているが、時評発言していたのでCに変更する(※2点)、など

(表1 神山創造学Ⅱ学年末採点基準)

クラス（ ） 氏名（ ）

2年生神山創造学 1年間の振り返り【チームプロジェクト】

みなさん、1年間お疲れ様でした。今年の2年生には、高校生たち自身に任せる部分が大きく、大変なことも多かったろうと思います。こんなに自分たちで決めて自分たちで動かさなければいけなのは高校生生活が最後な人もあるかもしれませんがその意味貴重です。誰かと協働する時に大事なものは、人の意見を聞くこと、積極的に考え動くこと、自分ができるところを見つけて、チーム内だけでなく必要に頼ることだと思えます。こないだのみんなの振り返りを聞いてたら、結構できていて人が多いなと思ってほっこりしました。何事も一生懸命にやった時間が少しでもあれば、その時間は大事な経験だと思えますっ！(秋山)

(1) 自分自身に関する1年間の振り返り

①～④の項目を読んで、A～Dのうち自分に当てはまると思うアルファベットに○をしてください。

① チーム活動への貢献【協働する力】

A	B	C	D
チームに必要な作業を考え出し、メンバーの割り振りを任せた上で、自分の仕事も積極的に任せた。	自分にできる仕事を見つけて、積極的に立候補して作業を行った。	自分に担当された仕事を引き受けた。	ほとんど仕事を引き受けなかった。

② チームメンバーへのサポート【協働する力】

A	B	C	D
メンバーの作業の進み具合や様子を見て、積極的にサポートをした。	メンバーが助けを必要としていることが明確な時は協力した。	ほとんどメンバーの手助けはしなかった。	メンバーが助けを必要としているかどうか分からなかった。

③ チームでの話し合い【伝える力/話す】

A	B	C	D
全体の話し合いを進展させることを意識しながら、自分の意見やアイデアを積極的に伝えた。	メンバーに自分の感じていることや考えたことを積極的に伝えた。	自分から積極的に話すことはあなかったが、意見を求められた時には自分の考えを伝えた。	ほとんど話し合いに参加しなかった。

④ チームでの話し合い【伝える力/聞く】

A	B	C	D
メンバーの発言に関連づけて発言したり、アイデアを出したり、質問を投げかけるなど、チームで話し合いを進めることに貢献した。	メンバーの発言に対して理解を態度で示すなど、メンバーが参加しやすい雰囲気づくりをした。	メンバーの発言は聞いていた。	ほとんどメンバーの発言には意識を向けず、聞いていなかった。

(表2 神山創造学Ⅱ 学年末考査その1)

クラス（ ） 氏名（ ）

2年生神山創造学チームプロジェクト レポート用紙

(2) 自分自身の振り返り【深める力】

1年間を通して、特に印象に残っている事柄について具体的に書いてください。

内容としては、「実際の出来事（自分が実施したことやチーム内で起きたこと）、その出来事から感じたこと（自分の気持ち）、出来事から学んだこと（どんな気づきがあったか）、学んだことを今後どのように活かしていくか」の順に文章でまとめてください。出来事は1つでなくても2、3つ書いても構いません。今後どう活かすかは、自分が今後どうしていくかを書いてください。2学期のレポートにも書いてもらった内容と同じ人いるかと思いますが、何度も言葉にしていけることが大事だなと思っています。2月22日に実施したふりがえりでは、以下のような言葉がありましたので、書く時の参考にしてみてください。

▶レポート用紙へ

[2月22日の振り返りでみんなから出てきた言葉]

△アーマがなくて何から手をつけていいかわからなかった

△方向性が定まらない

△計画性が無い

△意見がまとまらなかった

△うまくいすぎて時間が余った

△人任せにしてしまった

△話し合いの場を作らなかった→時間を決めて行動する

△計画の見直しなかった→振り返りをする

○細かい計画を立てる

○方向性を早めに定める

○スケジュールを明確にする

○自分ができることを考えて見つけた

○今年は来年の基礎づくり。失敗したから成功できる。全てのマイナスはプラスに変わる！

【採点表（参考）】レポートは、A、B、Cの3つの観点で採点します。

	レベル1（1点）	レベル2（3点）	レベル3（5/4/4点）
A【自分の言葉で表現する】	自分の気持ちや考えが表現されていない。	自分の気持ちや考えが表現されている。	具体的な経験を述べ、論理に飛躍がなく、第三者が読んで読得力のある表現で書かれている。
B【社会との関連性を発見する】	体験から何を学んだのかが表現されていない。	体験からの学びとそれを通した自分の感情が表現されている。	体験から、社会とのつながりや自分自身への気づきを得て、教訓として表現されている。
C【学びの意欲へつなげる】	次に取り組みたいことや知りたいたいことに関する記述がない。	次に取り組みたいことや知りたいたいことが書かれている。	体験を経て次に取り組みたいことや知りたいたいこと、それらに対して自分が何をすべきかが書かれている。

足りなければ裏へ

(表3 神山創造学Ⅱ 学年末考査その2)

③ 課題研究への接続

i 目的

1, 2年次の神山創造学での学びを生かして, 3年次の課題研究に取り組むことを期待して教育課程が組まれている。生徒の認識としても教員の意識としても両科目がつながることを目指して, 課題研究の取組を研究する。

ii 対象生徒

地域創生類3年生29名

iii 実施内容

神山創造学では「伝える」「協働する」「深める」力を身につけるための教育活動に取り組んできた。課題研究への接続として「深める」ことに重点を置き, 技術向上や地域との関わり, 自分自身を見つめ進路に関連づけ, それぞれの課題に向き合い, 追究していくように進めた。

課題研究は, 課題の設定がとくに大切である。課題設定には時間をかけてじっくりと決めていかないとけない。テーマ設定から, 「なぜ, そのテーマにしたのか?」「どうしたいのか?」と問いかけながら, 目的を明確化し, その課題が【自分事×社会】にどう結びつくか, という時間を多くとった。

調査, 研究, 作品制作等で, 生徒はそれぞれの問題点にぶつかっていく。そこで, 「お互いに共有する」ことから, 生徒たちからの意見やアドバイスをもらい, これから進めていく課題研究の内容の参考になり, また, 現時点で振り返ること考えるきっかけにもなっている。これは, 神山創造学からの学びで身につけたものである。



研究内容をお互いに発表, 意見やアドバイスを参考に話し合う様子

ここで, 課題研究の内容を一部紹介する。

神山杉を使って木工製作をするグループは, 休み時間に外でお弁当が食べられるように, 生徒が使える机と椅子を作った。物作りに興味を持ったのは, 環境デザインコース7名の生徒である。2年次のチームプロジェクトで学んだ役割分担で, 技術を磨き試行錯誤しながらも無事完成させることができた。



完成した机と椅子



調理実習の様子

2年次の「まめのくぼ」の活動から、神山小麦のお菓子作りに挑戦した生徒は、地域の人たちに「まめのくぼ」について知ってもらいたいという強い思いがあった。お菓子を通して、自分たちの活動を広げていった。しかしながら、製造許可がない本校では、なかなか食品の加工は難しいところがあった。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調理をすることが困難で、一転二転しながらの研究であった。レシピを作成・配布し、そのレシピをもとに、城西高校食品科学科の生徒に製造してもらい、なんとか形になった。まめのくぼの活動を伝えることで、地域のお菓子屋さんで本校の小麦を使ってもらうことができた。

神山校の歴史を調べた生徒は、自分が通う学校のルーツを探ることで、自分自身と向き合い自分の考えを深めていった。卒業生や地域の人話を聞きに行き、物語のようにまとめていた。これは、1年次に学んだ「聞き書き」の手法を取り入れている。

神山町の昔の民具のデータ処理をした生徒は、神山町の古くから使われている民具を知ること、そこでの生活に思いをはせていた。地域の方から話を聞いて使い方を調べるなど、粘り強く取り組んでいた。

まめのくぼプロジェクトの取り組みを多くの人に伝えるために、3年間の活動を冊子にした生徒は、神山町在住の編集者とともにアイデアをまとめた。1年次の「まちぐるみしごと体験」が生かされ、その職業についても学ぶことがあった。将来、自分の進学先で文章を書くときに生かされると思われる。

もともとダンスが好きな生徒は、自分はどこまでダンスを習得できるかという課題に取り組んだ。地域の有名ダンサーとともに技術を深めていく中で、自分の課題研究はこれで終わりではないことに気づき、人生の中に、この課題研究を位置づけた。



ダンス練習の様子



造園技能検定2級実技の様子

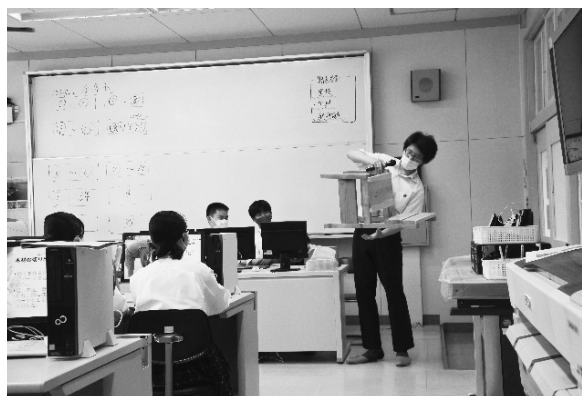
造園技能検定2級に挑戦した4名の生徒の一人は、造園業の仕事に就きたいという進路に直結した取り組みにもなった。検定合格にはならなかったが、技術向上を目指し、学校の庭園の整備、また、後輩に興味・関心がもてるように伝えることができた。

野菜の栽培、まめのくぼで自生しているお茶の活用、防災キャンプなど、今まで学んできた神山創造学から自分と地域の関わりを課題研究で取り組むことができた。

7月に課題研究中間報告の発表会を実施した。1,2年生は、2会場で発表を聞いた。1,2年生にとっては、自分が3年生になったときに、こんなことをしたいと思う機会になった。また、3年生にとっては、自分の考えをまとめる機会になり、振り返りを繰り返す行うことで、これからの課題と改善方法や方向性を考えた。今、自分たちがやっている取組に対して、立ち止まってフィードバックすることができた。



視聴覚室で中間発表の様子



情報処理室で中間発表の様子

課題研究の仕上げとして、2000字～3000字の作文にまとめ（参考：課題研究実践集）、それをもとに最終報告会を1月21日に本校体育館と視聴覚室で実施した。地域の方や保護者には、Zoomでオンライン配信し、後日YouTubeで公開した。まず、作文を苦手とする生徒のために、ライターの甲斐かおり氏を講師としてお招きし、作文の書き方を学んだ。なかなか言葉が出ない生徒も、なんとか文章にしようと努力する姿があった。



作文講義の様子



作文指導の様子

作文の中には、

「3年生からできる課題研究の授業をととても楽しみに思っていました。授業がスタートし、ガイダンスや自己解析の時間があり、いざ、「テーマ設定!」となると、好きなことを追求するだけじゃ理解されないと思いました。好きなことややりたいことはとても大切なことだけど、それだけではやりきれないことってたくさんあるだろうなー、と思いました。」

「これまで大変なことはたくさんありましたが、その中で「切り替える」ことの難しさと大切さを痛感しました。新しい課題ができるとつい、ため息をつきたくなりますが、前向きに受け止めて課題の解決に向けて気持ちを切り替えることができるようになったら、もっと充実した活動ができていたのではないかと思います。」

「新型コロナウイルスの影響に左右されて目標が変わっても頑張ろう!って思える力がつきました。課題研究を通して、自分で考えて他人に自分の意見を伝える力がつきました。私は就職して、自分の意見をもって行動することは大切だと思うので、他人の行動が間違っているなと思ったときは、しっかり自分の意見をもって伝えようと思いました。」

「後輩に言いたいことは、自分を超えてほしい。その先に見える景色はその人にしか味わえない。」

という内容を書いた生徒がいた。課題研究を通して、課題や自分と向き合うことで、課題研究の本質を考えることになったのではないかな。そこから「深める力」がついていくと考えられ

る。

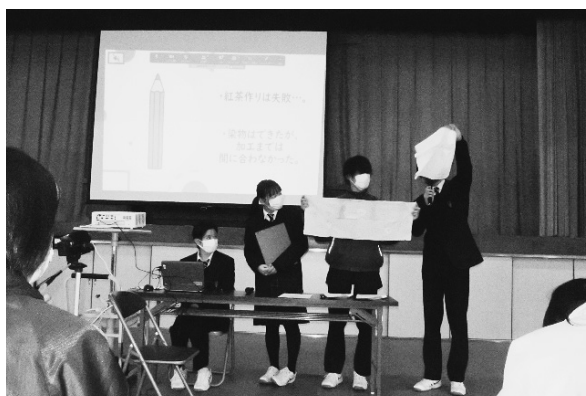
次に、報告会では発表に緊張しながらも、実際に作った作品を手に取り説明し、質疑応答に答えていた。自分ごとにとらえた課題研究の発表は、聞く側の人の心を動かし、多くの人から質問や感想がよせられた。

1年生の振り返りシートより、

「全体の発表を聞いて、工夫し、それでも失敗したことなど、どのように工夫したら大丈夫なのか、出来るようになるのか、しっかり発表していて、良く伝わってきました。インターネットなどで良く調べていて、「出来るようになりたい」「上手になりたい」などの気持ちも伝わってきました。私は、出来なかったり、失敗したらすぐやめたり、諦めたりすることが多かったのですが、今回の3年生の発表を聞いて、ねばることが大切だと思ったので、頑張ろうと思います。実際にしてみてもの感想を忘れず発表してくださり、何が出来て、何が出来なかったのか良く分かりました。」

徳島県教育委員会 中川 望 指導主事より、

「本年度も多様な取組を拝見することができました。年々進化しているなとつくづく感じます。特に、「ブレイク、タットダンス」や「神山校の歴史」は違った視点で興味深かったです。20代の丸山先生素敵でした。造園技能検定2級も懐かしく、生徒の頑張っている様子がうかがえました。先が見えないことも多く、急な変更となりましたが御準備いただいた先生方、生徒の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。」



体育館での発表の様子



視聴覚室での発表の様子

iv 全体成果及び評価

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、様々なことが制限されたり中止になったりした。そんな中、縮小や形を変えながら実施することで、自分たちが「できること」を試行錯誤し、主体的に取り組む姿がみられた。しかしながら、失敗から改善していく過程で、その失敗について突き詰める姿が乏しいところがあった。その過程での教職員のアドバイスが重要となるだろう。

課題研究では、ルーブリック評価を取り入れ、生徒が評価に対してわかりやすく理解することができた。このような評価の可視化によって、発表の仕方を改善するなど、現時点での自分の立ち位置を確認でき、次回はこういうところを努力すると良いという見え方ができた。

課題研究 3年2学期 作文 68点

文字数 (16点)	C 4点 B 10点 A 16点
5つの項目 (4点)	C 6点 B 12点
内容 (48点/各24点)	C 8点 B 12点 A 16点 S 20点

	C / 達成目標に非到達	B / 達成したいレベル	A / 達成レベル超え	S / 期待以上
文字数	1200字～1899字	1900字～2100字	2101字～	—
5つの項目 ・課題研究のテーマ ・テーマを決めた背景や目的 ・研究計画・内容 ・思いどおりにいかなかったこと ・今回の経験を今後にどう活かすか	1つ以上欠けている	要素をすべて含んでいる	—	—
様子を見ていない人にも伝わるか【描写】	<ul style="list-style-type: none"> 話がつかがっていないところがある 具体性に欠け、第三者が読んで理解が困難 	<ul style="list-style-type: none"> ある程度理解できる 	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に筋道を立てて表現されている 内容や背景が具体的に客観的に書かれてあり、読み手が内容を想像できる 	<ul style="list-style-type: none"> [A]に加え、時系列を変えするなど、読み手を想定した効果的な文章表現を用いている
自分の感じたこと・考えたことが表現されているか【感情・思考表現】	<ul style="list-style-type: none"> 事実の列挙に留まるなど、自分の感情や思考が書かれていない 漠然とした言葉で書かれているなど、表現が稚拙 	<ul style="list-style-type: none"> 感じたこと・考えたことが書かれてあり、本人の感情や思考が読み取れる 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究の経験から自己分析や社会への気づきを得るなど、思考の深まりが見られる 豊かな感情表現がなされている 	<ul style="list-style-type: none"> [A]を超えて、社会への考察・原因の分析・改善策の検討・自身への内省がより高度なレベルで行われている

課題研究 3年3学期 発表76点

※生徒の自己評価 + 担当教員 3 名の合計点数

	C / 達成目標に非到達	B / 達成したいレベル	A / 達成レベル超え
伝え方	声が小さい、抑揚がない、原稿を読みあげるなど、聞き取りにくい発表だった	声の大きさやスピードが適切で、聞き取りやすい発表だった	抑揚をつける、問いかけを入れる、顔を上げて発表するなど、伝えることを意識した発表だった
発表資料の見せ方	視覚的な工夫はほとんどなかった	写真や現物を用いた発表があった	写真やグラフを用いる、現物を見せるなど、伝えることを意識した発表だった
内容の分かりやすさ	話のつながりが見えにくい、具体性に欠けるなど、分かりにくい発表だった	聞き手が大体内容を理解できる発表だった	全体的に筋道を立てて説明し、聞き手が内容をとともよく理解できる発表だった
質疑応答	質問に答えられていない (グループの場合) 特定の生徒に任せていた	質問には答えているが受け答えが不十分だった (グループの場合) 特定の生徒に偏らずに答えていた	質問の意図を理解し、答えていた (グループの場合) 特定の生徒に偏らずに答えていた

v 今後の対応と課題

課題研究の学習指導要領の目標は「農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、社会を支え産業の発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することを目指す。」である。指導項目として、

- (1) 調査, 研究, 実験
- (2) 作品製作等
- (3) 産業現場等における実習
- (4) 職業資格の取得
- (5) 学校農業クラブ活動

が挙げられる。これからも、生徒のやりたいことを農業学習指導要領に落とし込んでいくことが、今後の課題となる。そして、神山創造学の学びから、地域や社会に目を向けて考える力を身につけ、農業の学習を深めることができるように指導していく必要がある。

生徒は、着実に神山創造学で学んだ「伝える」「協働する」「深める」力を身につけ、課題研究につなげていると感じている。それは、メモや記録をとる神山創造学から使っているファイルやノートがその証といえる。さらに、課題の設定ができない生徒に対して、教職員が寄り添いながら一緒に伴走していかなければならない。課題研究への接続がスムーズにいくように、2年次の神山創造学から意識づけさせる指導を目指す。

(3) キャリア教育の取組

① インターンシップ

i 目的

1年次の神山創造学で実施した「まちぐるみしごと体験」を土台とし、さらなる人生観や仕事観を養う。インターンシップを通して、「どの職業を選ぶのか？」だけ考えるのではなく、職業を選択するために必要な「自分を理解する」機会にする。

生徒一人一人がインターンシップでの目標を設定し、仕事に従事する。事前指導だけでなく、中間・事後の振り返りを充実させることで、職業を選択する上で必要な自己理解を深化するとともに、高校卒業後の進路に対する意識を高める。

ii 対象生徒

2年生希望生徒（3名）

iii 実施期間と受け入れ事業所

- ・神山町役場（1名）
- ・神山椎茸生産販売協同組合（2名）

iv 活動内容

A. インターンシップに向けてのキャリアカウンセリング

- ・希望者、検討者12人を対象とした、1人20～30分のカウンセリング
- ・卒業後の進路、希望の職種、その他将来についてのモヤモヤについて話す

B. インターンシップ先の提案

- ・カウンセリングを元に、事業所の提案。必要に応じて、生徒と事業者との面談の機会を設定

C. 事前オリエンテーション

- ・インターンシップのねらいを伝える
- ・インターンシップ志望理由、目標を共有
- ・スケジュール、日報の書き方の説明

D. インターンシップ体験（前半）

- ・各事業所にて、仕事を体験

E. 中間振り返り

- ・数日間のインターンシップを終えてのふりかえり
- ・日報を元に、仕事内容や感じたことをお互いに共有
- ・残りの期間の目標設定

F. インターンシップ体験（後半）

- ・各事業所にて、仕事を体験

G. 事後ふりかえり

- ・インターンシップを終えての感想を互いに共有
- ・今後の目標設定
- ・1年生に向けた発表準備
 - インターンシップに参加した理由
 - インターンシップでの目標設定、結果（達成度）
 - 印象に残っていること、その時の気持ち
 - 仕事に対する気持ちの変化
 - 今後の目標

※上記の内容を2学期にある1年生の神山創造学で発表し、1年生は10月実施の「まちぐるみしごと体験」に向けての参考とする。

v 全体成果及び評価

1年次のしごと体験とくらべ、働く時間、そこで感じたことを文字にする、言葉にする時間が圧倒的に増えることで、人生観や仕事観の解像度を上げることができた。そのことで、働くことを自分ごととしてとらえ、将来に向けて思考することにつながった。

vi 今後の展望

インターンシップに参加する生徒は一部に限られている、より魅力的な内容にし、その内容や意味を伝えることで、参加人数の増加を目指す。

② 孫の手プロジェクトとサークル活動

i 目的

一人暮らしになり、家の周りの草地や庭木の手入れが難しくなってきた高齢者のお宅に、城西高校神山校の高校生が訪れ、学校で教わった農業の知識や造園技術を活かして、長期休み（夏休み、冬休み）にその困り事を有償で解消するプロジェクト。

「便利な地域サービス」ではなく、草刈り等を介した「交流プロジェクト」であり「実践教育の機会」であり、この取り組みにより「高校の新しいあり方や地域との関係性」の模索を目

的としている。

合わせて、授業で学んだことを活かし、誰かの役に立つ・誰かに喜んでもらうことを実感し、仕事観を養うことも目的としている。

ii 対象生徒

城西高校神山校全生徒、卒業生（男女や学年，科を問わない）

iii 連絡先

団体名：一般社団法人神山つなぐ公社 代表理事 馬場達郎

住所：〒771-3311 徳島県名西郡神領字本野間100

電話番号：050-2024-4700

iv 実績

日時：令和3年8月11, 12日, 12月18, 19日

場所：町内12箇所

参加人数：延べ50人（内卒業生4人）

v 本番とそこまでの流れ

- ① 地域のお年寄りへのチラシを部落会長便にて配布し、依頼は公社が受け付ける。
- ② 電話等で依頼があると公社スタッフが直接訪問し、作業内容や日程を調整し取りまとめる。
- ③ 参加したい生徒に集ってもらい事前のミーティングを持つ。
- ④ 依頼案件の詳細を伝え、自身がやりたい仕事やできる仕事を考えながら、生徒同士で相談し、学年を超えた縦のつながりがあるチームを決定。
- ⑤ 当日は、依頼者に挨拶をし、作業内容の確認を行った上で分担し、協力して作業を開始。
- ⑥ 途中休憩では、お菓子を頂くことがあり、お年寄りと世間話をしたり、作業の進捗状況なども確認する。
- ⑦ 最後に作業完了の確認を行い、剪定クズなどの清掃と片付けをする。
- ⑧ 依頼者から公社への作業代をいただき、生徒には公社からアルバイト代を支給、領収書も記入。
- ⑨ 使った道具を学校の車に乗せ高校へ。片付けて、一日の作業が完了。

vi 今年度の新たな取り組み

孫の手プロジェクトの活動範囲、頻度をさらに広げるために、毎月第2土曜日に活動する孫の手サークルを立ち上げた。月一回の活動により、今まで以上に高校生が身につけた技術を生かす場が増え、その場で交流した高齢者の方が元気になり、まちの景観がよりよくなっていくことを目的としている。

活動をする上で、以下の4つのことを大切に進めた。

- ・プロ意識を持って依頼主の要望に応える
- ・意識的に依頼者と話す時間を持ち、信頼関係をつくり、ちょっとした頼み事にも応える
- ・対応できること、できないことを明確にする。できないことにチャレンジする場合は、依頼者とともに進める
- ・これまでの孫の手プロジェクトの活動内容は続けていくが、「みんなのやりたい」を大切に新しいことにもチャレンジする

vii 対象生徒

城西高校神山校2年生対象に募集し、固定6人で活動

viii 実績

日時：令和3年7月10日、9月11日、10月9日、11月20日、3月12日

場所：町内7箇所

ix 具体的な活動内容

当日の流れはこれまでの孫の手プロジェクトと同様だが、前後の活動にも力を入れた。



地域での営業活動



道具のメンテナンス



事前の勉強会



コンソーシアム会議での報告



地域の方とオンライン視察

x 全体成果及び評価

今年度より新たな取り組みとして、サークル活動をスタートさせた。

コロナ禍ということもあり、当初の想定通りの件数をこなすことはできなかったが、その中でも、生徒主体で活動を進めることができた。

サークル活動では、自分たちで仕事の依頼を取り、下見と事前の学習、当日、振り返りを主体的に、責任を持って取り組むことで、高齢者の方とのコミュニケーション能力、剪定技術は確実にアップした。

その生徒が、夏休み・冬休みの孫の手プロジェクトでリーダーとして各現場を仕切った。月一回の活動で培った能力・技術を後輩に伝えながら作業することで、依頼者、高校生にとって良い時間となった。

仕事の依頼を受けるために、神領地区のお宅に営業活動するだけでなく、高齢者の集まる施設で講演をさせてもらい、広く周知することもできた。



高齢者サロンでの講演の様子



講演後、仕事依頼を受ける様子

xi 今後の展望

小さくではあるが、月一回実施するサークル活動が始まり、長期休みに実施される孫の手プロジェクトにもよい影響が出始めた。次年度以降は新2年生を新たに迎え、10名前後で活動ができるので、少しずつ範囲を広げ、より多くの高齢者の方の孫の手になるよう進めていく。

(4) 基礎学力の強化

① 目的

社会的・職業的自立に必要な基礎学力の定着を図る。また、「学びの基礎診断」の認定ツールの活用を通して、客観的に認識する。

② 対象生徒

全学年

③ 実施内容

a 小テストの実施

日時 毎月月初めの3日間（朝のSHR）

科目 国語（漢字）・数学（計算）・英語（英単語）

対象 全学年

年度当初に各科目のテキストを配布し、各月の範囲を決めて計画的に学習しテストに臨むよう指導している。全てのテストをファイリングし、復習に役立てるようにしている。また、学年末には成績優秀者を表彰し意欲喚起に努めている。

b 放課後補習の実施

日時 月曜日・水曜日・金曜日の放課後

科目 国語・数学・英語
対象 第3学年：希望者
第2学年：希望者
第1学年：全員

1学期は3年生のみ、2学期から1・2年生の補習を実施した。

c 「学びの基礎診断」テストの実施

日時 第1回 令和3年4月19日（月）全学年

第2回 令和3年12月20日（月）第1・2学年

第3回 令和4年2月18日（金）第1・2学年

科目 国語・数学・英語

内容 学研アソシエ「基礎力測定診断ベーシックコース」

（高校生のための学びの基礎診断に認定された測定ツール）

対象 全学年

1・2年生は年間3回実施した。3年生は4月のみの実施であった。長期休業中に事前学習のワークブックを学習するよう指導し、補習でも活用した。

④ 全体成果及び評価

小テストは数十年前から実施している取り組みであり、生徒の中では毎月行うことにより習慣にもなっている。また、放課後補習は一昨年度からの取り組みである。今年度、2年生は希望者のみの受講となり、生徒一人一人の苦手な分野などを把握することができ、個人に応じた学習法を行うことができた。1年生は全員受講のため、授業の補足等もおこなえる上に、少なからず学習習慣が身につくようになった。また、数学は学級を解体して2組に分け、それぞれに応じた授業内容で補習を行うことができた。

「学びの基礎診断」テストは3年目となり、全員が補習や家庭での事前学習にも取り組み、受験した。各自、自分自身の成績を確認することにより、定期考査以外での自分の客観的な学力を認識できたと思われる。1・2年生は、第1回より第2回の偏差値が上昇した人数の割合が46.4%であり昨年度と比較して成果は出ていない。

⑤ 今後の対応と課題

小テストについては、年々生徒の意欲が減退し、成績の向上もみられない。在学3年間で必要不可欠であると思われる内容を学習しているので、生徒には意欲的に取り組んでももらいたいと考える。1・2学年は、小テストで一定の得点が取れていない生徒については再テストを実施し、基礎力向上を図った。

放課後補習に関しては、1年生については全員が参加しており、昨年同様、学習習慣を定着させたいと考えているが、教室の確保と学校行事の兼ね合いで毎週3回コンスタントに実施できていない現状がある。また、各教科担任が1名しかいないため、今年度も学級ごと（数学は学級を解体しての2組）に各教科隔週の実施とした。

「学びの基礎診断」テストは次年度も引き続き実施する。

さらに、昨年度に引き続き、第3学年が朝のSHRで基礎学力向上を目指してプリント学習を実施した。来年度も引き続き実施し、少しでも生徒に必要な基礎学力の定着を図りたい。

また、全員受験の「漢字検定」の実施も引き続き実施する予定である。希望者受験の「英語能力検定」も毎回受験者がおり、さらなる上級を目指して取り組ませたい。

2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

(1) 造園教育における「専門人材の配置」

① 目的

各コンソーシアム構成組織以外にも神山市は、多様な企業、NPO 法人があり、多彩な専門人材を有している。このような地域との連携を通じて、「高度専門資格取得」を目指し、専門的な知識・技術の習得と次代の産業界を担う人材育成を図ることを目的とする。

② 対象生徒

地域創生類 2 年生（環境デザインコース）12 名

③ 連携先

団体名：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬

住 所：〒770-0847 徳島市幸町 3 丁目109-1 細川ビル 3 F

電話番号：088-653-1071

④ 実施内容

造園技能検定 2 級講習会 第 1 回

日 時：令和 3 年11月24日（水）午前 9 時から午後 3 時まで

科 目：造園技術・造園計画・総合実習

場 所：造園土木実習棟 1 階、検定場

講 師：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬 氏

監事 水主 圭三 氏

造園技能検定 3 級合格者を対象に、午前中は、2 級の DVD を見ながら、実技の注意すべきポイントを教わった。3 級と違い、竹の向きや切る位置など細かい説明を受けた。午後からは、実際に竹垣の作製と敷石を練習した。検定で審査員がチェックするポイントや見栄えをよくするための技術を教わった。それぞれの作業工程を理解した。



唐竹の向きについて説明



ごろた石の性質について説明



縁石と敷石の配置について説明



作業手順のポイントについて説明

造園技能検定 2 級講習会 第 2 回

日 時：令和 4 年 2 月 16 日（水）午前 9 時から午後 3 時まで

科 目：造園技術・造園計画・総合実習

場 所：造園土木実習棟 1 階，検定場

講 師：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬 氏

監事 水主 圭三 氏

第 2 回の講習会は，新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み，中止となった。

⑤ 全体成果及び評価

造園技能検定 3 級 12 名，造園技能検定 2 級 4 名が資格試験を受検した。昨年度に造園技能検定 2 級の講習を受けた地域創生類 3 年生が資格試験に挑戦した。今年度の 2 年生も来年度 2 級に挑戦し，合格者が出せるように指導していきたい。

（生徒の感想）

- ・造園業の仕事の話をしてくれて，造園業に対して興味は持てた。実際に来年受けるかどうかは分からない。
- ・自分は庭師になりたいという夢があるが，高度な技術を見て難しかった。できるかどうか分からないけど，頑張りたい。
- ・石の配置の意味も理解でき，おもしろそうに感じたけど，庭を完成させるのは大変だ。

⑥ 連携先からの意見

県下で唯一造園が学べる高校なのに，造園関係に就職する生徒が少ないのはもったいない。庭作りや剪定などの作業に取り組む生徒の姿を見ていると，興味や関心はあるのかなと思われるが，造園業に就職する生徒が少ないことから，まず，造園に興味を持ってもらえるような話をした。これからも高度な資格取得にチャレンジできる環境を整えていって欲しいという意見であった。

⑦ 今後の対応と課題

指導する科目と教員を早めに決定し，指導計画を作成させる。そして，指導を継続的に行うことにより造園技能検定 2 級の 2 名以上の合格者が出せるようにしていく。

検定に取り組むことで，生徒は造園の基本的な技術を学んでいる。それに興味を持ってより高度な技術習得に意欲を持たせることができるように，地域で実践できる場，具体的には「孫の手プロジェクト」につなげていけるように，どんどん提供していく必要がある。

(2) 多様な地域連携を実現する教育課程の構築

① 筆文字研修

i 目的

筆文字特有の字体について知識を深め，販売用の POP やパッケージを自分たちで作成するための基本的な知識と技術を学ぶことを目的とする。

ii 日程

令和 3 年 11 月 25 日（木）午前 9 時～午前 11 時

iii 対象者

地域創生類 1 学年 書道選択者（11HR 5 名 12HR 4 名）

iv 講師

藤森 圭二

v 実施内容

基本となる筆文字の書き方を自分の名前で練習することから講習会は始まった。生徒たちがそれぞれ、藤森先生からアドバイスをもらい、筆ペンを使った味のある字体と書く上でのコツの習得に取り組んだ。そして自分の名前が、書けるようになった後は、書きたい文字やメッセージのお手本を作ってもらい、自分の作品を作った。



(生徒の様子①)



(生徒の様子 2)

vi 成果

パソコンでPOPや販売用のポスターを作ることがほとんどだったが、今回の研修で筆を使った表現方法に触れることができ、校内のイベントポスターや販売用のPOPを手書きで作るためのきっかけになったように思う。専門の方から指導を受けることで、教員だけでは伝えることが出来ない、実践的な技術と知識に生徒たちが触れることができたことは大きな成果だと感じている。また、講師先生から、直接褒められた生徒はその後、販売用のPOP作りなどで、自分から積極的に取り組む姿も見ることができた。教員だけでなく、大人から褒められることで自尊感情が育っていくことを改めて実感することができた。

② 海洋自然研修

i 目的

本校は神山町をフィールドとして「森林ビジョン」の活動に取り組んでおり、森林から川へ、そして海へとつながっていることを学んできている。また、SDGsの観点より、海の豊かさを学ぶことで、私たちが神山校で生活している神山町の持続可能な取り組みを実感できることを目指す。

ii 対象生徒

地域創生類 2 年生26名

iii 連携先

海陽町海洋自然博物館マリンジャム：奥村 正俊

一般社団法人 Disport：池浦 智史

一般社団法人ミライの学校：高畑 拓弥

合同会社みつぐるま：永原 レキ

海陽町商工観光課：戎谷 悟

iv 実施内容

日 時：令和3年10月15日（金）

場 所：海陽町海洋自然博物館マリンジヤム

徳島県の最南端、海洋町竹ヶ島にある海洋自然博物館マリンジヤムに行った。現地でサンゴの移植体験があるので、事前学習として、黒潮生物研究所の目崎拓真氏を講師としてお招きし、サンゴについて説明をしていただいた。また、生物基礎の授業ではSDGsを中心に森林と海洋の繋がりやサンゴの生態や保護、実際に海陽町に行くにあたり、町の自然や産業についても説明した。HR活動では、高知県の海の様子をDVDで視聴し、現在抱えている海の課題について学習した。

旅に食の印象は重要で、今回は「環境」と「食」をテーマに企画した。海陽町から伊勢エビを提供していただき、神山町からは、本校が育てたスダチ（JGAP認証）と神山椎茸、自家製の味噌を持って、食のコラボを実現した。新鮮な伊勢エビを使って味噌汁を作った。伊勢エビの捌き方を教えていただき、早速実践をした。最初は、固い殻に戸惑いながらも全員が上手に捌くことができた。山の幸と海の幸を贅沢に使った豪華な味噌汁のできあがりだ。伊勢エビの出汁と、椎茸とスダチの香りがしっかりと出た、普段では味わえないとても贅沢な味で、生徒は大満足だった。

その後、サンゴの移植を体験し、自分たちが移植したサンゴを船で見学した。数年後に成長しているサンゴを見る楽しみも増えた。サンゴを通して徳島県の魅力や海産資源の貴重さ、海洋環境の重要性など、様々なことを学んだ。



新鮮な伊勢エビ



捌いている様子



施設見学

v 全体成果及び評価

新型コロナウイルス感染症拡大の現状を鑑み、校外学習や交流学習の学校行事の実施が非常に困難な中、まず実施できたことに感謝する。

事前に学習してきたこともあり、生徒は目的意識を持って、施設の見学や体験活動をしていた様子である。海を目の前にして、開放感もあり、生徒たちの感想はどれも前向きなコメントであった。初めて食べる伊勢エビに感動し、友と語らう姿は笑顔でいっぱいだった。サンゴ千年の森に興味を持った生徒もあり、今回移植したエダミドリイシサンゴについて調べていた。貴重な体験ができ、環境と食をテーマに多くのことを学ぶことができた。森林環境と海が繋がっていることを実感できたのではないだろうか。

vi 今後の対応と課題

神山町で生活している私たちと海陽町で生活している海部高校生との交流を考えている。今回、神山校が海陽町に行ったので、次回は海部高校の生徒が神山町に来ることを企画する。長期でこのような活動が継続することが望ましい。

③ SDGs 研修

i 目的

SDGs についての講演およびカードゲームを通して、SDGs についての知識を身につけ、理解を深めることによって、地域貢献活動に生かす。

ii 対象生徒

3 年生全員

iii 実施日及び時間

令和 3 年 12 月 21 日（火）9 時から 12 時

iv 実施場所

城西高等学校神山校 武道場

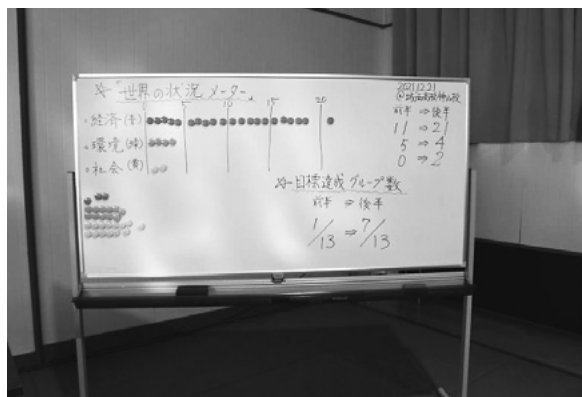
v 講師

2030SDGs カードゲーム公認ファシリテーター 渡邊 芳彦氏

vi 内容

『2030SDGs』カードゲーム公認ファシリテーターの渡邊芳彦さんを講師に招き、まず SDGs について講演をしていただいた。その後、カードゲームの説明を受けてから、13 のグループに分かれてカードゲームを行った。最初はやり方が分からず少し戸惑っていた生徒たちも、一旦ゲームが始まると、自分のグループの目標達成に向けて他のグループとカード交換の交渉を積極的にしたり、活発になっていった。最終的には、「経済」「環境」「社会」の三つの分野のうち「経済」に偏った世界となってしまった。

後日、講師の渡邊さんから、「生徒の皆さんにとって、どこかで何かの拍子に自分が大切にしているものが何か思い出し、気づいてくれるような、そんなキッカケになっていただければと思っています。」とメッセージをいただいた。



vii 全体成果及び評価

農業の授業や理科や社会などの教科の授業で、生徒たちは環境問題について学習したり、SDGsについて学ぶ機会があった。しかし、単なる知識としてだけではなく、カードゲームを通してSDGsの本質を体感し、世界と自分のつながりを実感できたことは、生徒たちの価値観や今後の生き方を左右するのではないかと思われる。

(生徒の感想)

- ・『大いなる富』という目標の中、お金に目がいってゲームをどんどん進めて、ふと立ち止まった時に、環境や社会がぐちゃぐちゃになってしまっていた。今の社会に似ていると思った。目標達成が全てではなかったと思った。他のチームを助けることで全体のバランスを取り持つことはできたはずだ。
- ・SDGsについて詳しく知ることができた。カードゲームもして、なかなか思い通りにいかなくて、経済・環境・社会を安定させることは難しいことだと思った。
- ・自分と現実の世界とのつながりを感じることができた。
- ・今後の自分の意識や行動に変化が起こりそうだ。
- ・ゲームをしながらSDGsを学べたので良かった。

viii 今後の対応と課題

今回は3年生のみを対象に2学期の後半に実施したが、1年次や2年次に実施したほうが効果的だったのではないかと思われる。なぜなら、環境問題について早い段階で意識付けができていれば、神山創造学や課題研究への取り組みの中でもその視点や考え方を活かせるからだ。また、日程的にも事前学習と事後学習が十分ではなかったため、今後このような機会が持てる場合は、事前指導と事後指導を充実させる必要がある。

④ 林業体験（高校生等の林業就業促進現地活動）

i 目的

かみやま林業振興会員がこれまでに培ってきた森林、林業に対する知識と経験を活かし、地元高校生を対象に現地体験学習を行い、次世代を担う後継者の確保と育成に取り組むことを目的とする。

ii 対象者

徳島県立城西高等学校神山校3年生16名（男子15名、女子1名）引率者：指導教諭（丸山稔）実習助手（草本俊寿）

iii 実施者

かみやま林業振興会会長（岡本悦男）、徳島中央森林組合神山支局（岡本）、神山町産業観光か林業係（鳥庭）、その他かみやま林業振興会スタッフ5名

iv 日時

令和3年10月14日（木）午前9時から午後3時まで

v 場所

名西群神山町神領字南野間 足尾山県行造林神山町有林（図1 体験コース平面図を参照）

vi 内容

作業の内容は、チェーンソーによる玉きり作業やスイングヤーダによる間伐体験学習、クラップによる取材作業、フォワーヤーダによる運搬作業を、最新の高性能林業機械を4班に分け使い体験する。

vii 日程

時 間	内 容	詳 細
8 : 40	会員は組合に集合	当日、木材市のため集材土場へ駐車（注意）
9 : 00	生徒は高校出発	役場の借り上げバスで森林組合まで移動
9 : 10	中央森林組合到着	振興会会長挨拶、事務連絡および日程確認
9 : 20	木材市の説明	中央森林組合員から木材市の説明並びに材の価格説明
9 : 30	木材市の見学	競りの様子を見学並びに競りの説明を行う
9 : 50	見学終了	トイレを済ませマイクロバスに乗車、伐採現場へ移動
10 : 30	現地着	作業内容の説明、作業用のヘルメットを装着
10 : 45	活動開始（1 巡目）	4 班に分かれて約30分毎に移動を行う
11 : 15	1 巡目作業終了	次の活動場所に移動
11 : 20	活動開始（2 巡目）	4 班に分かれて約30分毎に移動を行う
11 : 55	2 巡目作業終了	休憩と昼食 13 : 00まで
13 : 00	活動開始（3 巡目）	4 班に分かれて約30分毎に移動を行う
13 : 30	3 巡目作業終了	次の活動場所に移動
13 : 40	活動開始（4 巡目）	4 班に分かれて約30分毎に移動を行う
14 : 10	4 巡目活動終了	終了後、高性能機械による伐採エキシビジョン
14 : 15	閉会式	参加生徒代表挨拶、諸連絡、後片付け
14 : 20	現地出発	借り上げバスで移動
14 : 50	神山校到着	体験のアンケート記入

viii 準備物

- (1) 借り上げバスはかみやま林業振興会が町営バスを借り上げる
- (2) ヘルメット・軍手は神山校が準備する
- (3) 弁当は各自で準備する
- (4) 保険はかみやま林業振興会がJAの保険に生徒分と教職員と会委員全員に掛ける
- (5) 虫除けスプレーはかみやま林業振興会が用意する
- (6) ブルーシート2枚は生徒の荷物置き場と休憩スペースに使う
- (7) 防振手袋4個専用ブーツ、専用ヘルメットはかみやま林業振興会が準備する
- (8) チップソーはかみやま林業振興会が準備する
- (9) 仮設トイレ手洗いタンクはかみやま林業振興会が準備する
- (10) チェーンソー2台は神山校から借りるまたは会員から2台借り
- (11) 公用車はキャラバン、軽トラをかみやま林業振興会が準備する

ix 当日までの準備

- (1) 現地確認および仮設トイレの設置を役場が行う
- (2) 高性能機械の体験について徳島中央森林の機械班に説明
- (3) 伐採木の選択は中央森林組合委員が行う

x 雨天時

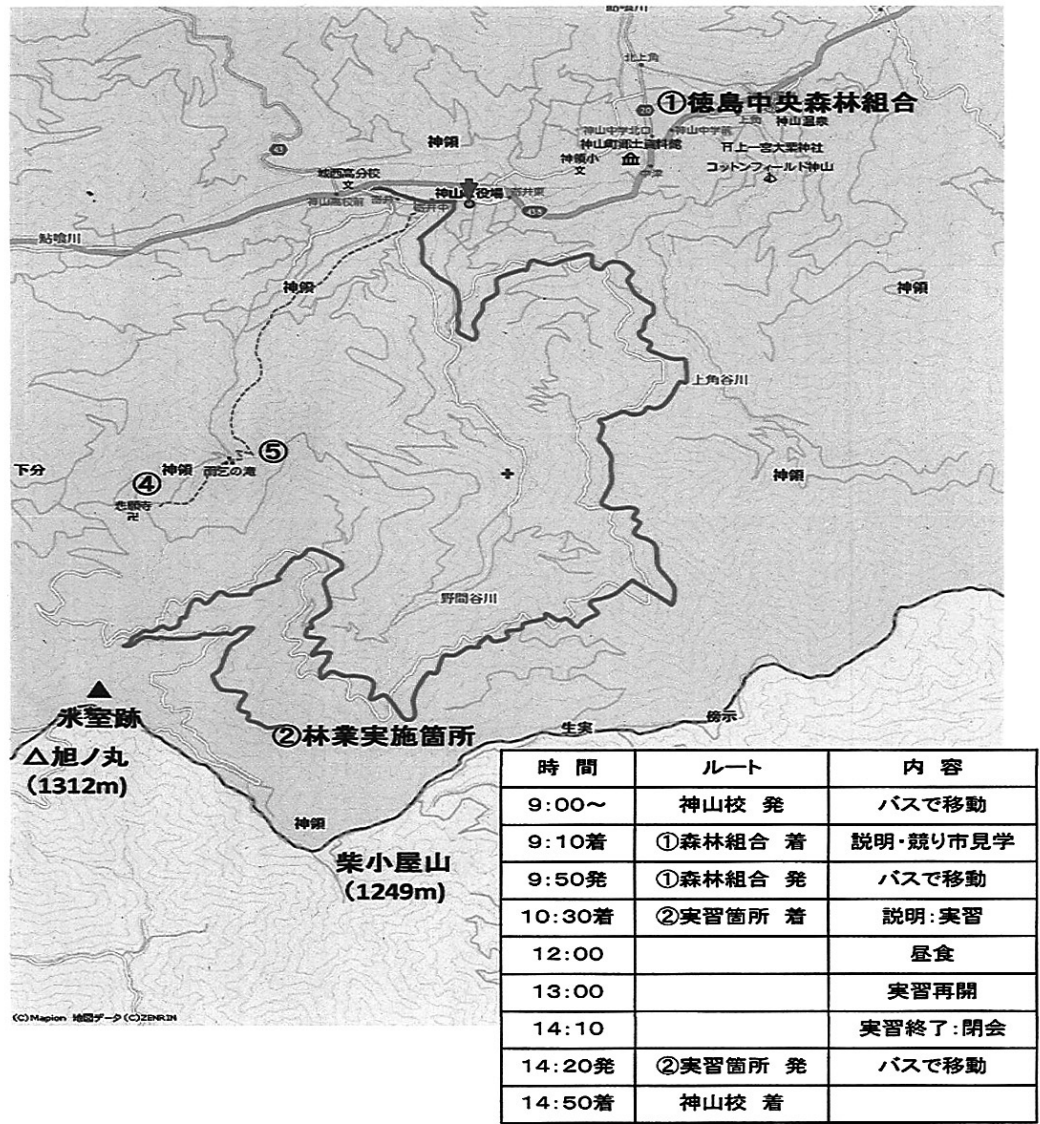
雨天により現地研修が不可能な場合は徳島中央森林組合の土場で研修を行う。時間や日程内容等については天気と同様で行う。高性能機械の体験はグラップルの操作体験を行う。チェーンソーによる伐木体験は短コロなどで行う操作方法については実演を行う。移動時間の短縮に

ついては林業ビデオで学習を行う。なお、雨天作業の待機場所はテントを設営する。

xi 生徒の感想

学校では体験できない伐採や機械の操作を体験できてすごくためになった。大型の機械操作はあまり力もいらず簡単だった。林業作業は危険できつと聞いていたがそうではなかった。霧で視界が悪く前や後ろが見にくい場面があったが、山の天気はすごく変わりや胃ことに驚いた。3人が林業アカデミーに入学する、将来森林組合の仕事に就けるように頑張りたい。

城西高校神山校3年生対象 森林体験 R3.10.14(木)
場所:神山町神領字南野間 森林間伐現場ほか
3年 男15人 女1人 計16人+教員2名(丸山・草本教諭)



(図1 体験コース平面図)



図2 かみやま林業振興会スタッフあいさつ



図3 中央森林組合の木材競り現場



図4 チェーンソーによる伐木体験



図5 スイングヤーダーによる玉切り



図6 フォワーヤーダーによる運搬作業



図7 玉切りしたチェーンソー

3 地域の生産交流拠点の創出

(1) シードバンクとしての機能

① 神山小麦の生産・加工

i 目的

地域でつないできた種を保管し、交換しあえる場所をつくっていくために、令和元年度より神山小麦の栽培に取り組んでいる。神山小麦は神山町で70年以上継いでこられた種子である。

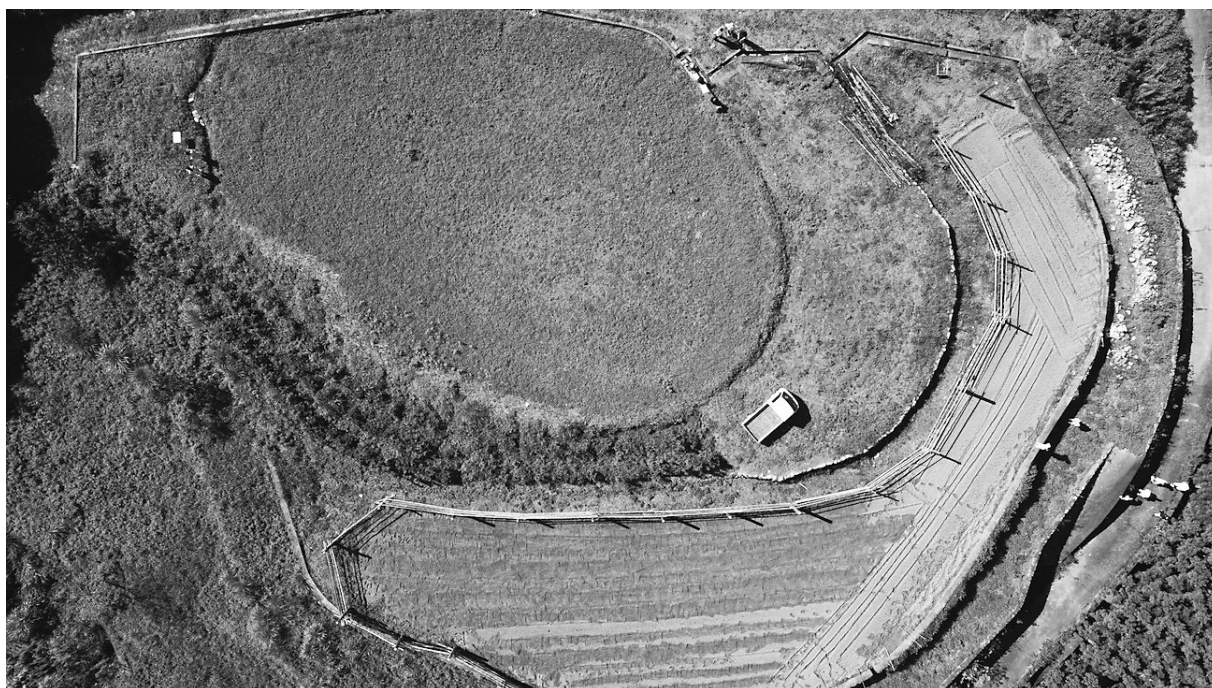
借り受けた耕作放棄地「まめのくぼ」の整備，管理から神山小麦の栽培，加工，販売まで，地域の景観保全と農作物の6次産業化の両観点でより実践的な活動を進めることを目的とする。

ii 対象生徒

地域創生類1年生・2年生・3年生

主に2年生食農プロデュースコースの生徒

iii 実施内容



まめのくぼ栽培計画												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生			小麦収穫						小麦播種			
2年生			小麦収穫				小麦製粉		小麦播種			
						そば播種		そば収穫		そば加工		
3年生	3年課題研究（小麦の加工）									発表		

まめのくぼの圃場における栽培は3年目を迎え，おおよその栽培計画に見通しが持てるようになってきた。1年生は神山小麦の播種・圃場の整備等を行った。小麦の加工に関しては，昨年度の2年生（食農プロデュースコース）が城西高校食品科学科の生徒に焼き菓子の試作をお願いしていた経緯があり，今年度は同じく2年生（食農プロデュースコース）の生徒が，昨年の試作をブラッシュアップしていくべく，城西高校食品科学科の生徒との交流会や意見交換会もオンラインで実施した。

販売に関しては，城西高校食品科学科で作ってもらったクッキーや製粉した神山小麦を神山町内の道の駅で販売することができた。販売する際には，神山小麦とあわせて3年生の生徒が

課題研究で取り組んだ「さつま芋のカップケーキ」のレシピ（※下図）をお渡しすることでもできた。神山小麦の栽培・加工・販売という一連の流れを柱に置くことにより、複数学年に渡って神山小麦を扱う活動が可能になり、課題研究のテーマに設定した生徒もいた。

昨年に引き続き、コロナの感染拡大防止の観点から授業内での神山小麦を使った調理実習や試食は中止となったが、小麦を持ち帰り自宅で焼き菓子作りに励む生徒もいた。

※神山小麦とさつまいもをつかったレシピ（3年生生徒作）

さつまいものカップケーキ

～材料～

・神山小麦	150g
・ベーキングパウダー	5g
・無塩バター	50g
・メープルシロップ	50g
・牛乳	50g
・砂糖	50g
・卵	M 1個
・さつまいも（正味）	100g

約6個分

クリームをのせてモンブラン
風にしたり、大学芋を飾っ
てたりアレンジしてもOK

さつまいものクリーム

～材料～

さつまいも（正味）	120g
牛乳	30g
砂糖	30g
無塩バター	20g

～作り方～

- ①加熱してやわらかくしたさつまいもの皮をむき、裏ごしする
- ②小鍋に①と全ての材料を入れて弱火で煮詰め、絞れるくらいの固さになったら完成！

～準備～

- ・バターを常温に戻しておく
- ・加熱してやわらかくしたさつまいもの皮を剥き、50gを1cmの角切りに、残りの50gを潰して裏ごしし、ペースト状にする
- ・オーブンを170℃に予熱する

～作り方～

- ①バターと砂糖を泡立て器で混ぜ合わせ、メープルシロップと牛乳を加えてさらに混ぜる（きちんと混ぜていればOK）
- ②「①」に溶いた卵を3回に分けて入れて混ぜ合わせる
- ③さつまいものペーストを加えて混ぜる
- ④神山小麦とベーキングパウダーをふるい入れ、ゴムベラでさっくりと混ぜる
- ⑤さつまいもの角切りを加えて軽く混ぜる
- ⑥好みの型に生地を流し入れ、10cmくらいの高さから落として空気を抜き、オーブンで15分ほど焼く
- ⑦竹串などで刺し、生地がついてこなければ完成！

ころころ大学芋

～材料～

さつまいも	100g
砂糖	小さじ4
みりん	小さじ1
水	小さじ2
醤油	お好み
サラダ油	適量

～作り方～

- ①さつまいもを1cm角に切って水にさらしておく
- ②水気を切った「①」をきつね色になるまで揚げる
- ③さつまいもを揚げている間にフライパンに☆の材料を全て入れて煮る
- ④の気泡が大→小→極小になったら火を止めて 素早くさつまいもと絡める
- ⑤クッキングシートに並べて冷ませば完成！

「まめのくぼ」の圃場は1年生から3年生までの学年で扱う内容ではあるが、1年生で播種した小麦がその後どのように加工され、商品になっているのかは環境デザインコースに進んだ生徒たちには見えていない。そこで、2年生のコースプロジェクトの時間に、食農プロデュースコースと環境デザインコースの生徒たちが、自分たちが取り組んでいる活動について伝え合う・聞き合う時間をもった。



6月3日 オンライン交流



7月2日 環境・食農 共有会



9月16日 KAMIYAMA BEER 見学

iv 全体成果及び評価

学校連携の観点では、昨年から引き続き城西高校食品科学科と連携して神山小麦を使った商品を販売できたことは、成果の一つであった。コロナの感染拡大の状況とも重なり、思うように活動ができないことも多かったが、「ふるさと納税」の資金を手に商品開発に取り組み、町内のマルシェで販売することができた。また、課題研究の活動の中で3年間をまとめた冊子「まめのくぼプロジェクト」を制作した生徒がいた。「この場所をもっと知ってほしい」「これから入学する中学生や小学生にも知ってほしい」という気持ちをもって制作を進め、下級生にとっても参考となる記録が残せたことは成果である。今後、この冊子を活用していけるとよい。

v 今後の対応と課題

本校には保健所の営業許可のとれる施設・設備がないため、販売するには地域のパン屋や施設との連携が必要になってくる。生徒や教員のコミュニケーション、地域の方々とのやり取りを丁寧に重ねていきながら、今後も地域の中で加工・販売ができる道筋を作っていくことが必要になってくる。

各施設の状況を踏まえた上で、教育活動への展開に向けた協力関係を築いていくこととあわせて、販売に関する運営費用の管理についても検討していく必要がある。

② 神山蕎麦の栽培

i 取組について

栽培管理

神山蕎麦の栽培は2年目である。昨年度、神山町下分の竹内律子さんから種を譲り受け、栽培に取り組んだ。しかし、獣害によって、全滅した。校内の畑で種取りを目的に栽培し、10キ

口の種を保存した。本年度はこの保存したものをうい，栽培した。

2021年9月9日：播種

コムギの後作の土地に1㎡当りに80gをばらまきした。生育中は，電柵の設置と周囲の除草を行った。

(写真) 生育中の様子



20日目



40日目



70日目

11月30日：収穫作業

脱穀および選別をした。選別後の収量は50kgであった。



2022年1月21日：食味試験およびレシピの検索

食味試験では，神山蕎麦と市販の中国産を用意し，茹でたものを比較した。

レシピを調べ，共有した。



ii 生徒の感想

- ・蕎麦のたねまき作業でばらまきをしました。こんな適当な方法で発芽するのかと疑問に思いました。先生によると蕎麦は発芽までに水もやらずにこれでいいそうです。また，ばらまきだと草も発生がほとんどないそうです。14日後に見たらほとんど発芽していました。また，栽培してみて気づいたことは，違う地域では，夏蕎麦栽培もできるらしいので，これからやってみてもいいなと思いました。
- ・蕎麦について調べることで，食味したことでもいろんなことを深く知ることができた。このような機会をもっと増やしてほしい。地域ごとの違いや成分についてももっと知りたい。
- ・蕎麦の調理方法を調べてみて，かりんとう，お汁粉，クリスピーが作れると知れた。学校が

難しいそうなので、家で作ってみたい。そば米汁は、家でも食べたことがあるので、みんなで作ってみたい。

- ・蕎麦を食べてみて、未熟なものだったためかうすい小豆のような味。柔らかいおかゆのような食感でした。香りは、ほぼありません。市販の粉にしたものも舐めたら香りが感じられました。

iii 成果と今後の課題

成果は、まめのくぼで蕎麦の栽培ができたことである。獣除けの電気柵と木柵が有効であった。課題は、次の点である。①食品加工施設が本校にない。製粉機や加工品の販売の作業で外部の施設を借り受ける必要がある。②コロナウイルスの感染防止の対策のため、蕎麦打ちの体験、調理実習ができなかった。③生産量が少ない。畑地を拡大し、収量を増やす必要がある。

(2) 道の駅販売活動

① 目的

道の駅は、「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域の連携機能」、という3つの要素を持ち、神山校で生産した地域の商品を販売したり、日頃の学習成果の情報発信にしたりという、地域活性化効果を狙っている。また神山町の経済の活性化や消費循環の喚起を大きな目的として道の駅で販売活動を行う。

② 実施日

- ・令和3年7月10日（土）午前8時30分から午後2時まで
- ・令和3年11月23日（火）午前8時30分から午後2時まで

③ 実施場所

徳島県名西郡神山町神領字西上角151-1

④ 参加者

- ・令和3年7月10日（土）【神農クラブ員10人・森林女子部5人・城西高校10人】
- ・令和3年11月23日（火）【神農クラブ員3人・防災クラブ2人・3年課題研究3人・2年チームプロジェクト5人・森林女子部5人・城西高校8人】

⑤ 実施内容

i 令和3年7月10日

販売物は、神農クラブが夏に栽培しているカボチャ・ジャガイモ・トウモロコシ・キュウリ・ミニトマト・神山小麦の種を袋詰め販売した。森林女子部は神山町産材の木工商品積み木をネットに入れて販売した。また、2年生の部員が制作した記念キーホルダーを1個500円で販売した。1年生は道の駅の入場者に木で遊べるワークショップを行い、小さい子供達に大人気だった。友情出店していただいた城西高校の「そよかぜ販売所」生徒の皆さんはお菓子やクッキーなどの食品加工商品を販売した。

ii 令和3年11月23日

農産物は、秋冬野菜が中心で中でもアンノウイモやダイコン・ハクサイ・レタスが面白いように売れた。加工品では3年生が課題研究で取り組んでいる神山小麦の商品開発で製作したお菓子や、2年生のチームプロジェクトで食堂復活チームが料理したアンノウイモコロケや神

山小麦を使った唐揚げを販売した。参加者からは「美味しい！」と高評価をもらった。今回も城西高校の「そよかぜ販売所」チーム学校で育てた「パンジー」「ビオラ」などの草花を寄せ植えにして販売した。クリスマスも近いことから寄せ植えが大人気だった。毎年この時期に神山校防災クラブが炊き出し訓練を道の駅の駐車場で実施している。今回も炊き出しに「トン汁」を避難してきた参加者を想定して、お椀いっぱいの暖かい汁を100名分振る舞った。森林女子部も焼き芋をするなどのパフォーマンスを行い十分存在感をアピールすることができた。

⑥ まとめ

温泉の里神山みちの駅の農産物直売所は、中山間地域の生産者が、その土地で収穫された農産物を安く提供できる場所である。農産物を通じて消費者と生産者の信頼関係を築き、消費者ニーズの溝を埋めて、地域同士の関わりを持つことをこの活動で学んだ。

農産物直売所のメリットとしては、中間売業者を介さないで安く農産物を購入できる他、生産者情報が把握できるので、道の駅に寄ってくれたお客さんも安心して農産物を購入できる。一方で農産物直売所のデメリットは、路上で販売されている農産物にはほこりや排気ガスなどの汚れが付着していることや、消費者が生産者の畑の状況まで把握できないことでもある。デメリットはあるが、道の駅のような農産物直売所を利用することで私たちは学校で育てた新鮮で良質な農産物を美味しく食べることができることは違いないと自信を持って言える。



7月10日（土）道の駅での販売活動の様子



11月23日（火）道の駅での販売活動の様子

4 地域を学びの場とした実践

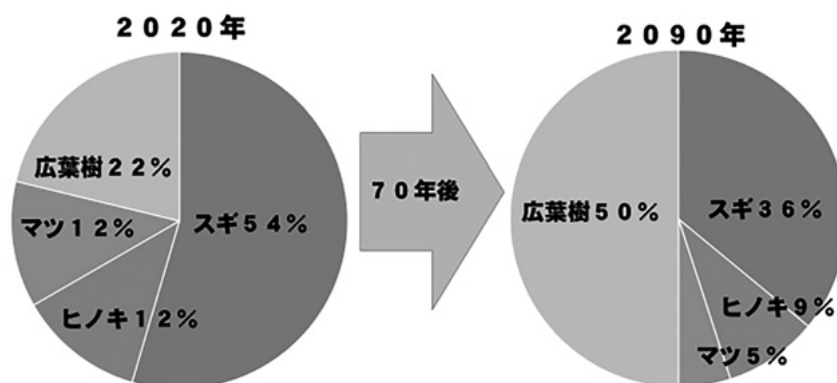
(1) 神山町をフィールドとした「森林ビジョン」

① 取り組みの概要

神山森林ビジョンとは、神山町が目指す森林の70年後の姿のことをいう。神山の森林が生態系機能を高度に発揮するため、森林の適正配置と立地条件に応じた整備により、70年後には（広葉樹林＋混交林）と針葉樹林の面積比を5対5にすることを目指し、環境保全を優先する場所は「環境林」、木材生産に適した場所は「生産林」と位置づけ、環境林と生産林の面積比を5対5とすることを目指すものとする。（図1）また、生産林の林齢構成を平準化し、若齢林、壮齢林、高齢林のバランスがとれたものにするものとする。本校は演習林を管理しており、造園土木科3年生の教科「森林科学」で週2時間林業関係の授業を行い森林環境について学習している。また、部活動として森林の資源の有効活用と林業後継者不足の現状を伝える活動として「森林女子部」が頑張っている。神山町は、町にある環境林と生産林のバランスの良い森林を目指し、鮎喰川の良い水質の継続、森林空間を利用した観光交流、神山杉を使った家作りなど様々な可能性を加えた「神山森林ビジョン」を令和元年6月に策定しており、神山校も様々なプロジェクトと連携し積極的に協力している。以下の取組が、令和2年度に実施した「神山森林ビジョン」に係わる活動である。

- a どんぐりプロジェクト
- b 1年生林業体験
- c 伐木講習資格取得講習・林業体験
- d 森林女子部の取り組み

神山町の森林資源の現状と70年後の比率



(図1)

② 取り組んだこと

a どんぐりプロジェクト

平成27年に神山町は「このまま何もしなければ人が居なくなる」という危機感のもと、地方創生戦略として「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定した。平成28年度には、神山つなぐ公社が設立され7つの施策を設定した。そのひとつに「すまいづくり」があり、平成29年度から造園土木科の先輩達が「どんぐりプロジェクト」として、つなぐ公社スタッフの二級建築士「赤尾さん」、ランドスケープデザイナーの「田瀬氏」などの多くの担当者の皆さんと、本プロジェクトを進めてきた。どんぐりプロジェクトは、神山町の広葉樹を種から繁殖させ神山校で生育させ集合住宅や、新しく計画される学校や寮に定植していくプロジェクトである。

現場施工は令和元年（5月31日、6月6日、7日、21日の合計12時間）、令和2年（6月16

日、17日、23日、24日、7月1日の合計15時間）と歴代の先輩から引き継いで2期目の住宅設計チームの一員として、植栽、施工を行った。また、土木施工業者の昇旭建設さんと造園業者の森田緑化さんらも専門人材に加わっていただき、総勢30人で取り組み令和3年4月に完成した。

結果及び考察として、「植栽、施工、管理」までの一連の作業を計画通り進めることができた。特に、測量や植栽の工事では、学校での授業の成果が生かされた。鉢上げ後の苗木の生育も順調で次回の植栽工事に引き継いでいきたい。本取組がこの神山地区の景観作りのモデル事業となることを期待している。

今後の課題として、今年度担当した3年生の施工工事は、無事に計画は完了したので、今後は、後輩の皆さんに順次、第3次住宅地の植栽整備、管理作業を託すこととなっている。

生徒の感想として「先輩から引き継いだプロジェクトを最後まで完成させたことが嬉しい」「神山の樹木の種から4年間掛けて育てた既存樹木の移植は、大変だったけど卒業しても神山の集合住宅に見学に来たい」「プロの職人さんと一緒に仕事ができて貴重な実習体験となった」など多くの経験と技術が身についたことをすりかえりシートに記入していた。

おわりに、本プロジェクトは、平成29年度から継続して取り組んだ。関わっていただいたランドスケープデザイナーの田瀬氏をはじめ、神山つなぐ公の社集合住宅設計チームと本校生徒が力を合わせた取組となった。生徒が得た成果として、どんぐりなど鮎喰川流域の在来種の種取りから育苗、植栽、管理までの一連の流れを行い、これまでの造園土木科の授業・実習での学びを生かす場となった。そして、普段、目にすることが少ない建築業や造園業の職人の技も間近で体感できる機会を得たこと。また、プロジェクトを通して地域景観の成り立ちを学ぶ機会にもなった。今年度は、現場で竹垣を施工し、植栽整備に参加し、どんぐり等の苗木を後輩たちに引き継ぎ、作業をつなげていきたい。



(図2)



(図3)

b 1年生林業体験

徳島県では全国に先駆け、平成17年度から「林業プロジェクト」を展開した。高性能林業機械の導入により、木材の生産性が大幅に向上し、若者を中心に林業従事者が増加するなど、徳島県の林業は着実に活気を取り戻している。こうした成果を基に、県は県材産を増産する目標を掲げた「新次元林業プロジェクト」を平成28年度に開始した。「新次元林業プロジェクト」は、現場の即戦力となる人材を育成する「林業後継者育成事業」を開講した。「林業後継者育成事業」は毎年、林業事業のねらいやそれに伴う研修の状況、今後の期待について、徳島県林業戦略課の方が神山校の生徒を対象に開講している。本校も神山町が森林ビジョンで描いている後継者不足の解消に向け林業後継者育成事業を推奨している。

城西高等学校神山校は、演習林が有り、森林の授業や総合実習で間伐体験や、集材作業を実

施している。また、2年生には造園土木科が伐木責任者、チェーンソーの資格取得を行っている。こうして林業体験を行い林業従事者への道もあることを伝えるなど、進路選択の幅を広げるため1年生は、とくしま林業アカデミーオープンキャンパスに参加している。

結果と考察として、今年度神山校から先輩5人が、林業アカデミーに入学し、林業関係の職場で即戦力として活躍している。進路希望調査をとっても2年生が2名、1年生が2名、林業関係の仕事に就きたいと意欲を示している。また、課題研究のテーマを決めるとき、木工作品を作りたいと希望した生徒が16人中8人も手を上げ、木に関係したテーマを設定する生徒が50%もいることに驚いた。先輩が、木で何かものづくりをしているのを見て、興味がわいて来ている。自分でもできると感じている生徒が増えてきているのも現状である。

今後の課題、「林業の未来には若い力が必要」、とくしまアカデミーは林業を志す若者たちの就職先となるのが、県内の森林組合や林業関連会社、育林から伐採まで、会社によって事業内容もさまざまであり、継続性がない。「山に入ると、伐採期を迎えた木でびっしりと埋め尽くされている状態となっているそのため、木材生産量の増産を実現するためには、新しい担い手の力が欠かせない」と話す林業会社の経営者もいる。「業界内では、新しい人材を求めている企業が多くあるが、ある程度の基礎知識を持った新人が入社してくれるのは本当に有り難いこと。機械を扱うための資格取得や、安全性への配慮などを学ぶことができる林業アカデミーの存在は、今後ますます重要になるはずである」という意見もある。



(図4)



(図5)

c 伐木講習資格取得講習・林業体験

林業における労働災害の60%は、チェーンソーを用いた伐倒作業中に発生している。いずれの作業でも作業に着手する前の準備は大切だが、特に伐木造材作業では、林分の状況、地形などの作業条件を把握することが極めて重要である。こうした、林業の作業知識を十分に把握し、定められた規則を的確に守る目的で、毎年、2年生が徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の協力の基、学科2日、実技講習1日の合計3日間に渡る講習を受講している。

結果と考察として、服装と保護具の重要性を学んだ。安全の第一歩は、服装からとも言われ安全で清潔で身軽なものを使用すること。特に山の作業なので派手で目立つカラフルな色が最適であることを学んだ。作業道具の準備も重要で、林業作業を行う前には、作業を行う林分の事前踏査やその結果を踏まえて、必要な作業道具をそろえておくことが大切である。使ったら元の位置にかたづけるという心構えが重要である。また、悪天候時の作業では、強風、大雨、大雪などの悪天候のため危険が予想されるときは、作業を中止すること。労働安全衛生法規則第483条に「悪天候時の作業禁止」と記載されている。緊急連絡体制も災害発生時等の緊急時における体制の整備、確立を図ること。熱中症予防対策、火災予防対策、ハチ刺され予防対策、

危険な毒中植物や野生動物に十分認識を持って伐木作業を行わなければならないことをこの講習で学んだ。

今後、学校林での安全な作業確保のためこの講習を継続していく必要がある。引き続き、徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の連携が不可欠となる。



(図 6)



(図 7)

3年生は、林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合が協働で、高性能林業機械の操作方法を、学校林や神山町の県有林で作業体験を森林専攻生や環境コースにさせていただいている。山林で、伐倒・木寄せ・造材を行うハーベスターや、玉切りにして運搬車に乗せるプロセッサーと運搬するフォワーダーの運搬操作を体験した。現場では、高性能機械の作業工程の留意事項や高性能林業機械を用いた作業システムについて指導を受けた。チェーンソーによる伐採方法では、小系木の伐採方法について間伐材を使って実際に倒木した。

結果と考察として、大型の高性能林業機械の操作は学校の演習林では体験ができないので、学校にとっては貴重な体験としてとらえている。生徒も「良い経験になって、すごく楽しかった」といい感想があった。集材作業も、機械なので目的の場所に楽に設置でき、安全で安心して作業ができることに感動していた。

今後の課題として、学校林での実習は倒木や間伐が容易にでき、安全な実習地が確保でき、役場の方や県の林業関係者の方も良い場所と推奨してくださり、演習林の良い有効活用となっているが、実際に木を運び出すとなると、容易に集材できない、現在は1m程度の丸太にして人力で運んでいる。こうした集材作業が今後の課題となり、支援や助成してもらいたいところである。



(図 8)



(図 9)

d 森林女子部の取り組み

森林女子部は、徳島県内の林業後継者を増やし地域の林業活性化や学校活動のPRを目的で立ち上げたプロジェクトチームである。これまでは、徳島県木材利用創造センターや、徳島県林業関係者や森林保全に取り組んでいるNPO団体及び行政関係者に対しSDGs推奨に係わるプレゼンテーションを行い地域の環境問題にも定義を発表する活動を行っている。森林女子部は様々な機会をとらえ、このSDGs17項目の基礎となる「グリーンライフ」の一つである山の働きの持続可能な取組に協力していることを伝えた。森林は水源の元となり、台風時は、大雨で河川の氾濫や増水で家屋の浸水という水害の原因となり、日常生活に大きな影響を及ぼすことを伝えることができたのは成果として評価ができる。そのために、私たちは、学校林で間伐や除伐等の正しい木の伐採方法を学び、伐採した跡地に針葉樹ではなく広葉樹を植えていく活動を継承していくことが、森林ビジョンとの取組に結びつくと考えた。

今後の課題として、まだまだ国連が目指す30年後の持続可能な取組について高校生がどれだけ理解しているかまだまだ未知の世界である。今後この取組を浸透させ理解していく必要がある。次に、神山町が目標としている70年後の森林ビジョンを1年1年つないでいくことが大事であるととらえた。(図10)

森林女子部のもう一つの活動として本年度は、募集活動の一環としてオンライン発信による全国の中学生に神山校の学校案内や、特色ある部活動の紹介や、地域ぐるみで生活している学生寮「あゆハウス」の取組みを発信した。7月には、地域みらい留学全国合同説明会があり、東京・愛知・兵庫・神奈川などの中学生がオンラインで参加した。(図11)参加した中学生は来年神山校を希望するため積極的に参加していた。中学生からの質問からは「森林女子部なのになぜ男子がいるの?」「今行っている活動は?」「部活で一番楽しいことは何?」など、積極的に質問をしていたのが印象に残っている。また、9月には神山町主催で行われた「神山地域留学2DAYS」があり県内外の中学生が、1泊2日で5組、神山を訪れ学校や寮や町内を見学に来た。体験活動では森林女子部と神山スギを使った積み木キーホルダーを中学生とデザインし制作した。(図12)思い思いのデザインを描き高性能レーザーカッターで作品を仕上げてお土産として持って帰った。今年度はコロナの中、多くのイベントや活動が制限されPRも十分に実施することができなかった。そんな中でも徳島県主催の木づかいアワード2020活動部門で準グランプリを受賞した。徳島県も森林女子部の活躍を評価し応援して頂いていることが証明できた。今後も神山町の林業活性化と林業後継者不足の解消に努めPR活動を積極的に行っていく。(図13)



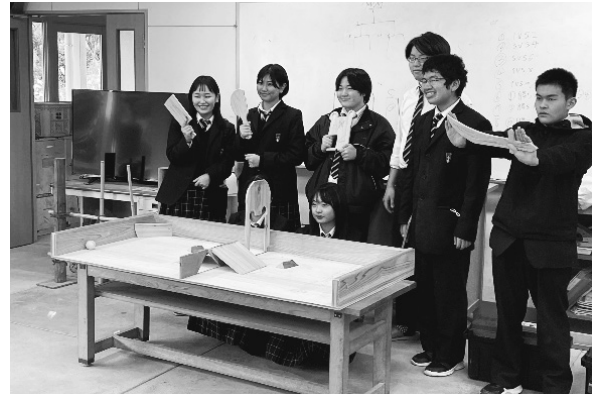
(図10)



(図11)



(図12)



(図13)

③ 取り組みの成果

神山町の山は、かつて林業が盛んであった頃、先人達が子や孫を想い、将来のために財産としての木をたくさん山に残してくれた。一方で、少子高齢化や雇用場所の減少による都市集中化などの影響で神山町の人口減少や林業の市場を取り巻く環境が変わっている。こんな中で、林業の仕事だけで山を考えることはどうかという話も聞く。当時の選択について否定するつもりなく、今だから気づけることもあると思う。生徒達によく問うのは、「今を生きる我々にできるのは、これらをどうとらえてどう将来に残していくのか」、「神山町では、今の山をよりよく将来に残していくため、今後、山とどう向き合っていきたいと考えていくか」と質問する。生徒は「今ある知識だけで考えず、山がもたらす周辺環境への多様な影響、資源としての可能性など、将来を見据えどのような山が神山町にとって望ましいか、視野を大きく広げいろんな大人の意見や、高校生の意見を共有し、考えることが大切だと思っています。」と言う。みんな献身的な前向きな意見が出た。そのための第一歩として、この城西高等学校神山校と神山町の「森林ビジョン」との連携は、現在、山に携わる様々な人に合い森林機能の現状を把握し、山で働くそれぞれの視点からの話を聞くことで、山について新しい気づきが生まれる場になればと考えている。



(図14)



(図15)

④ 今後取り組むこと

新たな森林ビジョンの連携として令和3年度は、森林の生育に関わる神山町の山や川の調査を計画している。人工林と天然林の土壌に影響する光の強さと光合成速度や温度と林木の生長と水の循環について専門的な立場の指導を得て学習して行く。専門的経緯のある大人から学習意欲や、課題に向かうプロセスを評価してもらい生徒、一人一人に自信を付けさせることが3年目の展望

だと考える。

神山町の林業活性化協議会は「神山町バイオマス利用促進協議会」を今年度、新たに立ち上げ、神山町の燃焼機械導入状況調査を実施している。本校もこの調査に協力している。町は、国の山村活性化支援交付金を活用して木質バイオマス利用促進の取組を行っており、その一環として燃料機械導入の現状調査を神山町の公共施設や団体企業・民家等に調査を先駆けて実施している。将来的には、現在使用しているボイラー・ストーブ等の燃料機械の使用から神山産の木質バイオマス燃料を促進させ、限られた燃料資源の分散利用に協力し持続可能なSDGsの推進に協力していく目的で、今後も城西高等学校神山校も神山町森林ビジョンと連携を図り、全国のモデル校となれるように頑張っていく。

さらに、徳島県農林水産部は「徳島木のおもちゃ美術館（仮称）」を板野町にあるあすたむランドに設計中である。この美術館は、赤ちゃんから高齢者に至る全世代の県民が「徳島の木の良さ」を再認識し、その魅力をまるごと体感できる「新たな木育拠点」として、徳島県立あすたむランド内の四季彩館を全面改修して整備するとともに、くつろぎ館（食堂）の改修やあすたむランド入口から美術館までの遊歩道の整備なども合わせて一体的に整備し、あすたむランド開園20周年記念事業として来年度秋頃の開館を予定している。そこで神山校も徳島木のおもちゃ美術館が学習成果の発表の場になる計画を企画している。神山における木育活動の期待を背負って引き続き地域連携に力を入れていく。



(図16)



(図17)

(2) 耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」【環境部門・食農部門】

～耕作放棄地を畑として復活させた3年間のとりくみ～

1 はじめに

2019年度より城西高等学校神山校は学科再編と同時に文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業地域魅力化」の指定事業に認定され、「中山間地域の地域内循環モデルの構築」をテーマとして研究開発に取り組んできた。研究開発では、「1 神山創造学の再構築」「2 地域誠意を活かした質の高い教育環境の整備」「3 地域の生産・交流拠点の創出」「4 地域を学びの場とした実践」の4つに分け取り組んできた。「まめのくぼプロジェクト」は「4 地域を学びの場とした実践」の研究開発で、3年間実践の場として本事業の新たな取り組みとして行ってきた。教職員は、2019年度より「シードバンク」について学ぶスタディーツアーで神山町役場とフードハブプロジェクト並びに神山校教職員と他県の実践状況を把握してきた。既存の植物の種を保存しその地域の農業が受け継ぎ継続し栽培していくことを「シードバンク」という。神山町ではこれまで各農家がつないできた種が農業をしない農家とともに失われつつある現状があり、「種の収穫と保存」という役割を神山校が担うという期待が町から出てきた。この様に周囲の期待もあ

り2019年9月より学校の近くの谷地区に通称「まめのくぼ」という耕作放棄地があり、地域住民からも是非個々の土地を学習活動で使ってほしいと依頼があり、当時、草刈りから始めた。初年度は雑草の株抜きから始まり、水路の修復そして石積みの修復作業に追われた1年目であった。

2 活動の目標

- (1) まめのくぼ耕作放棄地の環境整備を行う
- (2) まめのくぼ耕作放棄地の栽培を行う
- (3) 野生鳥獣がおよぼす農産物の被害対策を行う
- (4) 加工商品の開発に挑戦する

3 活動内容

- (1) まめのくぼ耕作放棄地の環境整備を行う

神山校は神山町に密着した唯一の農業高等学校で、約75年前に開校されてから時代の移り変わりとともに、定時制から全日制へ、農林科から造園土木科・農村家庭課程から生活科へと再編されてきた。2019年度より、農林業を基盤とする神山町と連携しこの土地で学び、未来を拓く人づくりの拠点として、神山校は【地域創生類】環境デザインコース／食農プロデュースコースへと学科再編した。造園や農業を学ぶ農業高校の専門課程を活かし、高校生が実習や授業外の活動として地域社会の取り組みに参画する場面が増えている。

神山町農業委員会の統計によると町全体面積114,060,002m²で耕作放棄地面積が1,061,795m²もあり約1%が農作物の生産を放棄していることが聞き取り調査でわかった。神山校の正面の山「谷地区」には昔、美しい田園風景が広がり、子どもたちの遊び場だったそうで、長らく人の手が入らず、管理もせず草木が生い茂っていて石積みも崩れた場所を環境デザインコースの生徒たちが畑として再生しようと試みているのが「まめのくぼプロジェクト」である。環境デザインコースはまず、下草刈りから始め昔の田園風景の姿が見えてきた。



図①下草刈り作業の様子



図②まめのくぼ耕作放棄状態

まめのくぼの面積は約1,500m²で10年以上管理をしていない。草丈は2m以上もあり雑草の根元は直径3cmぐらいの太い茎に生育しており、刈り払い機では一気に除草できない。50cm根元上部分を切断して残りの目の部分を刈り取るという方法で時間をかけて田んぼ1枚1枚を丁寧に助奏していった。なかには、樹木が育ち刈り払い機では伐採できないので、チェーンソーで伐採作業を行った。刈った草は学校の圃場に持ち帰り堆肥として有効利用しており、野菜苗などの雑草抑制となるように根元にマルチとして活用した。まめのくぼの植物は自然の恵みとなった。



図③水路の石披露で修復作業の様子



図④水路のまわりの除草作業の様子

元々まめのくぼの田んぼは傾斜地にある水田だった。頂上部から水のみち「水路」が流れており、水路を流れて1枚1枚の水田に水が流れる仕組みとなっている。放置されている水路は土石流が流れて道がふさがりダム状態となり、ダムからあふれ出た水は水田以外の場所に流れ水路の機能を果たしていない。また、石も崩れ雑草も生え水路の景観も形も崩れていた。まず、除草作業の後に石を拾うその後溝に詰まっている土や砂利を取り除き、水路を修復していく。水路が壊れている部分は水が横道をそれないように直しておく。



図⑤石積みの修復作業にかかる21HR



図⑥着実の石を積み完成させる様子

傾斜地の多いまめのくぼ地区は、ほとんどが棚田式の石積みの水田が主流である。石積みは傾斜地に広く耕作地を確保するためと水が均等にたまる目的で施工されている。また通気性もよく、水はけがよく作物を育てていくのには良い環境である。加えてこの地区は日当たりも良く地区の住民の話では作物を育てていくのには絶好の土地であるという。3年間で約100m近い石積み修復してきた。1学年では石積み学校を開校し2日間、外部講師であるNPO法人石積み学校講師の金子玲大氏を講師に招き石積みの基礎や石積みの役割、重要性を学ぶ。2学年になると環境デザインコースになり専門的に石積み施工工事に取りかかり週2時間の作業で、まめのくぼ棚田を復活していく。

生徒からの感想は、「石積みを行う石を学校から運搬するのが大変だった。特に石積みの裏に入れる裏栗石が少なく毎時間、栗石や小さな石を確保するのが一番大変だった。」「できあがっていくイメージが出来たとき石の模様がすごく美しくきれいに見えた。」「できたら、3年生になって石積み作業を続けていきたい。まめのくぼの石積みを全部修復して、神山町上分の江田地区の棚田みたいに観光客が集まる場所にしていきたい。」などの感想が振り返りシートに記入されていた。

石積みは専門性が高く技術も難しく、地元でもなかなか「石工」の後継者もいなく石積みが崩れて危険な農作地が多い。石積みになるコンクリートの擁壁や石の間に「モルタル」を塗りつぶす「目潰し」を行う。このような工法は水はけも悪く、小動物や微生物も繁殖しにくく作物の生育にも多少影響を及ぼす。また、自然の景観の復活という観点では、いい景観とは言いがたいのが現状である。

(2) まめのくぼ耕作放棄地の栽培

全国的に農業従事者の高齢化が加速し、神山町内の農業従事者の平均年齢も70歳以上が大半を占めている状況となっている。社会的にも、後継者不足による耕作放棄地の増加は止められず、それにともなう鳥獣害の被害や土砂崩れなどが大きな問題になっている。そうした状況を背景に、地産地食を軸に、地域で育て地域で食べることで食の循環による関係性を豊かにし、神山の農業と食文化を次の世代につないでいくことを目的として私たち神山校の食農プロデュースが令和元年度より開始した。



図⑦まめのくぼの畑に神山小麦を播いて6ヶ月が経過した状態

4月まめのくぼ、下の写真は昨年11月に播種した神山小麦が順調よく生育している状態である。鳥獣被害も害虫被害にも自然災害にも影響なく昨年度に比べ生育状況は良好である。

6月、大凡20haの面積に生育した神山小麦を2年生食農プロデュースコース14名が刈り込み鎌で1株ずつ収穫していった。収穫した麦は脱穀機で実を落とし1日掛けて天日干しを行う。乾燥後はゴミの選別作業を行い湿気の少ない場所で1ヶ月ほど貯蔵保存する。このとき選別した小麦の種に「ノシメダラメイガ」「コクゾウムシ」の卵が幼虫となり袋の中で害をおよぼす。そのためには定期的に、天日干しを繰り返し害虫駆除していく必要がある。本年度は小麦約300kg収穫することが出来た。販売の内訳は、フードハブプロジェクトかまパンに100kg、神山ビールワイナリーに100kg、道の駅販売活動に30kg、小麦加工や種貯蔵に70kgである。販売価格は1kg単価250円で販売した。もちろん市場価格より割安で提供させていただいた。消費者からは、ゴミや石が入っていたので来年は工夫するとよいという意見が出た。



図⑧刈り込みを行う様子



図⑨収穫した小麦を運搬する様子



図⑩神山小麦の選別作業の様子



図⑪粉にしてふるいに掛けている様子

2019年から神山町谷地区の休耕作地をかりて、町内で70年以上も種をつないでいる神山小麦の栽培を、城西高校神山高地域創生類第一期生食農プロデュースコース3年生「鳥居千紘」さんがこの活動の集大成を、自身の課題研究プロジェクトとして取り組んだのが、「まめのくぼプロジェクト」の教材用副読本である。後輩や地域の方々へ届きますように、心をこめて制作した。

※まめのくぼプロジェクト冊子

『年間は長いと思いましたがいい思い出です。農業の実習は大変でありながらも、みんなで協力し合ってできた小麦で商品開発や、鳥獣対策のために柵を張ったりしたのが私にとっては楽しかったです。』（鳥井さんの感想）

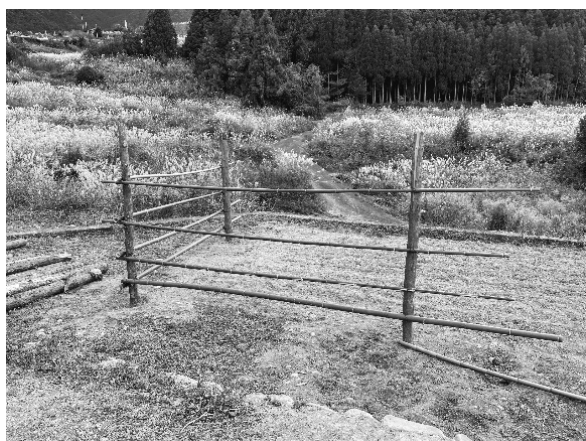


(3) 野生鳥獣がおよぼす農産物の鳥獣被害対策

シカやイノシシ、サル等の野生鳥獣による農業被害や自然生態系への影響が深刻化、その被害範囲も広域化しており、徳島県下はもとより神山町内の全域的な課題となっている。また、これらの被害は、営農意欲の減退や耕作放棄地の増加要因となっている。鳥獣被害が増加する背景としては、農山漁村の過疎化や高齢化が進行し、耕作放棄地が増加したことや、里山等における住民の活動が減少したこと等が挙げられる。また、狩猟者の減少・高齢化に伴い、狩猟

による捕獲圧が低下したことや、里山、森林管理の粗放化等により、野生鳥獣の生息環境が変化したこと等が考えられる。鳥獣被害は農業者の営農意欲を低下させるなどにより、耕作放棄地を増加させる一因となっているが、耕作放棄地の増加が更なる鳥獣被害を招くという悪循環を生じさせており、農村の暮らしに深刻な影響を及ぼしている。まめのくぼでも長年放置していたしわ寄せで、作物を育てていてもシカやイノシシの被害は止まらない。

このため、貴重な神山町の既存種子を畑にまいてもシカやイノシシなどの野生動物による被害が大きな壁となっている。この様に鳥獣被害の軽減を図るため、手作りの支柱や電柵を設置することを重要であると考えた。



図⑫杉の丸太支柱と竹のシカよけ防護柵



図⑬小麦畑に電柵を設置している様子

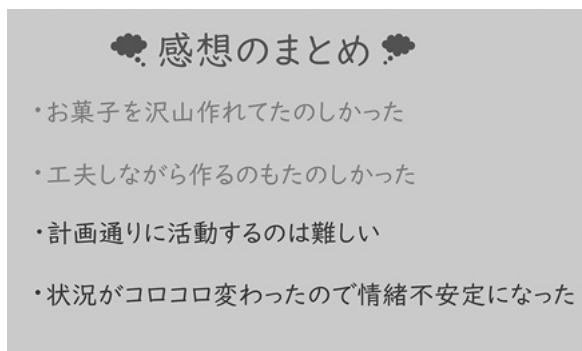
(4) 加工商品の開発に挑戦する

これまで、まめのくぼの栽培は神山小麦が6月下旬に収穫、神山ソバが11月に収穫する。神山小麦は2年生が学校の購買で販売する目的でコロケや唐揚げの小麦粉として利用した。3年生ではクッキー・シフォンケーキ・パウンドケーキ・タルト・カップケーキを加工して商品開発に取り組んだ。商品開発に取り組んだ生徒は「お菓子をたくさん作れて楽しかった」「工夫しながら作るのも楽しかった」「計画通りに活動するのは難しい」「状況がコロコロ変わったので情緒不安定になった」とのまとめを報告した生徒もいた。

ソバの加工は、種を収穫するのに時間がかかり、加工の粉にする工程までは進まなかった。次年度の課題として、石臼などの加工機材や、ソバの郷土料理に関わる職人の指導などが必要とされる。また、食品加工については、施設面が整っていない、どうしても学校以外の企業や民家の施設をお借りするしか方法がなく、生徒は校外授業で学習していくしかないということが今後の大きな課題でもあり、計画していかなければならないことである。



図⑭小麦から制作したサツマイモカップケーキ



図⑮商品加工した3年生の感想のまとめ



図⑯ソバの花が満開10月撮影



図⑰ソバの実を収穫している様子

4 生徒の感想

今回の、まめのくぼプロジェクトで食農プロディースコース生徒からと環境デザインコースの振り返りシートから以下の感想が記述された。

「課題研究で得たこと」

地域創生類 3 年食農プロディースコース 中川 晴詠

私の課題研究のテーマは「お菓子を通して神山校のことを知ってもらう」です。昔からお菓子作りが好きだったので何かお菓子作りに関する活動がしたいと考えていました。そこで、2年生のときに神山創造学の授業でしていた神山小麦を使った加工品を作る活動を活かして、それまでに作っていたものの他にも様々なお菓子を作ってみたいと思いました。しかし、課題研究の始めの方の授業で、自分がしたいことの他に地域や社会の課題も含めたテーマにしなければならないと学んだのでどのようなテーマにすればいいか悩みました。

地域の課題について考えてみると、地域の人と話していたときのことを思い出し、神山校のことがよく話題に上っていました。地域の方から「神山校って色々変わったことをしているよね。」という話をよく聞きますが、その「いろいろ」の詳しい内容まで知っている方は少ないのではないかと思います。そこで、地域の方に神山校についてもっと詳しく知ってもらうためにカフェを開いて、お菓子やその材料となる小麦などを通して神山校の活動を伝えることを思いつきました。

カフェを開くという目標が決まったので、まずはどのようなお菓子を作るか研究メンバーの岡さんと話し合いました。クッキー、パウンドケーキ、タルト、カップケーキなど作ってみたいものが沢山あって何がいいのか迷いましたが、すだちや野菜のジャムも作ってみたいということで、はじめにスコーンを作ることに決めました。以前、家で普通的小麦粉を使ってスコーンを焼いたときはおいしくできたので、同じレシピで小麦粉を神山小麦に変えて焼いてみました。しかし、焼き上がってオーブンを開けてみると、中のスコーンは理想とは程遠く少し焦げてほとんど膨らんでいませんでした。食べてみてもパサパサしていてスコーンとはまた違うもののようでした。結果は失敗に終わってしまいましたが、この失敗から小麦粉の割合が多くバターや卵、牛乳などが少ないレシピは神山小麦とは合わないわかりました。

スコーンのレシピはたまごやバターが少なかったため、次はバターの量を多めにしたタルトを作ってみました。生地はたくさん作ることを考えて型を使わずに1cmくらいの厚さに伸ばした生地を正方形に切って焼き、その上に生クリームとサイコロ状にし大学芋をトッピン

グしました。普通のタルトに比べると少し硬い気もしましたがサクサクしていてこれまでに作ったものの中では一番おいしかったです。タルトの生地が成功だったので、次はこのレシピを使ってクッキーを作ってみることにしました。ちょうどこの時にじゃがいもを収穫していたのでじゃがいもも使ってみたいと思い、砂糖を少なめにしたタルトの生地じゃがいもを潰したものとチーズ、塩胡椒を加えて、おつまみのようなクッキーにしてみました。じゃがいもを加えたことで少しもちもちしていておいしかったです。

次に何を作るか考えたり、試作をしたりしているうちに中間発表の準備をする頃になってしまったので、改めて活動について話し合ってみるとカフェを開くために課題がありすぎてどうすればいいのかわからなくなってしまいました。一番の課題は活動資金だったので「ふるさと納税の給付」に申請しました。

町長や役場の方にプレゼンを聞いて頂いた結果、審査に通ったので3万円の給付金を頂けることになりました。

2学期は夏休み中に考えてきたレシピの試作をする予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で調理実習が出来なかったため、どのような形でお菓子を提供するか話し合いをしました。当初は寄井商店街にあるテストキッチンで製造から提供までする予定でしたが、テストキッチンにはそうざい製造業の許可しかなく、お菓子を作って販売することが出来ないことが分かったので菓子製造業の許可のある「てくてく栗生野」でお菓子を作らせていただいて、それをテストキッチンで提供するという予定になりました。

10月になり調理実習ができるようになったので実際に提供する予定だったカップケーキとシフォンケーキの試作をしました。カップケーキは生地にとろけのペーストを加えてしっとりと焼き上げ、その上にとろけのクリームを絞ってモンブラン風にしたものや、生地ですだちの皮を加えて焼いたものにクリームチーズとすだちで作ったクリームをのせたものなどを作りました。シフォンケーキはプレーンのものにとろけもやかぼちゃ、すだちなどを使ったクリームを添えることになりました。

提供するものが決まったので、てくてく栗生野さんに施設を使わせて頂けるのか電話で伺ったところ、後日実際に行って話をすることになりました。てくてく栗生野に行ってみると、突然、「どのくらい出来るのか見てみたいのでまず作ってもらえますか」と言われたので驚きました。シフォンケーキを焼いている間に話をしましたが、私たちが思っていたよりも衛生的な問題でできることが制限されることがわかりました。はじめはケーキ屋さんのような形でしたいと考えていましたが衛生上難しいということでプレーンのものだけで予め包装してから提供するということになりました。

はじめに考えていた計画から次々変更することがあって落ち込んでいたときに担当の先生から「この計画はひとまず保留」と言われたときは「…」となりました。状況が全く把握できなくて戸惑いましたが、後から聞いた話では私たちと先生とてくてく栗生野さんとのあいだに大きなすれ違いがあったようでした。

残り時間も少なくお菓子を作れる場所もなかったので、これまでの計画は諦めて今まで作ってきたお菓子のレシピを道の駅の販売実習で配ることと、以前作ったカップケーキを本校に作ってもらうこと、神山ビールのクリスマスマーケットで屋台のような形でパンケーキを作って販売することで活動を終わることになりました。

1学期から自分たちで計画を立てて活動してきましたが目標が大き過ぎたこともあり計画的に活動することは本当に難しいと学びました。頑張っ期限に間に合うよう行動しても急に調理実習が出来なくなったり、施設が使えないことになったりして、その度にモチベーションも下がっていったのでやる気を保つのも難しかったです。ふるさと納税の給付金を頂

いたこともあり、何とか活動をやり遂げなければならないというプレッシャーのようなものがいつも頭の片隅にあったので2学期の課題研究の時間は気が重く1学期ほど楽しくは活動できませんでした。

課題研究の活動を思い返してみると大変だったことの印象の方が強いですが、最後のクリスマスマーケットに参加したことはいい思い出になりました。クリスマスマーケットも前日まで納得のいくパンケーキが出来なったり当日も生地がうまく出来なくて急遽今までと違う方法で焼くことになったり大変なこともありましたが、何とか目標だった20個を完売させることが出来たのでよかったです。初めて目標にしていたことを達成することができたので嬉しかったです。

これまで大変なことはたくさんありましたが、その中で「切り替える」ことの難しさと大切さを痛感しました。新しい課題ができるとつい、ため息をつきたくなりますが、前向きに受け止めて課題の解決に向けて気持ちを切り替えることができるようになったらもっと充実した活動ができていたのではないかと思います。

これからの生活の中でも課題にぶつかるとは多々あると思います。その時に上手く気持ちを切り替えてもっと良くなるように行動できるようになりたいです。

まめのくぼ環境実習を終えて

地域創生類2年環境デザインコース 中野千代実

石積工をやっている中で私が学んだことは、昔の人のすごさだ。すごさ、と言ってしまうといろいろあるが、単純な力の強さと発想力や想像力の豊かさを特に感じた。

床掘をしていると、二人でも抱えられないような大きくて重たい石がごろごろでてくる。積まれた当時、どれくらい機械化が進んでいたか定かではないが、確実に今よりは人力が頼りにされていた時代に、どのようにして運んだのだろうか。そもそも現代を生きる人々よりも、日常から力仕事が多かっただろうから、筋力が発達したのではと私は考えた。何を作るのでも頼りになるのは自分の体だけ、そして食べ物も豊富にあるわけではない。そのような状況下だったから、引き締まったからだで、知恵を絞って考えられた動きで、作業が進められていたのだろうと思う。時代の変化とともに、人間の身体能力は衰えていっているのかもしれないと思った。作業効率や安全性を重視している現代も決して悪くはないが、人体の限界に挑戦している人にはやはり引き付けられるし、この先の未来でもいなくなってしまうと思う。

また、そもそもなぜ石を積もうということになったのだろうか。古代から打製石器や磨製石器といったものが使われてきたように、昔の人々にとって石は何かを作る材料として現代よりも身近だったのかもしれない。確かに、土のように水で状態が変わることもないし、木のように腐敗していくこともない石は、かなり優れた資源だといえるだろう。そしてその積み方もこだわられていた。どの組み合わせ、どの角度が一番強いのか、長持ちするのか考えられて積まれたのだろうなということが、昔の石積みからは伝わって来た。

今も残っているものもあるということは、雨が降ったら、台風が来たら、地震が来たら、時間が経ったらということも想像しながら作られたのだと思う。それだけ先のことも見据えられる想像力に感心したし、昔の人が今まで残るように作ってくれたからこそ、私たちがその技術を学ぶことができるのだなとありがたく感じた。それと同時に、私たちの積んだ石積みが後世まで残り、昔の人の発想や技術を伝えられるバトンのような役割になると嬉しいなと思った。

今後あの場所は地元の人の憩いの場所にしたいなと思う。昔ながらの景観を保持している場所として過去をなつかしんだりただただゆっくりしたりできるような落ち着ける場所にしたい。そのためにも杉で埋め尽くされた暗い空間は変えるべきだと思う。今も少しずつ進めているが、しっかりと間伐をし、光が入る林にしたい。また、もしできるのであれば、杉はほとんどを伐倒し広葉樹の林が理想だ。杉が多い神山で広葉樹の山に入れると、私はとても感動するし、わくわくする。その気持ちをもっとたくさんの人に感じてほしいと思うから、多種の広葉樹を植え光が入って紅葉も美しい場所にしたいと思う。今後、まめのくぼが町内の人にとって憩いの場所になるとともに、後世に過去や現代の技術や美しさを伝える場所になればいいなと思うし、そのために努力していきたい。

地域創生類2年環境デザインコース 土居 龍生

私は、まめのくぼに行って前回、土を盛ったところが崩れていたから奥に床堀りをしました。石積みの現場には石積みをする後ろに川から持ってきた石がたくさんあってその石を集めることが大変でした。一番初めの土台となる大きな石を運ぶとき大きすぎてだめだし、高さや広さや奥行きを考えてみんなで選びました。力がある人でもなかなか一人では運べませんでした。僕は重い石を持ち上げたり運んだりすることで力が出なかったり、怪我をしたりするので転がしたり自分がある程度の持てそうな石を探しながら集めました。ぐり石を集めるとき、自分はみんなと集まって集めずにバラバラになって一人で集めました。肥料などの破れにくいビニール袋にぐり石を自分が持てる重さに詰め込んで地上に持ち上げるときも、上に上っている仲間と協同して持ち上げました。自分は、石積みを毎時間しました。石のけつと言って自分のほうに石の高さ盛り上がっている石を選びました。面が合って動かなかったり石と石の隙間に完全にはまったりしたらとても嬉しかったです。形が、いびつな石でもけつが上がったりその上や左右の面が合っている石でも積むことができることに驚きました。石積みを毎時間やっていくうちに、どの石がこの隙間に入るかなとか完成したときの達成感がありました。仲間と地面に埋まっている大きな石をシャベルで掘り進んだり自分が思い通りにいかないときに石を探して当てはめてくれたときに嬉しかったです。布積みと、谷積みを学びました。まめのくぼの石積みは、谷積みでできていて見た目がいいと思いました。簡単で丈夫なので作業効率がいいと気づきました。積めた隙間が三角形になっていたら石が三点でしっかりと固定されているのでその通りだと思いました。金子さんが来たときに話になかで、ちゃんと昼ご飯を食べて栄養を蓄えてエネルギーをためてから作業したほうがいいと教わりました。腰を痛めない石の持ち上げかた、無駄な力を使わない道具の使い方を教えていただけることは本当に助かりました。

5 活動のまとめ

土地を放棄してしまう理由はとして考えられるのは、耕作放棄地の主な原因が4つあることがわかった。1つめは「農業従事者の高齢化」農作業は、身体に負荷がかかるため高齢になると、続けるのが難しいという意見もある。神山町でも、主に農業で生計を立てている農業従事者のうち、65歳以上の割合は65%以上もあり、現在でも増加現象にある。2つめは「農業従事者不足」神山町でも農業従事者の高齢化が進み、リタイアする人が増える中、その農地を継いでくれる人がいれば良いが、残念ながら新たに農業の従事する人も減っており、後継者不足が深刻な課題となり町が将来世代につなげるプロジェクトとなっている。また何もない状況から、農業を始めようすると、土地の確保や農業用の機械などで高額な初期投資が必要なことも少なくないため、

新規参入が難しいと敬遠されている課題もある。3つめは「農産物の価格が低く利益が出ない」調査した資料の農林水産省「生産農業所得統計」によると、日本の農業総産出額は、生産量の減少や価格の低下等により、1984年の11兆7千億円をピークとして、農業所得が最大となった1990年には11兆5千億円、2000年には9兆1千億円と減少を続け、2008年には8兆5千億円となった。農産物価格が低迷し、利益の上がる作物が作れないと、農業を続けていくことだけでなく、生活を送るのも難しくなってしまうため、農業を辞めてしまう農家が多い。4つめは「鳥獣などに荒らされたから」野生鳥獣による農作物被害は、まめのくぼでも例が出なく特にシカの被害が多く収入も減少傾向にはあるが、被害金額は依然として高く、特に電柵機材にかかる被害額が大きくなっている。このことは地域農家の意欲の減少にも繋がっており、減少しているとはいえ、その被害金額以上に深刻な影響を及ぼしている。また、鳥獣だけでなく、台風や日照不足、冷害などの災害によっても農作物被害がもたらされることがある。

6 今後の課題

まめのくぼプロジェクトの耕作放棄地はさまざまな原因で年々解決していかなければならない課題がある。今後この耕作放棄地がもたらす問題点についてまとめた。

① 田畑が荒れていく

田畑として利用しないとしても、まめのくぼの土壌の質を維持するためには適切な管理が必要となる。耕作放棄地となり、農地として手入れをしなくなると、土壌はどんどん草や木が伸び荒れて、必要な栄養素が失われてしまう。耕作地を放置する期間が長くなればなるほど、荒れ方がひどくなるため農地に戻すのに時間がかかり、難しくなってしまうので計画的に整備していく必要がある。

② 雑草が生え鳥獣が住み付いてしまう

土地を農地として利用されている期間は、収穫する農作物に害虫が寄生したり、作物の栄養が雑草に吸収されて成長が阻害されないよう、害虫や雑草の対策をする。しかし放棄されてしまった農地は、あっという間に雑草が生い茂り、農業に害をもたらす虫が棲みやすい環境になってしまうので、定期的に除草作業を行う必要がある。また、中間山地の場合は、人が出入りしないと畑を荒らす野生動物が田畑に住み着いたり荒らしたりしてしまう。耕作放棄地が野生動物の棲家になってしまうと、そこを拠点に他の畑を荒らされてしまう可能性もでて来るので鳥獣対策は不可欠である。

③ 災害の危険性がある

実は農地には、洪水防止という機能がある。そのため、農地の優れた貯水機能を利用して、あぜに囲まれている水田や水を吸収しやすい畑の土壌に、計画的に雨水を貯留することによって、洪水対策として利用している取り組みもある。しかし石積みが崩れていたり、水路が破損していたりして耕作放棄地となってしまうと、農地が持つさまざまな機能が失われ、洪水の発生がおさえられなくなってしまう。この様な原因を解決するには石積みや水路の修復作業を続けていかなければならない。

④ 近隣のほかの土地に悪影響を及ぼす

まめのくぼのように、農地を放置してしまうと、雑草が生えて、そこに害虫や鳥獣も現れやすくなり、隣接しているもしくは近くの農地へも被害が及んでしまう可能性がある。また、農地の用水路の管理がなされていないと、不法投棄が増える原因にもなってしまう景観にも大き

な影響を及ぼす。不法投棄は、自然界への悪影響が懸念されるなど、近隣の民家や住民にまで被害を与える恐れがあり、生活に影響を及ぼす問題となるので継続して本プロジェクトを続けていく必要がある。

⑤ 農地集積を損害する

効率的かつ安定的な農業経営をする人に農地の所有権や耕作権を集約させることを「農地集積」という。耕作放棄地の地域にある農業をしている人が、農地の集積を考えることもある。そのときに農地が荒れていれば、農業を営む人はその土地で農業はしたくないと思うってしまうものである。そうすると、集積がうまくいかなくなってしまう。

以上、耕作放棄地まめのくぼプロジェクトでも継続した取り組みが大事であるところを学んだ3年間だった。



図⑱環境コース石積み完成の様子



図⑲3年課題研究で販売活動の様子

Ⅲ コンソーシアム会議

1 本年度コンソーシアム会議について

○第1回コンソーシアム会議

日 時：令和3年7月15日(木) 午後1時から午後4時まで

会 場：徳島県立城西高等学校神山校体育館

参加者：神山校教職員17名，地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー13名 カリキュラム開発専門家2名

内 容：全体会

(1) 講演 「広島県大崎海星高校の実例に学ぶ，コミュニティースクールの在り方」

CSマイスター 取釜 宏行 氏

(2) 報告 地域貢献活動の今までの取組と今後の在り方

神山つなぐ公社 ひとづくり担当 梅田 學

(3) 報告 森林ビジョンでの部活動の取組と抱える課題

城西高等学校神山校 指導教諭 丸山 稔

○第2回コンソーシアム会議

日 時：令和4年1月22日(金) 午後1時から午後3時30分まで

会 場：神山町農村環境改善センター大ホール他

参加者：神山校教職員15名，地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー11名 カリキュラム開発等専門家2名

内 容：全体会

(1) 「神山創造学のカリキュラム構成」「地域留学のねらい」

分科会

(1) まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開

(2) まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開

(3) 地域留学生のキャリア意識について

○第3回コンソーシアム会議

日 時：令和4年2月14日(月) 午後2時から午後4時まで

会 場：オンライン開催（城西高校神山校，神山町役場他）

参加者：神山校教職員17名，地域協働学習支援員4名 運営指導委員5名

コンソーシアムメンバー8名 カリキュラム開発等専門家2名

内 容：全体会

(1) 講演「持続可能な開発のための教育（ESD）について」

都留文科大学 特任教授 高田 研 氏

(2) パネルディスカッション

テーマ「これからの神山校の方向性（変化と継続）」 パネラー9名

(1) 第1回全体会報告

今回は，分科会は実施せず全体会のみであった。また，前回のコンソーシアム会議において，参加者より「生徒の意見を聞いてみたい」との声があり，2つの報告については生徒が行った。

① 講演「広島県大崎海星高校高校の実例に学ぶ，コミュニティースクールの在り方」

CSマイスター 取釜 宏行 氏

新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインで実施した。全国で34名いる文部科学省CSマ

イスターの一人である一般社団法人まなびのみなと代表理事である取釜宏行氏によるコミュニティースクールの在り方について講演が行われた。

CSの理解が深まり、一人一人の立場・役割を踏まえて、神山にとっての最適な形態の模索に向けて、スタートを全員が切りたくするのが本日のゴールであった。

神山校と似たような状況にあった広島県の大崎海星高校の事例から、CSとは何かという話をしていただいた。

a CSを手段として使いこなす

コンソーシアムからCSへ移行していく中、議論を深めてよりよい形を模索してほしい。

b 学校と地域の水平的関係（win winの関係）

学校と地域は主従関係になりがちである。お互いにとって良い関係を考えていく。

c 高校魅力化＝地域魅力化

高校だけ魅力的になることはない。地域とともに魅力的にしていく。

（参加者コメント）

- ・「生徒にどんな力をつけさせたいか」を地域とともにしっかりと話し合い、互いに win win の関係性を持てるような取り組みを実践的に行うことが大切であると再認識した。また、地域と学校の架け橋となるコーディネーターの存在がいかに重要であるかを改めて実感した。
- ・CSについて、地域とともにある学校づくり等を知ることが出来た。体験活動の充実、子どもたちが生き生きと生活できる場であることが大切だと思った。学校と地域をつなぐコーディネーターの役割の必要性・難しさを感じた。
- ・町内の小中学校も今年度からCSをスタートさせているところである。校種の違いはあれ、講演の話は参考になった。



② 報告 地域貢献活動の今までの取組と今後の在り方

神山つなぐ公社 ひとづくり担当 梅田 學

孫の手プロジェクトの活動について生徒8名からプレゼンテーション報告があった。

今年度よりサークル化し、教員主導型から生徒主導へと移行した。そのサークルのメンバーより孫の手プロジェクトへの参加理由および実施後の感想などが報告された。

サークルになったから、長期休業以外に活動できる、いい経験になると思った、自分のスキルアップになる、コミュニケーション力をつけたいなど参加理由は様々であった。

実施後の感想は、まだまだ機械の使い方が分からないので、機械講習会を受けたい。依頼主の「ありがとう」の言葉が嬉しかった。おじいちゃんとおばあちゃんと話をすることでコミュニケーション力がついた。などであった。

（参加者コメント）

- ・ミーティングの様子や本日の報告会への取組姿勢などを見て、何より楽しそうに活動する姿を

見て応援したい気持ちになった。

- ・自分たちでも出来る，やりがい，自分の役割がある。事前学習や準備を生徒がやることと，自分が責任を持った依頼先への意識，取り組み方が大切。今回の発表では『プロ』としての心得を学んでいることを実感した。
- ・高校生の考えや思いを実際に聞くことが出来，一人一人がしっかりとした考えを持ち，自分の意思で活動している姿は素晴らしいと思った。



③ 報告 森林ビジョンでの部活動の取組と抱える課題

城西高等学校神山校 指導教諭 丸山 稔

森林女子部の活動変遷について生徒25名よりプレゼンテーション報告があった。

森林女子部誕生のいきさつ，部活動として活動するようになった森林女子部の取組，活動などが発表された。

また，今まで少人数であったのが，1年生の部員が増えて，入部はしたが実践的な活動ができていないという，今抱えている課題についても報告があった。

森林女子部を指導してくれている阿部さやかさんからは次のような意見をもらった。タブレット，オンラインソフトを使って活動していければと考えている。来年度にはレーザーカッターが学校に入ってくると聞いている。皆さんのやりたいという気持ちが大事！その思いがあれば大丈夫。（参加者コメント）

- ・森林女子は「森林ビジョン」の重要な担い手の一人だと思っている。長い間の取組で存在が確固たるものになっていると感じた。まさにリスペクトである。
- ・思いや考えをしっかり表現できていることに感心した。地域みらい留学への取組は，生徒たちにとってもモチベーションの向上と自信につながる。
- ・「全国唯一の部活動」すごいことである。神山の林業のためよろしく願いたい。保育所の修了記念品では，子どもたちはいつも大喜びである。楽しみにしている。



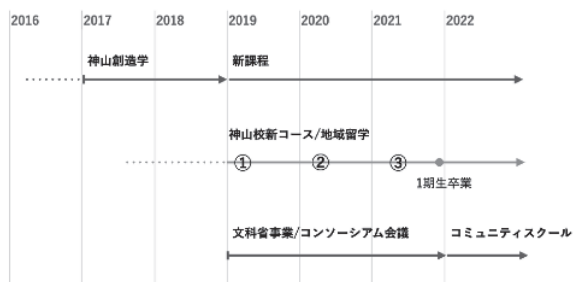
2021/10/31

第2回コンソーシアム会議全体会

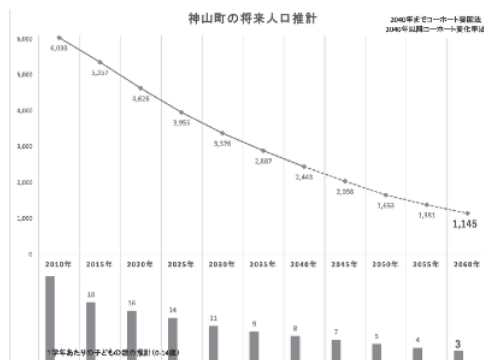
「カリキュラム構成と地域留学のねらい」

森山) 神山つなぐ公社の森山です。課題研究の社会人講師もさせていただいています。本日は私が前でずっと喋るのでなく、関わってきた先生や地域の方々の声を聞きながらそれぞれの視点を寄せ合いながら進めていきます。

神山創造学は2017年度にはじまって、今年で5年目です。2015、2016年頃から構想が生まれていますので、そのあたりも今日話していきたいと思います。また2019年度から神山分校が神山校に学科再編され、地域留学がスタートしています。いま3年目で神山校の1期生が卒業する、というタイミングです。同時に2019年度に文科省事業が採択され、コンソーシアム会議を続けてきています。文科省事業は今年度いっぱいでは終了しますが、来年度以降「コミュニティスクール」に形を変えて、学校と地域がともに歩んでいくことを引き続き進めていけたらと思っています。



神山創造学が生まれた背景について。遡ること2015年、神山町の創生戦略をつくるタイミングがありました。いま人口5000人程度ですが、このままいくと人口が2060年頃には1000人程度になる試算が出されました。



人口が減るといえるのはどういうことか、このまま何もしなければどうなるか、という成り行きが未来が示されました。一番はじめに起こるだろうと言われていたのが、神山分校の廃校。2020年頃には廃校になるんじゃないと言われていたの、いま私たちは違う未来を歩んでいると言えるかと思います。高校がなくなれば、生徒を運ぶバスも廃線になり、サテライトオフィスも、いずれ様々な公共サービスがなくなる。

そうでない道を歩んでいこうと神山町は考え、地域の人々で話し合って創生戦略をつくっていきましました。

「成り行きの未来」

2015年創生戦略検討時点

- ・城西高校神山分校の廃校（2020年頃）
- ・公共交通（徳島～神山バス）の廃線
- ・契約数不足によるケーブルテレビ事業の撤退
- ・サテライトオフィスの撤退
- ・人口減少と財政上の理由による、近隣市町村への合併
行政業務は維持を中心に、新たな取り組みやハード整備はなし
- ・病院や商店、タクシー会社の撤退
- ・人口は2,400名（2040年頃）
- ・最後の中学校と小学校の廃校（2040年頃）

その頃にちょうど高校の先生方と役場、地域の方々が顔を合わせて話し合う場が持たれました。地域としては、町内唯一の高校として、良い学校として残ってほしい。これからのまちの姿と一緒につくっていけたらいいという思いがありました。同時に高校としては、生徒たちを地域の中で学ばせてやりたいという思いを持っていらっしやった。両者の願いを聞くことができて、だったら一緒にやりましょうと活動が活発になりました。



本当に活発になって、ドドドっ。いまも続いている孫の手プロジェクト、集合住宅のどんぐりプロジェクト、フードハブとの連携でお弁当プロ

プロジェクト、民家改修の流れで裏山の伐採をしていたいたり、取り組みが生まれていきました。



地域とともに、授業の枠を使いながら取り組んでいくことをカリキュラムのなかに入れてしまおうということで、2017年度から神山創造学がつけられました。入学した1年生の段階から地域で学ぶことが当たり前になっていく。そういう授業を教育課程に組み込んでいきました。



当時の課題意識、神山創造学へ期待したこと

丸山) トップバッターということで、説明させていただきます。

7年前に、森林女子というユニットをつくりました。当時生活科3年生9人の女の子のクラスだったんです。担当していたのが課題研究という科目で、今年1年どんな研究する？と投げかけたところ「神山町を歩きたい、どんな文化あるか調べたい」と意見があがりました。「どんな飲食店があるか知らない」と言うので、アポをとって下分公民館行ったり、鬼籠野のすだち農家さんのところへ行ったり、役場で山の話の聞いたり。全部僕がやってたんです。

ある時生徒が「郷土料理つくりたい」と言うので、スキーランドの地中のおばちゃんのところへ行って「教えてもらえませんか」と言うんですけど、「いま忙しくて。来てくれたら教えてあげるのに」と。9人もスキーランドまで連れていけな

いな、できたら学校来てほしいのに。でも学校に来て教えてもらうのは、至難の業だった。輸送する手段がなく、来てもらうのも難しい。困ったなと考えていたときに、創生戦略でいろんなプロジェクトを立ち上げているという話を聞いて、これは絶対に学校も乗っかろうと、僕も勉強会に出たり視察に行ったりして。

つなぐ公社ができて、森山さんがいて、話しとる中で、役場のマイクロ借りていけます、まちの人を呼ぶこともできます、と上手にコーディネートしてくれました。当時僕が一人でやりよったことが、森山さんや公社の皆さんが学校に入ってきてくれて、まちのことを教えてくれたり、いろんなプロジェクトのオファーをくれたりして現在に至っとるんです。

創造学ができたのも、当時の9人の子たちがやっていたことを肉付けして改良して現在に至っている、というのが本音です。時々、プロジェクトの報告会で僕は「ぐるぐる巻きにされとる」と言うんです。つながれてつながれて、ぐるぐる巻きにされて、紐をひっぱるとどこかにつながる。生徒も一緒なんです。まちの中でコミュニケーション取っていく中で、「こんな人とつながっとんじゃ」「これ知っとる」ってなる。まちぐるみで学校なんです。僕ら教員と公社メンバーと地域の人がつながっているのはそこからはじまってる。

生徒に対して、ぼくが一番大事にしているのは協働。これは創造学の柱の一つ。入学して、人間関係もまだできていない、高校がどんな感じかも全然わからないときに、チームで一つの目的をクリアする体験学習をやっています。解決するために協働を大切にしましょうと言って。カレーをつくるにしても献立を教えない。薪とライターしか渡さない。みんなで調べてごはんを炊いて、相談してつくる。僕は火起こしが得意、僕は料理が得意、僕は片付けする、とグループのなかで自分ができる役割を探させるのが目的。それで協働を教えて、創造学につなげる。生徒にはグループで話し合ったり、どんな考えをしているかを教えているのが神山創造学です。

森山) 丸山先生が大事にされてきた「協働」を引き継いで実際のカリキュラムに入れ込んだのが神山創造学かなと思います。

神山創造学は下手すると、高校生がやたら地域に出て行っている授業、と見られやすい。それは

それで事実で、大事にしていることですが、一方で神山出身ばかりでない生徒たちが神山を知ってどうなるの、何のために地域に出てるの、と思うと思います。何のためにやっているかを、授業者側がしっかり言葉にして彼らにも伝えるし、先生が共通で握っていこうとまとめたのがこちらです。

3つの力を育もうとしています。まず、伝える力。自分の感じたことや思っていることを言葉にして、あるいは別の形で他者に表現していく力。伝えるだけでなく聞くことも大事だね、というのも含めてコミュニケーションの力。そして協働する力。そして深める力。体験して楽しかった良かったですと終わらせず、そこからもう一步深めて、社会全体で見ればどうなんだろう。体験から学ぶ力。これらは社会に出たときに、自分の頭で物事を考えて人と関わり合いながら生きていくうえで大事なことだよ、と伝えています。

あと、ここはあまり生徒には伝えていませんが、すだちの中身、見えない力も創造学では大事にしています。いろんな大人に出会い、場所を訪れることで、いろんな刺激を受けます。そのなかで感性や好奇心を育んでももらいたい。何かやってみることを通してできたときに自信につながっていく。その積み重ねを経験してほしい。これは先生たちからよく出てくる言葉です。目に見えるものではないけれど、培っていききたいという願いを込めています。



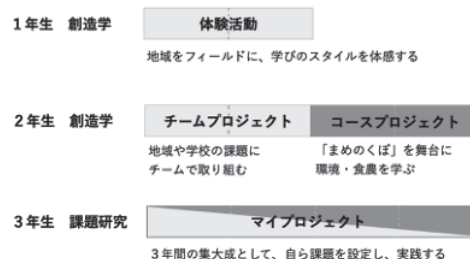
構成として、1年生は2コマで体験活動として地域を訪れるフィールドワーク、しごと体験、おじいちゃんおばあちゃんの話聞く聞き書き。話す、発表する、話し合うといった学びのスタイルをトレーニングしてひたすら積んでいく。

2年生になるとそこから発展して、チームで1つのテーマを掲げて学校や地域の課題に取り組む。新たに2019年度から増えた2単位では、まめのくぼを舞台に、環境・食農に分かれて学びを深めています。

「まめのくぼ」を舞台に環境・食農を学ぶ



3年生では課題研究を4単位で。2年生で取り組んだものを融合する形で、マイプロジェクトにしていく。これまで学んできた環境・食農の分野をテーマにする子もしない子もありますが、農業高校の専門性をかけあわせて、集大成として自分でプロジェクトをつくって実践しています。



神山創造学は神山校の核であると先生方が言うてくださることが多いんですけど、農業高校としての専門性、普通科目、そしてキャリア教育のかけあわせの授業です。授業によって濃淡がありながらもどれにも関わっています。



神山創造学で大切にしてきたこと

森山) ここで、1・2年生の神山創造学を担当している梅田から、授業で大切にしてきたことを話してもらいたいと思います。

梅田) 高校生には、ちゃんと違和感を覚えたことを言葉にしてほしいなと思って授業をしています。

なので学期末ごとに「授業と、前に立って話をする僕に対して、違和感を覚えたことを言葉にして伝えてね」と付箋にフィードバックを書いてもらうようにしています。例えば「この授業を自由につくっていいという割には、レポートの形式が決まっていて書きづらい」「どういう評価をされているのかわからないので示してほしい」、僕に対しては「ちょっと早口」「もっと要点をまとめて話してほしい」「時折、先生より偉そうなときがあるのでどうかしてほしい」など、率直にいろんな言葉を投げかけてくれています。それに対して、変えられることは「こう変えていくね」と伝えるし、変えられないことはその理由を添えて答えています。1学期末にもらったコメントは2学期の冒頭の授業で伝えるようにしています。

なぜこういうことを大切にしているかという、違和感をちゃんと思い浮かべて人に伝えることができる、世の中に出たときに、違和感が課題になって自分の取り組んでいく仕事になっていくんじゃないかなと思っているからです。違和感が言えない雰囲気だったり、「変わっていかないなら言わなくていいよね」なんて雰囲気はつくりたくないなと思っていて。すべてできているかはわかりませんが、常日頃大切にしながら言葉にできる雰囲気・環境をつくることを心がけています。

森山) 違和感を表明できるというのは、その場やそのクラスでの安全性というか、梅田さんへの信頼がないとできないことなので、そういったことを大切にしているんだなと思いながら聞いています。

生徒の受け入れを続ける理由

森山) 続いて地域側の目線から、生徒の受け入れを続ける理由を聞かせてもらいたいと思います。

辰濱) Sansan株式会社の辰濱と申します。生まれは徳島ですが、育ちは関西でした。よくおばあちゃんの家に帰っていたので、徳島にソフトウェアの会社があることを知っていて「中学生の頃から徳島でもソフトウェアの仕事ができるんだ。東京・大阪に行かなくていいんだ」というのを知っていました。いざ仕事を選ぶときに、満員電車し

んどいし、そういえば徳島で働けるなというのを思い出して、徳島に就職して今に至っています。

仕事を考える年頃の子たちに「こういう働き方があるんだよ」と伝える立場になったなと思っていて、それで高校生には仕事の時間を割いてでも「こういう仕事があるんだよ。こういうところでも続くんだよ」と伝えられたらいいなという思いがあります。

それだけでなく、メディアを見るとサテライトオフィスってキラキラして優秀な見えるけど、自分は高校時代は赤点ばかりでした。けれど好きな教科や部活はがんばった。そういうことをオープンにしてできるだけつながれる機会を増やしていこうと思っています。そのなかで去年、一昨年は学園祭に出してもらったり。今後もそういうつながりを持てたらと思って続けています。

森山) お金にならないと言ってしまうと身も蓋もないですけど、仕事の時間を使って受け入れてくださっているわけですよね。それは伝えたい想いがあってのことだという話だったんですが、逆に生徒から受け取っているもの、やってみてよかったなと思うことはありますか。

辰濱) 創造学では高校生に自分の口で伝えることを大事にしているという話があったので、「自分も高校生に自分の思いを伝えなきゃな。良いお手本にならなきゃな」と刺激されています。高校生が国際交流していたり草刈りしている様子を見て、自分は国語と英語は苦手だったんですけど、高校生ができているんだし、自分もできるようにならなきゃと刺激ももらったのは大きな変化でした。

森山) 辰濱さんが草刈りをめちゃくちゃ熱心に行っているのは高校生の影響もあるのかもしれないね。

辰濱) あります。

神山創造学が始まって感じる生徒や学校の変化

森山) 家庭科ご担当の杉山先生です。創造学がはじまる前から赴任していて、創造学もそばで見えました。はじまってから感じる生徒や学校の変化についてお話してください。

杉山) 7年目になります。神山分校の終わりと神山校の最初にちょうどいます。

いろいろな人に伝えているんですけど、自分を表現できる生徒が本当に増えてきたんじゃないかと思っています。「見えない力」のところにあった「自信」「感性」「好奇心」を持てる生徒が増えてきたかなと、率直に思います。わかりやすく言うと、中学生の頃はどちらかというとクラスを中心に、中心の子に言われるまま動いていたような子が、自分の意見をしっかり表現できている。

学校の変化は、私たちはいろいろな人に支えられているんだということが、より分かるようになったのかなと思います。創造学や課題研究以外でもいろんな外部講師の先生に助けていただいています。エシカル消費で笹川さんに毎年お世話になっています。先生が「こんなん言うたら迷惑かな」「負担かな」「でもお願いします」と言えるようになってきたのかなと思います。

森山) 先生からもヘルプを出しやすくなったと。続いて保積先生から。

保積) 私も神山校7年目になります。創造学がはじまる前から赴任していたんですが、その頃は生徒が何か活動したり発言するときは、限られた生徒が前に立つことが多かったように思いますし、私自身も決まった子に声をかけることが多かったように思います。どちらかというとマイナス的に考えている生徒がいて「この学校に来たくなかったけど来た」「どうせ自分はできん」といった言葉を口にする生徒が多かったように思います。

それから創造学がはじまり、少しずつ、限られた生徒でなく全員が人前で発言をする機会が積み重ねで増えていったことにより、ほとんどの生徒が、程度の差はあれ、人前で話すことに抵抗感が少なくなっているのではと思います。私自身、普段の国語の授業だけでは気づかない生徒の発言、興味・関心、特技などを知ることができ、うれしく感じるが増えてきました。今まで以上に生徒のことを多面的に見ることができるようになって。可能性の幅を私自身「ここまでかな」と勝手に決めているところがあったんですが、広い枠で見て声かけなど心がけるようになったかなと思います。生徒自身も、活動のなかで自信をつけてきているように思います。

森山) 大人の会議の場で「会議の質は参加者の発言量のバランスだ」と言われることがあります。誰

か得意な生徒だけが話すのでなく、一人一人が話す場をできるだけつくる、うまくいなくても繰り返し練習していく、ということを実は授業の中でよくやっているんですね。

地域留学のねらい

森山) 続いて地域留学の話に移ります。

創造学をつくと同時に、神山校のこれからをどうしていこうか、何を目指していこうかという話が、2017年度に半年以上かけて行われました。このとき高校からは校長先生と教頭先生、役場から町長、副町長、教育長、フードハブから真鍋さん、白桃さん、樋口さん、公社から桴谷さん、西村さん、私で勉強会を繰り返していた時期がありました。

地域の課題は何か。その中で神山校はどんな役割を果たせるか。地域からどんな期待があるか。そういったことを掛け合わせたテーマで勉強会を6回ほど続けてきました。既に学科再編を行った地域の例から生じた軋轢やうまくいったことを聞いたり、「文化的景観」や「環境保全型農業」といったキーワードをもとに勉強したり、当時校長先生だった安永さんに語っていただいたり。

2018 神山分校魅力化ミーティング

高校・役場・フードハブ・公社で合同勉強会

- ① 阿波西高校の事例から見る学科再編 …都留文科大学 高田研さん
- ② 「文化的景観」と神山分校の役割 …奈良文化財研究所 恵谷浩子さん
- ③ 「環境保全型農業」の実践 …東京工業大学 真田純子さん
- ④ 20年後の社会 …城西高校 安永潔校長先生
- ⑤ 神山町の森林の現状と神山分校への期待 …神山町林業活性化協議会 高橋幸次さん
- ⑥ 学校視察(きのくに国際高等専修学校、大阪府立松原高校、愛農学園)

同時に、30~40人くらいで勉強会の内容や学科再編の方向性を、保育所・小中学校の先生や企業の方々、生徒にも参加してもらって、みんなで話し合う場を持つてきました。



勉強会や明日会の様子、この経験から受け取ったもの

森山) この流れから学科再編に行き着くわけなんですけれど、当時の様子を知る人は限られています。安永先生と樋口さんから、当時の様子やこの経験から受け取ったものを聞かせてもらえますか。

安永) 安永と申します。やっさんと呼んでください。2015年から3年間ここで勤務させていただいたんですが、その頃は県から言えばまだまだ少子化の影響を受けて高校の再編が進んでいる時期でした。腕を組んで座っているだけではつぶされてしまう可能性があった。ましてや、神山校は分校ですから、統合はなく、廃止という形になります。そういうわけにはいかなかったという現状がありました。

そういう状況で学校に来てみたら、先ほど丸山先生からあったように、すでに外に向いて、大きく動き出していた。まちを見れば、学校とまちとつなぐことをやってくれていた。そして将来にまちをつないでいく動きもある。ちょうどそういう時期だったわけです。これまでの私の経験からいえば、止まっている学校と動いている学校がある。学校まわってみたらよく分かる。止まったら、いつ首を切られるか分からない。けれども、この学校は動き始めている。

勉強会では、神山町そして伝統文化の大切さを再認識させられました。勉強会や明日を考える会を通して、結果的に学科再編が行われました。学科再編をするために絶対になくてはならないものが一つあります。それは地域の人の熱い気持ちなんです。分校に対する熱い気持ちを感じられた。だから踏ん切れた。学科再編に行き着いた。という気がします。いま思えば、特別なことじゃなくて、そうした自然の流れのなかで学科再編が行われていったのかなと。

樋口) いまは2年生と3年生の授業に社会人講師として入っています。

当時(2017年)はフードハブの社員として会に参加させてもらっていました。フードハブに入る前は学校で働いていたという経験もあったので、学校という場所が地域の人がすごく入りづらい場所だろうなとずっと感じていました。明日会に参加させてもらったとき、地域の人にとって関わりしろがある学校ってすごくいいなと感じました。

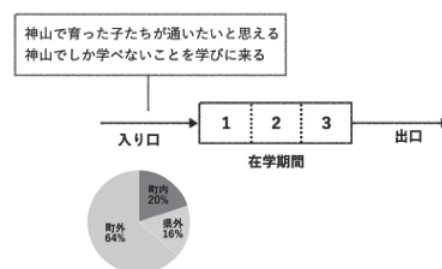
この中には大人だけでなく高校生もいて、高校生の声をちゃんとまちの人が聞ける場自体があたたかないなと思いました。学校への期待というのはつまり子どもたちへの期待で。ベテランの大人から高校生までと一緒に考えている場というのが、熱くてじんわり、毎度ちょっと涙が出るような場面もあったかなと、思い返します。

そういう場に関われたのはいまも私の中に残っていて、こういう風と一緒に作る場が地域に存在していて、それが公立学校であるということが、とても大きなことなんじゃないかなと思っています。

森山) 当時の様子を知っている二人に話してもらえ、この場がとても貴重だなと思っています。

明日会でかわされた話はたくさんあるんですが、今日は一つだけ、地域留学につながることをお話します。

神山校の「入り口」と「出口」があるとして、「ここしか行けない」と言われて来ましたという子が結構いるという課題感を先生方から聞いていました。町外からにしろ、町内からにしろ、「ここに来たくて来た」という生徒を増やしていきたい、そういう学校になっていくといいよね、という話が明日会で交わされていました。地域からすると「地域の子が行きたいと思える学校であってほしい」という願いがありましたし、外から来る子からしたら「神山がいい」「神山でしか学べないことを学びに来る」という学校になっていくといいなと。そういう学校が実現すると、町内からの進学率が上がったり、徳島を飛び越えて県外からあえてここに来る子が、アプローチしたら結構いるんじゃないか、みたいな仮説を持って地域留学がはじまっていきます。県外から来るようになると、地元からの見え方も変わるんじゃないかという話をしていました。



実際に受け入れると、たくさん来てくれたんですね。2019年度からスタートして、全国津々浦々から。県外だけでなく、鳴門や脇町からも来てくれるようになりました。



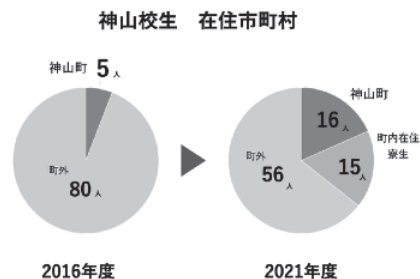
関わる大人が年齢も経歴も多様な大人がいるところ、暮らしをつくることを大事にしているんですけども、本当に毎日話し合っているんですね。日々の食事や掃除当番、月1では全体会議をスタッフと寮生で。それぞれの心地よいペースは違うので衝突することもあるって、それをどうするか話し合う経験を重ねています。



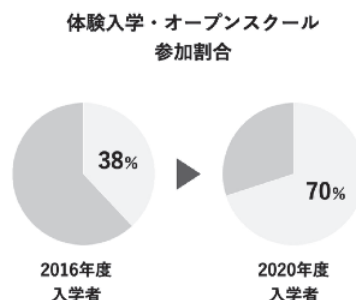
もう一つ大きいのは、食事づくり。一般的な寮だと食事が出てくるんですけど、あゆハウスでは朝晩のごはんを自分たちでつくっています。



2016年時点では町内からの進学は1割に満たなかったところが、いまは町内進学と寮生を合わせて3割以上が町内に暮らしています。



体験入学やオープンスクールの体験割合にも表れています。事前に訪れて、神山町や神山校の様子を見て「面白そうだな」と思って入学してくる子たちが増えています。



地域からの反応

森山） あゆハウス担当の秋山から、寮が生まれて地域からどのような反応があるか話してもらいたいと思います。

秋山） 立ち上げの時期から関わって、運営にも関わっています。多様なハウスマスターがあゆハウスに関わっていて、それが寮生と地域の入り口になって多様な関わりが生まれていると思っています。

もちろん授業でも地域との関わりがあるんですが、最初に広げてくれるのがハウスマスターだなと思っています。例えば地元出身の60代のスタッフが毎週水曜に卓球サークルに行っているんですけど、そこに寮生も行く。これまでは同年代でやって

いたのを高校生という若い世代が参加するようになって、3年目になっても参加しています。

ハウスマスター 3名



食育スタッフ 3名



<年齢>
20代～60代
地元出身・移住者

<経歴>
・映像制作
・保育士
・パン職人
・シェフ
・不動産関係
・地域おこし協力隊

すだち農家さんが人手不足だとハウスマスター経由で声かけがあって、この夏は10人ばかりの寮生がすだち収穫を手伝うことができました。地域の方からも、まちに関わってくれる高校生が土日を含めて増えていることに「有難いなあ」という声を聞いています。

ここから10分くらい奥に行くと上分の江田という集落があるんですが、そこで米作りをしているハウスマスターがいて、寮生も関わっています。3年目に地域の方が言っていたのは「1、2年目に自分たちが教えたことを、いまは3年生が新入生に教えている。しかも教えた通りに、後輩たちに教えてくれていて。ここでお米をつくるということがどんどんつながっていているなあ」と喜んでくださっている声をお聞きしました。

それ以外にも、神山で過ごす高校生が増えて、アルバイトというか働き手としてもまちで見えるようになったなあと思っています。鮎喰川コモンと呼ばれるまちのリビングが1年前にオープンしたんですけど、高校1年生がアルバイトで来てくれてます。彼が来るまでは小学生はパソコンに向かってゲームをしていたんですが、高校生が来てからは外で遊んだりものづくりをしたり、遊びの幅も広がっていて、子どももスタッフも「高校生が来てくれてよかった」と話していました。

森山) 神山で暮らす子が増えて生まれてきた新しい風景を話してもらいました。

県外・遠方生の存在がもたらす影響

瀬部) この学校に赴任して3年連続1年生を担当させていただいています。

県外生や遠い県内から来る子が入ってきて、大きく変化したと思うことは私自身はあまりちょっ

と感じていませんが、これまでは「神山校しか行けない」と言われて嫌々来ていた子が多かったんです。最初の面談で「どうしてうちに来たん？」と聞くと、「ここしか行くとこないって言われた」と言う子が多かったのが1年目。3年目の1年生に話を聞くと「来てみたかった」という子もちょっと増えて来たかなと感じているところです。

なんで増えたのかなと色々考えてみたんですけど、県外から来る子はここが第一志望でどうしても来たくて来る子が多い。そうなると周りの子も「あ、ここって結構いい学校なんかな」「面白い学校なのかも」とプラスの反応があったのかなと。少しずつそういう反応が出てきたように思います。

森山) 県外だからというより「ここにきたい」という第一志望の子が増えてきて、周囲が「意外といいかも」と思うようになってきていると。

神山校への期待

森山) 続いて、県教育委員会の中川先生から。神山校にも長くいらして、いまは県教委の立場から関わっていらっしゃいます。ここまで神山校を見て、そしてこれからの期待を語っていただけたら。

中川) 教育委員会に行くまで9年間、神山校にお世話になりました。今日改めて話を聞いて「そうだったんだ、そういう時だったんだ」と、その時の思い出といいますか、様子が蘇ってきました。

話の中にも出て来たんですけど、生徒が変わってきたというのは実感としてあります。課題研究は丸山先生が中心になって5年くらいずっとやっておるんですけど、最初は手探りの状態で、クラスを中心の生徒に原稿を書いてもらって発表するというような感じでした。それが4年、5年目となりまして、関わった全ての生徒が自分で資料をつくって原稿をつくるようになって。もちろん先生のサポートはありますけれど、自分たちの力でできるだけ運営から発表までやれるようになっていて、レベルも上がって来たなと思っています。去年の3年生は自分も見て来た生徒なので思い入れもあって、がんばったなあという気持ちで聞かせていただきました。今年地域創生類の一期生が卒業ということで、発表会非常に楽しみにしております。

先生方から発表していただいた通り、地域の方々からのサポートもあるんですけど、生徒の気持ちや意志のウェイトが大きくなってきたなと。1年から3年まで勉強していく中で、社会に出て行くために必要な力が身についていっきよるなというのを感じています。

神山校の良いところの一つは、生徒を大事にするところだと思っています。それを基本に、来た生徒を育てることを期待したいと思っています。お答えになっているかわかりませんが、そういうところで捉えています。

森山) 人数が少ないから細やかな関わりができると言われるところもありますけれど、先生方の一人ひとりの生徒を大事にする思いがあってこそだなと思います。

ここまでの話を聞いて

森山) 最後に、今年度から文科省事業の担当になっていただいた佐野さんから。当初は情報量が多かったと思うんですが、これまでの会議や今日の話を聞いての感想をいただけたらと思います。

佐野) プロジェクトチームの会議に月に一度神山校に来させていただいています。最初はどういうところかも分からないので、4月の頭に子どもを連れて来ました。学校の位置を確認して、食事をとったのがはじまりです。2回目の会議の時に、まめのくぼまで連れて行っていただきました。

最初は聞くことで精一杯で、それでも神山校の取り組みが充実されているといいますか、先生や公社の方々の「生徒にこんな体験をさせたい」

「こういう力をつけて行ってほしい」ということを皆さんで共有されていて、そのためにどうしたらできるかを実際に行動に移しているところが素晴らしい、素敵だなと思ったことを覚えています。

私も去年まで学校現場にいましたけれど、したいと思っても「なかなか大変かもな」と足踏みすることもありました。神山校さんは「やってみよう」「動いてみよう」となるのが本当にすごいところだと思います。生徒はそういうところから伸びて来たんだなと思います。生徒が今後卒業されたあとも、神山、徳島などでこれからの社会で生きていくための力を身につける取り組みだなと思うところが素晴らしいと感じています。

来年度以降はコミュニティスクールとして動いていかれると思いますが、地域とともに、地域に開かれた学校としての取り組みをどんどん進めていかれるだろうと。それから生徒自身がその地域で生きていく、社会で生きていく力をつけていく学校になるだろうということを感じていますし、続けていっていただきたいと期待しております。私自身も良い経験をさせてもらっていると感じています。

森山) 関わる前に、神山町やまめのくぼに足を運んでくださるその姿勢が本当に素敵で有難いなあと思って聞いております。これから徳島県内全体でコミュニティスクールが進んでいくところですが、神山で既に培ってきたものがありますのでそこを大事にしながら、実態の伴うコミュニティスクールになっていけたらと思います。

(2) 第2回分科会報告

① まめのくぼプロジェクト環境部門

まめのくぼプロジェクト環境部門は、参加者全員で実際にまめのくぼに行き、在校生の声を聞きながら今後の課題や活動内容を考えた。

まめのくぼの一段目はきれいに整地され、二段目にはそばが栽培されており、その周りには害獣対策の電柵が張られていた。この段を分けているのが3年生が作成した石積みである。3年生からは、「最初は自分たちよりも背の高い草を刈り、水路を通して開拓して、石積みを作って景観を整えた。要となるぐり石を毎週毎時間拾っては積んでを繰り返し、心身ともに大変だったが完成した際は感動した。」と当時の心境を語ってもらった。



現在二段目と三段目の間に石積みを作成している2年生からは、3年生から引き継いだまめのくぼの景観作りを続けていくこと以外にも、地域からも依頼があれば石積みをしていきたいという声が聞けた。

まめのくぼの裏には杉林があるが、ここは急な傾斜地にあって土地活用が難しいため以前から放置されており、景観を損ねている。生徒からも、コンサート会場の作成や果実の栽培などに使えないかと意見は出ているが、今のところ実現には至っていない。

学校に戻り、まめのくぼでの活動意義や今後の展開について、参加者と話し合った。その中でも「年度が経つにつれて、生徒の自主性が高くなっている」、「学校内外問わず、地域の方としてまめのくぼを作りたい」などの意見をいただき、今後のまめのくぼプロジェクトを考えていく上で貴重な話し合いを展開できた。



② まめのくぼプロジェクト食農部門

i まめのくぼの昨年度までの取組について

担当教員：佐藤先生 細川先生 樋口先生

耕作放棄地の開拓と神山小麦と蕎麦の栽培、加工品開発について説明があった。

ii 本年度の取組について

発表者：2年 山口涼香 1年 大東伊織 山口璃恩

4月から現在までの取組についてまとめたものを紹介し、生徒の感想を共有した。

発表者：3年 中川晴詠（オンライン）

課題研究のテーマ「神山コムギを使ったお菓子作りについての試作」の紹介があった。



iii 意見共有

- ・生徒と直接の交流が印象に残りました。自分たちの取組に対して、具体的に説明がありました。栽培やお菓子づくりにとても楽しみながらされていました。これからのまめのくぼの取組が発展していくことに期待しています。
- ・生徒の頑張る姿に熱意を感じました。後輩や私たちにメッセージを送る姿が印象に残っています。頑張ってください。
- ・外部の人、先生、後輩に今までの取組を知ってもらえたと思います。後輩から引き継ぎたいという声が聞こえたので、力が湧いてきました。加工品の開発について、笹川さん、大学の先生からいろんなアイデアをもらえたので、クラス仲間にも伝えたいです。
- ・生徒がまめのくぼの学びから影響を受け、人間的にも成長していると感じました。先生を追い越して、農業を担っていく人材へと成長できると期待しています。



③ 地域留学生のキャリア意識について

第3分科会では、3学年の井口結衣さん(静岡県出身)、2学年の砂川康介さん(大阪府出身)、1学年の片桐理乃さん(愛知県出身)の3名に地域留学について、意見交換を行った。神山校を知るきっかけや入学の決め手となったのは、「地域みらい留学」というイベントや2日間にわたって、神山町のことについて知る「2デイズ」をきっかけに興味を持ち、実際に神山町と触れることでより、入学に対する意欲が湧いたと話してくれた。

実際に入学してみると、生徒と先生の距離が近く、自分たちのしたいことに対して、学校のみならず町全体で環境を提供してくれるため、積極的かつ自分の発言や行動に責任感をもって取り組むことができると語ってくれた。

今後の展望については、3学年の井口さんは神山で培った経験を元に、更なる知識と経験を積むために、農業に関する大学への進学を選んだ。後の2名は、今後については未定ではあるが、「起業をしてみたい」や「経営学や栄養学を学びたい」という夢を語ってくれた。

最後に周りの大人からの意見としては、子どもたちからの声を直接聞くことは、大人にとっても新たな気付きや発見になり、「神山創造学」が生徒の考える場所をつくるいい機会という意見をいただいた。また、今後としては地元を離れ、入学してきた子どもたちの進路が、徳島ではなく県外への就職や進学といった選択が果たしてすべて正解なのかどうなのかといったところに疑

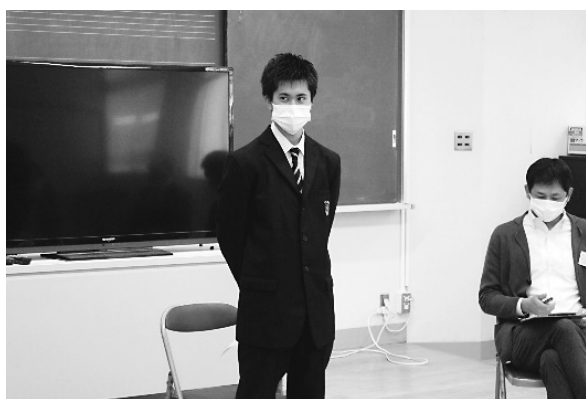
間が残るところではある。しかし、自分で新たな発見や挑戦をし続ける子どもたちがいるかぎり、学校のみならず町全体での更なる理解や協力が必要不可欠になってくるのではないかと感じた。



【全体の様子】



【生徒の様子①】



【生徒の様子②】



【生徒の様子③】

2022/02/14

第3回コンソーシアム会議・運営指導委員会

研究開発報告

① 神山創造学の再構築

富永) 私は現在の3年生が1年生の頃から神山創造学に関わらせていただきました。どのようなことに取り組んできたか、振り返ってみたいと思います。

神山創造学Ⅰでは、伝える力・協働する力・深める力を養う目的で、様々な活動を行ってきました。1学期は神山を知るためのフィールドワークを行いました。ピザ屋、靴職人、パン屋、ビール工房、それから自然を訪れたりアートに触れる体験をしました。



ピザ屋さん



靴職人



雨乞いの滝



アートに触れる

2学期は2日間にわたってしごと体験を行いました。キャリア選択の幅を広げるためと、インタビューを通して人生観や仕事観を養ってもらう目的です。体験先は生徒の興味に応じて決めています。



お弁当屋さん



コーヒーショップ

3学期は地域の方々へ聞き書きを行いました。1年次には様々な研修や講演会も実施しています。



こんにゃく作り名人



山師



上勝町での研修の様子

2年生には4単位のうち2単位はコースに分かれて行いました。

神山創造学Ⅱの主な取り組み

神山創造学ⅡA（環境デザインコース）

耕作放棄地（まめのくぼ）での水路や石積み修復作業など



神山創造学ⅡB（食農プロデュースコース）

耕作放棄地（まめのくぼ）での神山小麦の栽培・加工ソバの栽培など



残りの2単位は合同で、5つに分かれてチームプロジェクトに取り組みました。

神山創造学ⅡAB（チームプロジェクト）

5つのグループに分かれて取り組み、内容を中間報告会・最終報告会で発表した
神農祭プロジェクト 国際交流プロジェクト



3年生には4単位で課題研究があり、これは神山創造学のいわば集大成です。テーマや教員の関わり方はこのようにしていこうと最初の方に話し合いました。

課題研究

自ら課題を設定し、実践を通して学びを深める（集大成）

テーマ

自分の興味のあること・できること・できるようになりたいこと・将来役立つと思うこと
誰かが喜ぶこと・誰かの困りごと・誰かから必要とされること

教員の関わり方

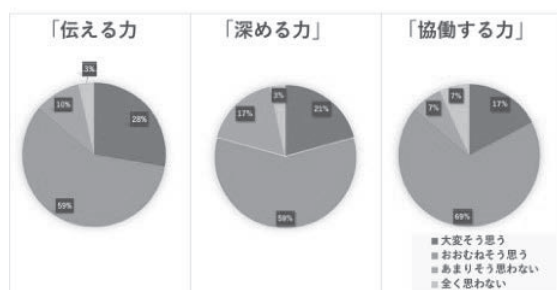
モチベーター・インストラクター・ファシリテーター・メンター・コーディネーター

今年度生徒が取り組んだ内容はこちらです。お菓子作りやお茶で染物づくりをする者、資格取得や野菜栽培に取り組む者もいました。

生徒が取り組んだ研究内容

神山小麦を使ったお菓子作り
木でものづくり（机・椅子）
まめのくぼのお茶を利用して
まめのくぼの副読本づくり
造園技能検定2級取得
トウモロコシ、メロン、トマト栽培
神山校の歴史について
神山町の郷土資料館の民具の資料整理
防災
ダンス など

最後に、3年生へアンケートを実施しました。設問は「神山創造学Ⅰ、Ⅱ、課題研究の授業での様々な取り組みを通して、あなたは次の3つの力がどの程度身についたと思いますか？」です。3つの力ともに「大変そう思う」「おおむねそう思う」が8割を超えていました。



「3つの力以外にどんな力が身についたと思うか？」という質問には、以下のように答えています。「自分で考える力」「努力する・がんばる

力」。「やってみようという行動力」がついたという生徒が多かったように思います。

Q.3つの力以外にどんな力が身についたか？

自分で考える力（3人）
頑張る力・努力（3人）
行動力・やってみようという力（3人）
人前で緊張せず発表できるようになった（3人）
計画を立てる力（2人）
リーダーシップ（2人）
聞いたことをメモする力・聞く力（2人）
パワーポイントなどを使えるようになった（資料づくり）
計算力（図面づくり）
コミュニケーション力

（複数回答可）

成果としては、身につけてほしい3つの力が身についたと感じる生徒が8割を超えたということ。特に「伝える」力に関しては発表する経験が多かったのも、教員側から見ても非常に力をつけたと思います。失敗を経験したり、できないことに挑戦したりして、3つの力以外にも様々な力をそれぞれが身につけたと感じ、自信につながっているのだと思います。また中間報告や発表会等を通して上級生の取り組みを聞き、課題研究を意識する下級生が出てきていることも成果の一つだと感じています。

課題としては、課題研究のテーマを決めるのに今年の生徒は予想以上の時間を要したことです。2年までの神山創造学で取り組んだ内容を3年になったときにさらに追求したいと思う生徒が出てくるのがより理想ではないか、と教員で話し合っています。

またいきなり大きなプロジェクトとして実施するのではなく、小さく試してチャレンジする機会を設けてはどうか、といった意見もありました。

深める力については生徒もあまり身についたと思わないという割合が比較的多く、教員側から見ても「まだ不十分ではないか」と意見が出ていて、さらなる手立てが必要と思われます。例えば、栽培記録や実験データを重視するなどです。

残念ながら、やりたいことをテーマに設定できなかった生徒もいました。この点については、限られた教員数では生徒の多様な要望に対応しきれない場合もあったと思うので、アドバイザーのような外部からのサポートを受ける仕組みがあるといいのでは、という意見もありました。

② 地域性を活かした質の高い教育環境の整備

瀬部) 今回の報告では特に、外部人材を活用した専門人材の配置について報告していきます。

神山校は徳島県で唯一造園について学べる学校として、長年造園業のプロの方と連携を行ってきています。環境デザインコースは2年次に全員が3級造園技能検定に挑戦します。これは基本的な知識や技術の習熟度を図ることのできる検定として、全国的に造園系の学科で行われています。



3級造園技能検定の様子

毎年この時期になると、専門家による講習会を実施しています。一人ひとりの取り組んだものに対して、専門家からアドバイス・助言をいただいています。外部の専門家の方から褒めていただけた生徒は、検定以外の実習でも自信を持って取り組む姿が見られています。



次の段階として、より高度な知識と技能が必要な検定として2級があります。3級よりひとまわり大きな区画で行います。

2級は3級合格者の中から希望者が取り組みます。竹や石の据え付けの方法などポイントを教えてもらっています。仕事として行っているプロの方から教えてもらうことで、私たち教員だけでは教えきれないコツやものの見方を子どもたちは学ぶことができます。



2級造園技能検定の様子



成果としては、今年度は2級受験者が4名とも学科試験に合格することができました。受験しようと思う生徒が増えているようにも思います。また実践的な知識や技術に触れられることも大きな成果ではないかと思っています。

今後の課題は、教員側の課題ですが、早期にチームを結成して指導計画を作成していかなくてはならないと感じています。また学んだ知識や技能を披露する場をもっと設けることで、生徒は専門的な教育を受ける意義を感じることができ、モチベーションを上げていけるのではないかと思います。

質疑応答

尾崎) 鳴門教育大の尾崎です。深める力について、「自己点検を含め十分ではない、先生から見ても課題がある」とお話がありました。一方で、これはある一定レベルに達するのが難しいし、非常に曖昧ですね。これから先で構わないので、「深める力」を抽象的なままでなく、具体的な行動目標として「こういうことできたらすごいよね」と子どもたちにお話していただけると、もっと成長が分かりやすくなるのではと思いました。

③ 地域の生産・交流拠点の創出

細川) 生産・交流の場として圃場整備を進めてきた谷地区まめのくぼの活用について報告します。

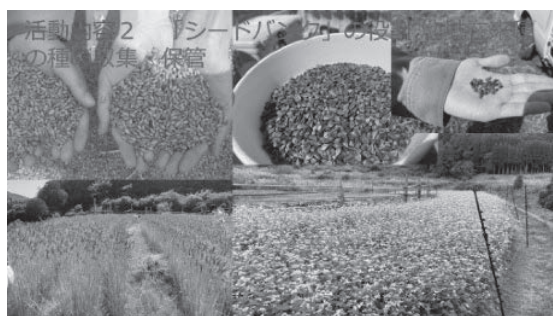


学校の南側、ゆっくり歩いて10分ほどのところにあります。見ての通り、ほとんどが耕作されずに残っています。写真の真ん中が大体5アールほどで、ここが1年目に耕作できるようにやり直した場所です。その下は資材などを置いて使っていて、さらにその下段の8アールほどでも栽培活動を進めています。

このように耕作放棄地を解消し、活動できるようにしてきました。

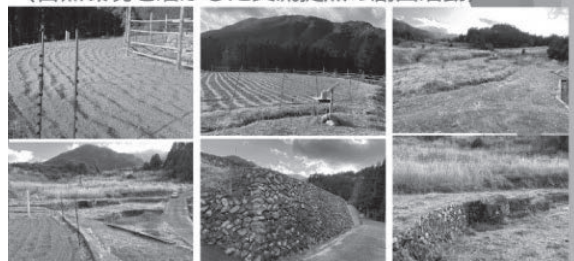


写真の左は、地域で70年つないできた神山小麦の種です。生産農家から受け継いで栽培しています。右は蕎麦です。こちらも上分地区の生産農家から提供いただいて、3年間つないできています。今年は30キロほど蕎麦が採れました。



ここ2,3日の写真です。11月下旬から12月にまいた小麦が発芽しています。まだ手がつけられていなかった場所も草刈りをして耕作できるように進めています。道路の石垣も掃除しました。人が集まれる場所をつくっていきたいと思っています。

活動内容3 棚田の景観保全 (自然環境を活かした交流拠点の創出活動)



今後について。まめのくぼの景観や生態系を大きく崩さない生産活動を実現したい。その対応として、有機農産物の日本農林規格の取得に取り組みたいと考えています。また取り組みを継続して棚田の景観を取り戻し、自然環境を活かした交流拠点をつくっていきたいと考えております。

④ 地域を学びの場とした実践

丸山) 森林ビジョン、耕作放棄地、石積みの3つの柱で取り組んできました。

まず森林ビジョンについて。どんぐりプロジェクトでは「神山町の集合住宅に緑を」と在来種を育てて緑の風景をつくっていくことを4年間やってきました。

林業組合と協働して、学校では操作できない大型機械や伐木講習をさせてもらいました。伐木から出てきた材を有効活用しようと、様々なイベントで販売活動に取り組んできました。

【森林ビジョン】



耕作放棄地対策は、まめのくぼで水路や石積みの修復、小麦や蕎麦、お茶の栽培をしてきました。3年の課題研究ではお茶の葉の有効活用や副読本を作成した生徒もいました。

【耕作放棄地対策】



石積みについて。神山町は非常に棚田の多い地域なので、石積みの技術を得て卒業しようと取り組んでいます。プロの方に来ていただいて、1から勉強をします。

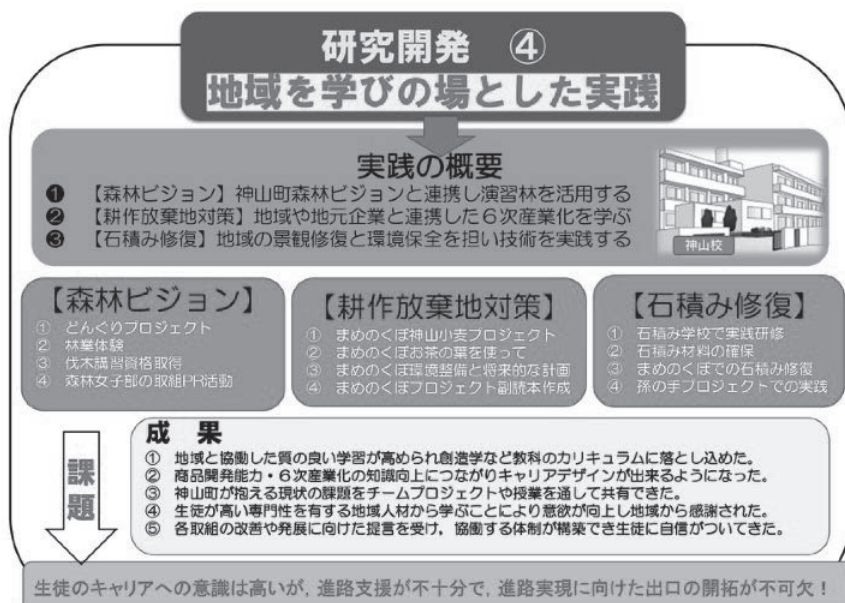
【石積み修復】



困ったのは石の確保です。地元の土建屋さんに分けてもらったり。一番苦労したのは石の運搬だったように思います。また孫の手プロジェクトでも「山へ行く道が不自由なので石積みで階段をつくってほしい」という依頼があり、実践しました。

成果について。まず、質の高い学習がカリキュラムとして落とし込めたこと。これは地域の方々からの協力があったからこそできたことです。これまでできなかった6次産業化が、文科省事業によって実現し、キャリアデザインができるようになりました。神山町の抱える問題が、神山創造学や課題研究を通して共有できたことも成果です。生徒が高い専門性を有する地域人材から色々なことを吸収して、生徒自身に意欲ができました。それだけでなく地域の人も生徒の活躍を感謝してくれています。またコンソーシアム会議や課題研究報告会などで報告することができ、生徒に自信がついてきたと思っています。

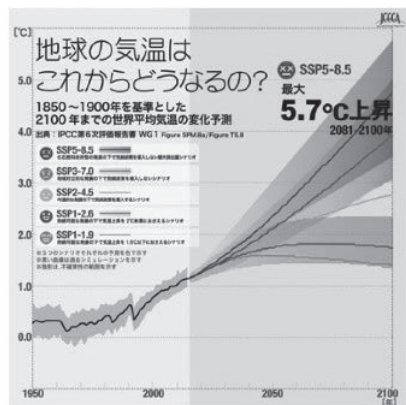
課題としては、キャリアへの意識が高まっていますが、出口の部分の開拓がまだできていません。環境系は農大や林業系・造園系に行けているんですが、食農系は食農に関する就職ができていません。自動車学校や情報処理などに進んでいる。学校で学んでいることが進路につながっていないのが今後の課題です。



パネルディスカッション

森山) はじめに高田研さんからいただいた教職員研修での話をかいつまんで私からお伝えします。高田さんは学科再編のタイミングからずっと見守ってくれていて、3つの提言をいただきました。

1つめ。「農業高校が見直される時代です」とパワフルなメッセージをいただきました。このままいくと地球の気温が最大5.7度上がるというIPCCの予測が出されています。赤いゾーンに進まないよう青のゾーンに抑えないと、と世界で言われている状況です。ただどう頑張っても2度以上は上がる。そして気温が上がったときに真っ先に影響を受けるのが農業です。気温が上がる前提でどう対応していくかを考えないといけない状況にあります。



Jccca hp より

持続可能な開発のための目標が設定されています。その教育的なアプローチとしてESDがある。社会の様々な課題を多面的に自分ごととして捉え、できることに取り組んでいく。そういった教育概念があるわけですが、「まさに神山校の取り組みそのものでないか」と言っていました。

ESD とSDGs



地域の持続可能性を様々な観点から解決するための教育

まさに神山校の取り組みそのものでは・・・



また高田さんが代表を務める団体が主催する「脱炭素チャレンジカップ」をご紹介いただきました。文科省や環境省、企業も参画して実施してい

るそうです。この高校部門のファイナリストまで残った33プロジェクトのうち、17が農業高校だそうです。



ただ、低炭素の取り組みにとどまっただけで、脱炭素の取り組みまでは出てきていない、というのが委員会の中で話されているそうです。「農業高校の先生方には脱炭素と農業の掛け算を考えてもらいたい」とメッセージがありました。

そのヒントとして、化石燃料に依存しない地域社会をつくろうとしている国内外の事例をいくつか紹介いただきました。都留市の馬耕、馬搬。パーマカルチャーの発祥地オーストラリアでの傾斜地をうまく活用した農業。黒マルチを使わない、ミミズのコンポスト、多品種栽培の菜園のデザインなど。

パーマカルチャー

それぞれの風土が育てた、持続可能であった時代の農業を再評価する



地域の先人の知恵を聞き書きで学び取っていく神山創造学、放棄地で在来の種を育てつないでいくまめのくぼプロジェクト、化石燃料を使わず自然の素材で石垣を再生するなどの取り組みは、パーマカルチャーの考え方に共通しているところが非常に多い。今一度、社会的潮流を考えた時、神山でこそできる傾斜地農業の創造的な実践にはとても可能性があるのではないかな。それはまちにとってもですし、これから生きる生徒が学んでいくことはとても重要ではないかな。そういったことを言っていました。

2つめに、もっとWEBの活用を。せっかくユニークな様々な取り組みをしているのに学校HPに活かされていないと残念、とのことでした。

高田さんが教えている都留文科大学でもコロナで様々な活動が制限され、授業などもウェブで行うように。そんな状況を活かして卒業生とオンラインでつないでいるそうです。インターネットを活用すれば、全国の自然農に取り組む人とも出会える。それは生き方を模索する人々の姿を知れる機会でもあるので積極的に進めてもらえたらとお話がありました。

全国の自然農に取り組む若者たちとwebでつなぐ



生き方を模索する先輩たちの姿



3つめは、よく似た高校との協働的ネットワークについて。今年、神山校から東京農大オホーツクキャンパスへの進学が出ました。県内生で奈良のフォレスターアカデミーに進学した子もいます。県外生をはじめ、進路に前向きな子が入っていますが、そういった子たちの進路を開拓していかないといけない難しさがあります。県内に限らない進路あるいはキャリア観の多様化に対して、先生たちで全部はキャッチしきれないかもしれない。多様な進路を支えるためには、近しい学校のネットワークを構築して、手を組む必要があるのではないか。そういったことをしてはいかがでしょうかとお話をいただきました。

オルタナティブな進路指導の情報交換

農業マインド・林業マインドを持った新たな進路の開拓



提言を受けて

阿部) 人と自然が共生する社会の構築を、地域と一体化して取り組んでいくことがポイントになるのかなど。

今後進めていく過程では色々な壁にも当たると思うのですが、高田さんには「積極的にヘルプメッセージを出していいよ」と言っていただいて、それは大事だなと。それによってつながりやネットワークの構築にもつながっていくのだと思いました。様々な人から意見をいただいて、それを学校の中で揉んでいくことで神山校に合う形を模索していけるのではと思いました。

生徒のオルタナティブな進路実現も大事です。また在来種の保存や石垣再生を通した傾斜地農法の話聞いて、持続的な農業システムを地域とできればと思いました。

まとまらないんですが、感じたことをお伝えしました。

神山校の変化と継続

森山) ここまでの取り組みを振り返って、継続すると思うこと、あるいはチャレンジしたり改良していくと思うことについて、それぞれの立場から思うところを聞いていきます。

地域側から「部分的な関わりなのでコメントするのも申し訳ない」といった声も聞いていますが、それぞれの目線を集めて地域と学校をつくっていくことが大事だと思いますので、あまり気にせず話していただいて。聞く側も一旦受けとめる、という感じで今日は進められたらと思います。

鳥庭) 神山町役場産業観光課で林業を担当しております、鳥庭です。3年生の林業体験の際に、地元の神山林業振興会や徳島中央森林組合の方々が受け入れて、自分はそのお手伝いとして毎年関わっております。私自身は神山生まれ神山育ちで、高校は町外へ出ましたが、役場OBにも神山校出身者は多くおりました。地元唯一の高校ということで、我々職員としましても高校への期待は大きいところであります。

継続性というところで、まず地域の子どもの受け皿という意味合いがあると思います。また先生方が尽力している森林女子部、まめのくぼや神山創造学の基本になる、地域を知る取り組みも大事です。神山以外の生徒も在籍されていますが、学び育った地域を知らないというのも大変寂しいことだと思います。過疎化は避けて通れませんが、「神山町っていいところだよな」「あそこは楽しかった

よね」と地域を知ってもらうことが、何十年後かの地域への応援につながったり、縁があれば仕事先になったり。今後子どもたちが先生方の取り組みを継ぐようなことが出てくれば、大変魅力的な学校になるのではと思います。継続という意味あいでも話をさせてもらいました。

変化は並大抵のことではないと思います。継続することで継続性のある、意味のあるものになってもらえたら、と個人的には思っています。補助金頼りで3年、5年だけになってしまっ、お金の切れ目が縁の切れ目になることのないように。学校の中核になる授業や取り組みが、何十年先も続いていくということになるといい。続いていく、良い活動になってくれたらと思います。

森山) 具体的にどうしていくといいんですかね。

鳥庭) 県がお金をつけてくれたらと思います。無い袖は振れないと思いますので。

.....

笹川) かまパン&ストアでパンを焼いています、笹川です。こういった会議もそうですけど、コロナで学校の意味が再定義されるものだなと思っています。今日は2点ほど話します。

1点目。ふと母校のことを思い出しました。僕は東京都立瑞穂農芸高等学校という農業高校出身で、地域との取り組みや農業体験をさせてもらいました。当時の教育目標として「自ら求め学ぶ」と黒板の上に書いてあったのがとても印象に残っています。農業高校で学ぶ意義を考えていて、学校のせいにするでもなく地域のせいにするでもなく、自分が何をやるかが大事だなと思っていたので、この言葉に救われました。

いま母校で教員をしている友人に「いまどうなってるの?」と聞いてみたらこういった返事がありました。「よくよく考えれば20年間くらいの構想の中で、瑞穂農芸に来るやんちゃな面々を自信を持って社会に出すためにはどうしたら良いかというのを、ずっと先生は考えていたようです。体制作りが必要なのかなと思います。いまはこの流れから、校訓が出来て明確な学校目標が定まっています」。1、2年というレベルでなく、何十年単位の先生たちの思いが込められているんだと改めて感じる事ができて自分の学校を誇りに思うと

同時に、そういったことを世の中に広めていきたいなと思っています。



もう1点。最初の頃にパンの授業をオープンスクールでさせてもらったんですけど、一緒にやった先生がとても印象的で。どういった授業をやるか、3~4回ほどミーティングして内容を決めていったんです。先ほど瀬部先生の話に「プロから教わる」という話がありました。学校からすると「依頼」という形になると思うんですが、一緒に考えてもらいたいなと。生徒が学ぶのもそうですが、先生も僕たちも主体的に学べる環境を、一緒につくっていききたいと思っています。

森山) 例えばどんなことを一緒に学べるといいと思いますか。

笹川) 予算ありきとか、これはできる、あれはできないという中で話が進むと、結局できない理由を探すことになっちゃう。やりたいんだったらどうしたらいいかを考える。できないんだったら、できる方法を考える。ゴールを変えるんじゃなくて、どれだけゴールに近づくかを一緒にやっていきたいと思います。

具体的にはいまだと製粉の機械がなくて先生たちも困ってる。6次産業化を掲げながらも、小麦栽培しました、収穫しました、脱穀しました、こういうの作れるよね。というところまで来たけど、製粉どうする、製造どうする、場所がない。となっている。できないわけではないけど、できない理由があるからできない。予算の話で言えば、クラウドファンディングなのか、先生が借金して買うのかわからないけど、どうしたらできるのかを考えられたらと思う。できない理由を考えるのは一番楽なので。考え続けることが大事なのかなと思います。

森山) そういう相談を笹川さんにしても？

笹川) そうですね。製粉やってる人を呼んで設計してもらったりとかもできると思うので。そういう風にできるといいなと思っています。

.....

樋口) フードハブ・プロジェクトの食育を担当しています、樋口です。神山校の社会人講師として授業にも直接関わってきました。まめのくぼは耕す前の状態から、シードバンクのスタディツアーに鳥庭さんとも一緒に出かけたり、何を育てるかフードハブのメンバーも入りながら先生方と考えてきたので、いまの姿は感慨深い。地域の人にも関わってもらいながら進めて来られたというのは、私の中で大きな変化のある3年間だったなと。

まず変化について。神山校に「学びたくて来た」という子の割合が増えていて、課題研究発表会でも「神山小麦を使ってお菓子を作りたい。作ったものを販売したい」という子がいました。なぜ販売したいかという「小麦のお菓子を通じてもっと地域の人に神山校のことを伝えたい」。そういう思いがあるんだなと。

ほかの生徒も、まめのくぼの冊子づくりをがんばってくれて。「私はあの場所がとても好きだけど、みんなはそうでもないだろうし、知っている人自体も少ないからもっと多くの人に伝えたい。私がいいと思っている場所をこれから入学する人に知ってもらいたい」と言っていました。そういう思いを持った生徒が増えていることは成果だなと感じています。

継続の課題について。困っていることとして、食農プロデュースコースで食べる活動が制限されて、思い通りにできないというのがあります。これは先生も苦労されている部分で、どうしたらいいものかなと思っています。

みんなで一緒にできないというときに、どうやって生徒がチャレンジするか。生徒と話していると、「家で神山小麦を使ってさつまいもケーキをつくる」「クッキーをつくってみる」などアイデアが出てきました。できたらぜひ共有してねと伝えたので、多分今度聞けると思います。学校ではできないけど家でどう担保していくか。それぞれがやったことを寄せ集めて学びにしていこうという

か。そういった、これまでの一斉調理とは別の何かが必要なんじゃないかとすごく感じています。

コロナで特に食べる活動は制限の多い2年間でした。この先どうなっていくか分からないけれど、この状況下でいかに充実させていくか、楽しくやっていくか。生徒からすると今しかない時間なので、いかに楽しみながら自分のものにするか。私にとってもチャレンジングな日々が続くのかなと思っています。

私自身はフードハブから独立して食農教育のNPOを立ち上げる予定なので、今後どういう在り方で高校と歩いていくのがいいか模索したいと思っています。

.....

砂川) 大阪府出身、神山校2年生の砂川康介です。

最初来た時には山に緑があることが普通だと思っていたので、杉が多くても特に何も思わなかったんです。けど学校の授業で杉が多いことやまめのくぼの畑に杉が植えられていることを知って、意識するようになりました。それで一層まめのくぼの活動に興味をわいて、木を切ったり石積みをしたり。ほかのコースの子が小麦を育てていたり。これは土地の再生に関わっているなと感じていて、それが楽しい。石積みがうまくいったり、講習でプロの方に褒めていただけると、自信につながったりして目を向けるようになったので、僕が卒業しても耕作放棄地の再生をしたいと思う人が増えてくれたらいいんじゃないかなと思いました。

僕が書いたのは「つなぐ 広げる つくる」。「つなぐ」というのは、神山小麦や土地を再生しても使わなければ結局放棄地になるので、再生した場所を使える状態でつなぐということ。「広げる」というのは、使える場所をもっと増やしていくという意味で。でも広げると管理が大変になると思うので、神山町の人とまめのくぼを通して関わって一緒に管理していけたらいいなと思いました。「つくる」というのは、農業ではマルチを使って雑草を生えないようにするんですけど、ビニールでできているので、「それを気にしたら脱炭素になるんじゃないか」と教頭先生と授業中に喋っていて。僕は面白いなと感じました。耕作放棄地を再生するときに切った木を使って、何か脱炭素的なものを作ったらさらに良くなるんじゃないかと思いました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

竹田) 神山校2年の竹田です。いまは神山に住んでいます。小学4年くらいまでは岡山にいました。こっちに帰ってきた理由は母の病気もあるんですが、神山は空気が綺麗ということで、祖父の家に帰ってきました。

題材について、僕は「繋がりを深める」ということに目をつけました。これは継続でもあり、発展でもあると思っています。少し前から町内に出て関わっていく、地域の人に野菜を売る、などしています。ここ最近では孫の手でつながりが増えたりと発展もしています。いまは一部の人としかつながれていない。けど、もっと大勢とつながらないと話にならない孫の手の活動とかは、もっとまちの人とつながらないといけないと思います。

もう一つ、つながりを深められたらと思うのは、神山校の寮「あゆハウス」について。県外生を呼ぶときにあゆハウスがあって、活気ある寮になってきているけど、学校に対して寮ではこういうことをしていますよという報告がないので、そういうつながりや報告があってもいいんじゃないかなと思います。

森山) 竹田くんはまちの人ともっとつながっていききたいという気持ちがある？ なぜそう思うのかももう少し聞かせてもらえますか。

竹田) いま孫の手プロジェクトで「長期休みだけでなく月1でやろう」と新しい活動をしていて。料金も少し高くなったので、新規の人だったら申し込みにくいかもしれない。リピーターの人が申し込んでくれているけど、もっとつながりが持てたら「私の家もやってもらおうかな」と思ってもらえるかも。そんな感じです。

森山) 孫プロで同じ人たちだけでなく、いろんな人に広く知ってもらいたい、伝えていきたいという竹田くんの使命感を感じながら聞きました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

丸山) 神山校8年目の丸山です。
孫プロについて話したいと思います。まちを将来世代につなぐプロジェクトが始まって6年。孫プロも始まって、当時の公社代表の桴谷さんと学校とが協力してプロジェクトを立ち上げました。困っ

ているところへ手助けにいくという目的でやっているんですが、目的以上におじいちゃんおばあちゃんが環境整備より若い子たちと話すのが非常に楽しみでおれんということを感じました。中には「もっと松の剪定を上手いことしてほしかった」という声も実際にはあります。でもそれ以上に、笑って元気になって、お菓子あげたり昔の話したり、生徒も話を聞いてふんふんと聞いてミラーリングする。学校で教えれんことを、じいちゃんばあちゃんらが教えてくれている。現場のお年寄りからいろんな話を聞ける。孫プロは変化があったなあと思います。

そしておじいちゃんらが生徒を褒めてくれるんです。先ほど石積みのお話をしましたが、石で階段をつくったら登れるようになっておじいちゃんが「ありがとう」と。生徒も自信になるんですよ。一生懸命やっとするから。これが学校の学習につながって、生徒が自信を持って発表したりするようになる。今年の2年生では「先生に伝えたいことがある」と、農業科の先生を集めて生徒たちがプレゼンをしたんです。「販売実習について見直してほしいことがあるんだ」と生徒が自主的に先生へ意見を伝えた。いままでそんな生徒は出てこなかった。まさにこれが深める力だなと。前半では深める力が薄いなという話もありましたが、できる生徒はできています、私の感覚では。こういったものを見本にして、後輩にも伝えて、「深める力ついとるぞ」と自信をつけさせていきたいと思います。

森山) 今後、もっとこうなっていったらいいんじゃないかということは何？

丸山) 今年、梅田さんに孫プロのサークルをつくってもらいました。6人が自主的に段取り組んで、道具のメンテナンスしたり、事前に道具の準備をしたり。これを後輩にどんどんつないでいってほしいと思っています。

運営指導委員から指導助言

佐山室長) これからの時代、デジタル化が始まりますし、脱炭素ということで環境問題も山積しております。大きく社会が変わっていく中で、自ら考える力や他者と協力する力が大切だと言われております。来年度から始まる新しい学習指導要領でも探究学習が重視されています。

神山校が取り組まれてきた神山創造学や課題研究は探究の過程を体験させるというのがメインになっていったかと思います。自ら考える力も、他者と協力する力も、育成されてきた。学習指導要領にあることを先進的にやってきたのが神山校でないかなと思います。発表会も見させていただきましたが、身につけた力を発揮できていたように思います。生徒もアンケートで8割実感をしているようですので、生徒自身も変わってきて、先生も実感されているんじゃないかなと思います。

コミュニティスクールを導入されるとも聞いております。地域と連携しながら引き続き取り組んでいただきたい。県の方でも様々な事業をしておりますので活用していただけたらと思います。

中山) 神山校は最高だと、私は思っております。あゆハウスの寮生さんとも交流があるんですが、彼らは「神山校は大人が近い」「体験がいっぱいだ」と言うんですね。楽しんでいる姿をすごく感じることができます。

先ほど「褒められる中で自信がついていく」という話がありましたが、生徒さんも自分たちが地域の中で役に立っている感じがあると思うんですね。ただそれは一方向でなく、地域の人も高校生のために役に立っているという感じがあると思うんです。今後はそういった接点をさらに増やしていけたら。また最初にヘルプメッセージの話もありましたけれど、私も引き続き神山校の方々と一緒に考えていきたいなと思っています。

松山) 深く考える力については、教育活動の中で「なぜ？」という問いかけが必要だと思っています。問いかけが散りばめられて、解決する中で、物事の思考が深まっていくんですね。耕作放棄地の問題を取り上げても「なぜ？」が必要。脱炭素社会の可能性が指摘されていますが、なぜいまその到達点に立っているのか。高校生なりに理解しておいてほしいなと思います。

もう一点。いわゆる農業・林業マインドを生かした進路選択も大事になってくると思います。いわゆる偏差値にとらわれない、豊かな人生への目標・価値観が身につくと思うんですね。様々な体験を通じて学んでいくことはとても重要です。一方で読書や、国語、英語、数学の勉強でもしっかり力をつけていく。そうして豊かに育っていくことが望ましいなと思っています。神山校の先生方、本当にご苦労さまでした。この成果を今後とも生かしていただけたらと思います。

高橋) 私は6年あまり教育委員会でお世話になっていますが、その間神山校は大きく変わってきたと思います。県外卒はだいぶ前からありましたが、なかなか入学してくれる方がいなかった。それがもう3年目ということで、県外から来た生徒さんたちが大きな影響を与えているんじゃないかなと思っています。

また、私はまめのくぼの近くで生活しております。小さい頃はまめのくぼが身近な山で、夏にはラジオ体操の前後で行ったりカブトムシをとったりしていました。そういった土地が荒れ果てていたのですが、ここ数年で新たに開墾してくれて、道の掃除もしてくれて、非常に嬉しく思っています。今年で事業は終わりですが、今後も出来る限り協力をしていきたいと思っています。

IV 成 果 ・ 課 題

1 今年度の成果目標と評価

(1) 本構想において実現する成果目標の設定

- ① 本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合44%（目標値50%）
- ② 自分たちの取組が地域貢献につながっていると感じる割合79%（目標値80%）
- ③ 高校時代を過ごした地域で働いたり暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいと考える生徒の割合56%（目標値80%）
- ③ 新入生の体験入学参加者割合53%（目標値90%）

(2) 地域人材を育成する高校としての活動指標

- ① 校庭マルシェ開催回数1回（目標値4回）、森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数8回（目標値5回）、孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数0件（目標値2件）、石積み実習の実施回数12回（目標値4回）、コース研修の実施回数1回（目標値2回）
- ② 研究活動の発表回数3回（目標値10回）
- ③ 本構想に関する教員研修の実施回数4回（目標値3回）、本構想に関する研究授業の実施回数2回（目標値1回）

(3) 地域人材を育成する地域としての活動指標

- ① スタディツアーの実施回数0回（目標値2回）、コンソーシアム活動回数3回（目標値4回）、耕作放棄地対策活動回数48回（目標値10回）、生産・保管している在来種・固有種の品種の数37種（目標値40種）
- ② ホームページでの取組紹介33回（目標値10回）

2 次年度以降の課題及び改善点

本事業3年間を終えて、生徒自身が地域で学び地域で育っていくための地域内モデルの構築ができた。それと同時に、課題探求型学習において、自ら学びを進めていき、神山校で育てる力「伝える力・深める力・協働する力」が身についたとする生徒が80%となった。多くの生徒が学校設定科目「神山創造学」1年次のフィールドワークや仕事体験、2年次でのチームプロジェクトを通して、主体的に課題を見つけ解決に向かう学び方を経験として蓄積していった結果につながった。今後の課題として、地域内での学びの面では「伝える・協働する」を育てるプログラムは構築できたが、「深める」面で個々の生徒に応じた指導方法を研究していく必要がある。地域内で育てる面では、環境デザインコースでの学びを生かした進路(林業・造園関係)へ進む生徒は増加傾向にあるが、食農プロデュースコースでは学びを生かした進路につなぐことができていないことが挙げられる。また、本事業3年間でのコンソーシアム体制の継続も課題となってくる。改善点として、生徒に個々に応じた「深める力」を身につけさせるプログラムの作成、食農プロデュースコースでの学びを生かした進路先の確保を行っていくことと施設設備面の充実を行い、専門的知識・技術の習得を図れる環境整備の必要がある。またコンソーシアムの維持について、次年度から開始する学校運営協議会（コミュニティースクール）を母体とした地域連携部会の中で、地域と協働したプロジェクトや地域の課題解決に向けた活動を計画実施し、神山町創生プロジェクトの内容に照らし合わせた活動を行い、地域との協働を主軸においた教育活動を行っていく。

V 資 料

ふりがな	とくしまけんりつじょうせいこうとうがっこうかみやまこう	指定期間	2019～ 2021
学校名	徳島県立城西高等学校神山校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合						単位： %
a	本事業対象生徒：		24.0%	50.0%	44.0%	50%
	本事業対象生徒以外：		17%	17%	—	—
目標設定の考え方：本事業に関連する授業内外の活動を経験して、自らが希望した進路を実現できる生徒の割合						
自分たちの取り組みが地域貢献につながっていると感じる生徒の割合						単位： %
b	本事業対象生徒：		74.7%	75.0%	79.0%	80%
	本事業対象生徒以外：		—	—	—	—
目標設定の考え方：校内アンケートを実施						
(その他本構想における取組の達成目標)						
高校時代を過ごした地域で働いたり暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいたいと考える生徒の割合						単位： %
c	本事業対象生徒：		55.7%	44.4%	56.0%	80%
	本事業対象生徒以外：		—	—	—	—
目標設定の考え方：校内アンケートを実施						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
校庭マルシェ開催回数						単位： 回
a	—		2回	1回	1回	4回
目標設定の考え方：2年生神山創造学のチームプロジェクトの一環で生徒たちが企画し、実施する回数						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数						単位： 回
a	—		7回	8回	8回	5回
目標設定の考え方：2年生神山創造学のチームプロジェクトの一環で生徒たちが企画し、実施する回数						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数						単位： 回
a	—		2件	0件	0件	2件
目標設定の考え方：孫の手プロジェクト自体は例年10～17回ほど依頼がある。そのうち石積みに関する依頼件数						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
石積み実習の実施回数						単位： 回
a	—		6回	7回	8回	4回
目標設定の考え方：孫の手プロジェクトとして有償で依頼を受けるまでのトレーニングとして実習を行う回数						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
コース研修の実施回数						単位： 回
a	—		1回	0回	1回	2回
目標設定の考え方：コース別で生徒が実地研修を行う回数。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
研究活動の発表回数						単位： 回
b	5回	10回	10回	3回	3回	10回
目標設定の考え方：校外で生徒または教職員が研究活動内容を発表する回数						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
本構想に関する教員研修の実施回数						単位： 回
c	—	5回	3回	3回	4回	3回
目標設定の考え方：学期ごとに本構想の振り返りを教員間で実施する回数						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
本構想に関する研究授業の実施回数						単位： 回
c	—	—	2回	1回	2回	3回
目標設定の考え方：教職員やコンソーシアム構成組織、運営指導委員会のメンバーらが見学することのできる研究授業の回数						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位：
a スタディツアーの実施回数	1回	—	1回	0回	0回	2回
目標設定の考え方：生徒、教員、コンソーシアム構成員等、多様な組み合わせで訪問する回数						
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位：
a コンソーシアム 活動回数	—	—	3回	2回	3回	4回
目標設定の考え方：コンソーシアム構成組織へ呼びかけ、学校見学や進捗状況の報告・議論等を行う回数						
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位：
a 耕作放棄地対策 活動回数	—	—	15回	24回	48回	10回
目標設定の考え方：耕作放棄地を活用して作物を生産できる環境を活動を行う回数						
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位：
a 生産・保管している在来種・固有種の品種の数	30種	35種	37種	37種	37種	40種
目標設定の考え方：高校と協力して在来種・固有種の種および苗を生産・保管している種類の数						
(その他本構想における取組の具体的指標)						単位：
d ホームページでの取組紹介	—	—	6回	14回	33回	10回
目標設定の考え方：神山町のホームページに城西高校神山校と連携した取組を掲載する。						

< 調査の概要について >

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）	88	89	81	85	85
本事業対象生徒数			81	85	85
本事業対象外生徒数			0	0	0

教育活動

(1) 教育課程

平成31年度入学生

教 科	科目 類(コース)・学年	地域創生類							
		環境デザインコース				食農プロデュースコース			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	3			3	3			3
	数学 A		2		2		2		2
	○数学探究			2	2			2	2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	物理基礎			● 2	● 2			● 2	● 2
	化学基礎			○ 2	○ 2			○ 2	○ 2
	生物基礎		2		2		2		2
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I ・美術 I ・工芸 I	☆ 2			☆ 2	☆ 2			☆ 2
外国語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			2	2			2	2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報							○ 2	○ 2
	子ども文化							2	2
	フードデザイン						2	2	4
農 業	農業と環境	4			4	4			4
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2	2			2
	野菜						2		2
	果樹			● 2	● 2			● 2	● 2
	農業機械			○ 2	○ 2				
	植物バイオテクノロジー						2		2
	森林科学		1	2	3				
	造園計画		2	2	4				
	造園技術		2	2	4				
	環境緑化材料			2	2				
	測量		2		2				
	生物活用							2	2
	グリーンライフ						1	2	3
	○神山創造学Ⅰ	2			2	2			2
	○神山創造学Ⅱ A		4		4				
	○神山創造学Ⅱ B						4		4
	総合的な学習の時間 (代替：課題研究)								
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の()は内数, 時間外実習を表す

令和2年度入学生

教 科	科目 類(コース)・学年	地域創生類							
		環境デザインコース				食農プロデュースコース			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	3			3	3			3
	数学 A		2		2		2		2
	○数学探究			2	2			2	2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	物理基礎			● 2	● 2			● 2	● 2
	化学基礎			○ 2	○ 2			○ 2	○ 2
	生物基礎		2		2		2		2
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I ・美術 I ・工芸 I	☆ 2			☆ 2	☆ 2			☆ 2
外国語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			2	2			2	2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報							○ 2	○ 2
	子ども文化							2	2
	フードデザイン						2	2	4
農 業	農業と環境	4			4	4			4
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2	2			2
	野菜						2		2
	果樹			● 2	● 2			● 2	● 2
	農業機械			○ 2	○ 2				
	植物バイオテクノロジー						2		2
	森林科学		1	2	3				
	造園計画		2	2	4				
	造園技術		2	2	4				
	環境緑化材料			2	2				
	測量		2		2				
	生物活用							2	2
	グリーンライフ						1	2	3
	○神山創造学Ⅰ	2			2	2			2
	○神山創造学Ⅱ A		4		4				
	○神山創造学Ⅱ B						4		4
	総合的な学習の時間 (代替：課題研究)								
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の()は内数, 時間外実習を表す

令和3年度入学生

教 科	科目 類(コース)・学年	地域創生類							
		環境デザインコース				食農プロデュースコース			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	3			3	3			3
	数学 A		2		2		2		2
	○数学探究			2	2			2	2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	物理基礎			● 2	● 2			● 2	● 2
	化学基礎			○ 2	○ 2			○ 2	○ 2
	生物基礎		2		2		2		2
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I ・美術 I ・工芸 I	☆ 2			☆ 2	☆ 2			☆ 2
外国語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			2	2			2	2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報							○ 2	○ 2
	子ども文化							2	2
	フードデザイン						2	2	4
農 業	農業と環境	4			4	4			4
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2	2			2
	野菜						2		2
	果樹			● 2	● 2			● 2	● 2
	農業機械			○ 2	○ 2				
	植物バイオテクノロジー						2		2
	森林科学		1	2	3				
	造園計画		2	2	4				
	造園技術		2	2	4				
	環境緑化材料			2	2				
	測量		2		2				
	生物活用							2	2
	グリーンライフ						1	2	3
	○ 神山創造学 I	2			2	2			2
	○ 神山創造学 II A		4		4				
	○ 神山創造学 II B						4		4
	総合的な学習の時間 (代替：課題研究)								
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の () は内数, 時間外実習を表す

令和3年度 文部科学省指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）
研究開発報告書（第3年次）

令和4年3月 発行

発 行 徳島県立城西高等学校神山校
所 在 地 〒771-3311
徳島県名西郡神山町神領字北399
印 刷 徳島県教育印刷株式会社

